

大垣女子短期大学

紀 要

第 62 号

2021

目 次

総 説

他職種からみた歯科衛生士業務の認知度調査報告…………久本たき子・飯岡 美幸…… (1)

原 著

幼少期からの育ちの中の運動経験が与える大学生の運動機会への影響

—運動系科目を受講する女子大学生を対象に—…………垣添 忠厚…… (9)

新型コロナウィルス感染症 (COVID-19) 対策により行動制限を受けた本学学生の生活様式の変容と健康への影響に基づく授業と学生支援に関する一考察…………垣添 忠厚…… (19)

保育者養成におけるストップモーションアニメーションを使ったおりがみ動画による造形表現の指導への効果の考察…………立崎 博則…… (35)

初年次教育における他学科学生との交流の効果…………茂木 七香・矢田貝真一…… (45)

大学の授業における匿名発言の有用性について

～「sli.do」の利用を通して～…………茂木 七香…… (51)

資 料

コロナ禍での学生相談室の活動…………茂木 七香…… (61)

彙報 (学外における主な研究・教育並びに社会活動) ……………… (67)

BULLETIN OF OGAKI WOMEN'S COLLEGE

NO.62 (2021)
CONTENTS

【Reviews】

Report of a survey report of on the recognition of dental hygienist work
from the perspective of other professions Takiko HISAMOTO, Miyuki IIOKA (1)

【Original Articles】

Impact of exercise experience in growing up from childhood on
exercise opportunities for college students
— For female university students taking athletic courses — Tadahiro KAKIZOE (9)

A Study on Classes and Student Support Based on Lifestyle Changes
and Health Impacts of Our Students Whose Behavioral Restrictions Due
to Countermeasures for Coronavirus Disease (COVID-19) Tadahiro KAKIZOE (19)

A Consideration for the effect of teaching art expression by origami
movies which is created by the stop motion animation in training
childcare providers Hironori TACHIZAKI (35)

The effect of Students' Cross Departmental Interaction on the
first year experience Nanaka MOGI, Shinichi YATAGAI (45)

The Effectiveness of Anonymous Comments in College classroom
— “Through the use of sli.do” — Nanaka MOGI (51)

【Reports】

The Activity Report of the Student Counseling Room in the
Coronavirus Spread Nanaka MOGI (61)

Miscellaneous (67)

他職種からみた歯科衛生士業務の認知度調査報告

Report of a survey report of on the recognition of dental hygienist work from the perspective of other professions

久 本 たき子 飯 岡 美 幸
Takiko HISAMOTO Miyuki HIOKA

緒 言

21世紀に入り介護保険法の制定や医療保険の診療報酬に周術期口腔機能管理が加わり（2012年）、歯科衛生士業務が拡大している。それに伴い、歯科衛生士は他職種と連携しチーム医療の一員として業務を行う必要が生じている。そこで、歯科衛生士の業務内容を他職種がどの位理解しているかを把握することは、今後も他職種と連携するうえで有益であると考える。

歯科衛生士の認知度調査においては、松田ら¹⁾が大学生を対象として行った研究があり、過去1年間に自分の健康について家族と相談したことがある、あるいは過去1ヵ月間に家族と外出したことがある者は、無い者に比べ男女ともに、歯科衛生士の業務の認知得点が高かったと報告している。また、高阪ら²⁾が成人を対象に行った調査では、歯科衛生士が最も関わる業務の一つである歯石除去の診療受診経験と歯科衛生士の職業と業務の認知との関連について報告している。

今回の調査では、介護保険施設に従事する他職種を対象として、近年の歯科衛生士業務の拡大等に関する設問等を前述した報告の質問紙の業務内容に関する設問を3問追加し、歯科衛生士法に関する設問を2問追加した。

歯科衛生士職種の誕生は、1947年9月に保健所法の改正が行われ、保健所の歯科衛生業務内容が明示された。しかし、780箇所もある全国の保健所すべてに歯科医師を配置す

ることが困難であることから、新しい職種が必要となり1948年（昭和23年）3月に当座の要員として24人の保健婦（保健師）を集め、歯科衛生業務の専門職を誕生させることになった³⁾。これが歯科衛生士の誕生である。

歯科衛生士の当初の業務は、「歯牙及び口腔の疾患の予防処置」のみで、保健所などの公衆衛生現場に配置される要員として誕生したが、臨床現場では歯科診療の現場に人手不足が生じていたため、1955年（昭和30年）、歯科診療補助を行えるようにした。1989年（平成元年）には、歯科衛生士法が一部改正され、歯科保健指導が法に明示されたようになった。

2014年（平成26年）には歯科衛生士法の一部改正があった。改正の内容は「歯科医師の直接の指導」の「直接」と「女子」が削除され、男女の区別をなくすこととした。このような経緯があり、歯科衛生士業務は発展してきた。その背景をふまえて、近年の業務内容を3問、歯科衛生士法に関する設問を2問追加し、歯科衛生士業務が他職種からどの程度認知されているのかを把握する目的で調査を行い、その結果を報告する。

対象および方法

調査期間は、令和元年11月下旬～令和2年2月末日である。対象は、A県内の介護老人保健施設・介護老人福祉施設・通所施設等に従事する介護福祉士・看護師・リハビリ専

門職種等で、調査方法は、調査者が各施設に向き、研究概要を説明し同意書に記入後回答を依頼した。同意書の回収には、本人を特定できないように質問紙と別に集めるよう配慮して調査を実施した。質問紙（表1）の内容は、性別、年齢、職種、歯科衛生士の業務内容等の認知の可否について、業務内容の具体的な設問は、①「フッ化物塗布」、②「予防充填」、③「歯石除去」、④「ブラッシング指導」、⑤「栄養指導」、⑥「リスク検査」、⑦「乳歯の治療」、⑧「乳歯の抜歯」、⑨「麻酔注射」、⑩「歯の健康教育」、さらに追加した設問は、⑪「周術期口腔衛生管理」、⑫「摂食機能療法」、⑬「口腔機能向上支援サービス」、⑭「女子のみの職種」、⑮「歯科衛生士職種誕生時期」の15項目とした。

回答は、「できる（はい）」、「できない（いいえ）」、「わからない」の3段階である。

集計方法は、単純集計である。なお、本研究は大垣女子短期大学倫理審査委員会（申請番号R1-2）による審査・承認を得て調査及び実施した。

162人から回答を得た（回収率100%）

そのうちの160人を有効回答とした（有効回答率98.8%）。無効になった回答者の2名は、記述に不備があり除外した。性別は、男性35人、女性125人であった。

回答者の年齢構成は、20歳代16人（10%）、30歳代23人（約14.4%）、40歳代54人（33.8%）、50歳代40人（25%）、60歳代23人（約14.4%）、70歳以上4人（2.5%）である。図1に示す。

回答者の職種は、介護福祉士・社会福祉士が77人（48.1%）、看護師・准看護師が14人（9%）、リハビリ職種6人（4%）、管理栄養士・栄養士10人（6%）、初任者研修修了者16人（10%）、その他（介護支援専門員、事務員）37人（23%）であった。図2に示す。

表1 質問紙調査

1. 性別：	1.男	2.女
2. あなたのおおよその年齢は、何歳ですか。		
120歳代	230歳代	340歳代
450歳代	560歳代	670歳代以上
3. あなたの職種は何ですか。		
1.介護福祉士	2.社会福祉士	3.看護師
4.管栄養士	5.栄養士	6.調理師
7.理学療法士	8.作業療法士	9.言語聴覚士
10.歯科衛生士	11.介護支援専門員（実務経験職種：）	
12.初任者研修修了者（訪問介護員）	13.准看護師	14.その他（）
4. 歯科衛生士の業務内容等について次の質問に答えてください。		
①むし歯予防のために歯の溝に合成樹脂をつめる。	1.できる	2.できない
②むし歯予防のために歯の溝に合成樹脂をつめる。	1.できる	2.できない
③歯の汚れについて歯石を除去する。	1.できる	2.できない
④歯の汚れを染めて歯磨き状況をチェック後指導する。	1.できる	2.できない
⑤歯の健康のために歯事業費損取分析後指導する。	1.できる	2.できない
⑥むし歯や歯周病になりやすいリスクを検査し指導する。	1.できる	2.できない
⑦乳歯のむし歯の部分を削り金属や合成樹脂をつめる。	1.できる	2.できない
⑧不要になった乳歯を抜く。	1.できる	2.できない
⑨麻酔注射を打つ。	1.できる	2.できない
⑩保健、学校で歯の健康教育をする。	1.できる	2.できない
⑪がん患者への術前・術後の口腔衛生管理（口腔ケア）を行う。	1.できる	2.できない
⑫患者に摂食機能療法を行なう。	1.できる	2.できない
⑬口腔機能向上支援サービス（介護予防）を行う。	1.できる	2.できない
⑭歯科衛生士は、女性のみの職種である。	1.はい	2.いいえ
⑮歯科衛生士は、第二次世界大戦終了後生まれた職種である。	1.はい	2.いいえ
参考文献：松田治子他「A私立大学2年生における歯科衛生士の業務の認知度と健康度」		
口腔衛生学会総会 第60巻 第1号：38-45		
*ご協力有難うございました。		

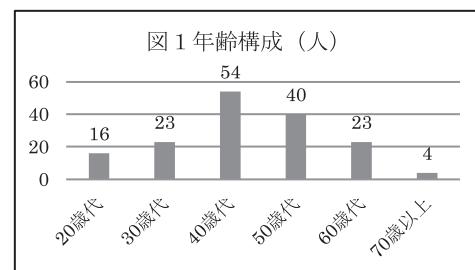


図1 回答者年齢構成

結果

正答率が最も高かった説問は、④「ブラッシング指導」141人（88.05%）であり、次に順位別に示すと⑨「麻酔注射」140人（87.5%）、⑧「不要になった乳歯の抜歯」135人（84.38%）、③「歯石除去」131人（81.8%）、⑭「女子のみの職種」123人（76.88%）、⑦「乳歯の治療」121人（75.6%）、⑬「口腔機能向上支援サービス」121人（75.6%）、①「フッ化物塗布」112人（70.0%）、⑩「歯の健康教育」108人（67.5%）、⑪「周術期口腔衛生管理」102人（63.75%）、⑥「リスク検査」95人（59.37%）、⑤「栄養指導」92人（57.5%）、⑫「摂食機能療法」65人（40.0%）、②「予防充填」

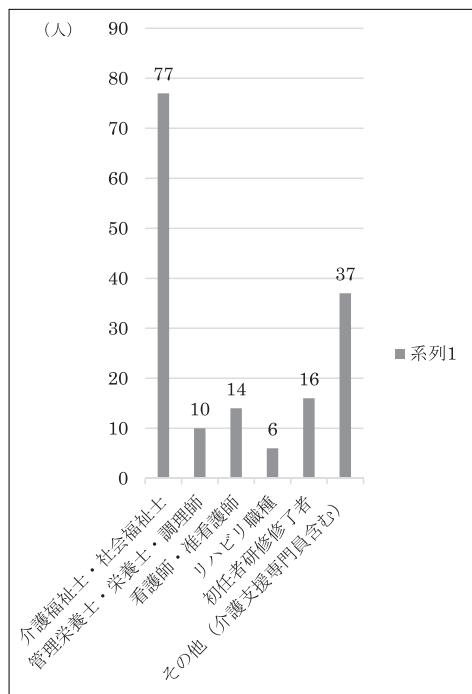


図2 対象者の職種

46人（28.75%）、⑯「歯科衛生士誕生時期」31人（19.37%）であった。

表2 歯科衛生士の業務の可否等の正答率
(n=160)

①フッ化物塗布	可	70.00%
②予防充填	可	28.75%
③歯石除去	可	81.80%
④ブラッシング指導	可	88.05%
⑤栄養指導	可	57.50%
⑥リスクを検査	可	59.37%
⑦乳歯の治療	否	75.60%
⑧乳歯の抜歯	否	84.38%
⑨歯の麻酔	否	87.50%
⑩歯科健康教育	可	67.50%
⑪がん患者への口腔衛生管理	可	63.75%
⑫摂食機能療法	可	40.00%
⑬口腔機能向上支援サービス	可	75.62%
⑭女子のみの職種	いいえ	76.88%
⑯第二次世界大戦後誕生職種	はい	19.37%

設問①「むし歯予防のためにフッ化物塗布を行う。」の結果を図3に示す。

なお、歯科衛生士の業務は棒グラフ:縦（図3～図8）、歯科医師の業務は棒グラフ:横（図9～図11）、業務以外の設問は棒グラフ:横にした（図12、13）。

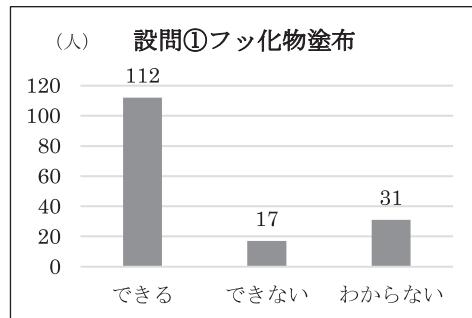


図3 フッ化物塗布

設問②「むし歯予防のために歯の溝に合成樹脂をつめる。」の結果を図4に示す。

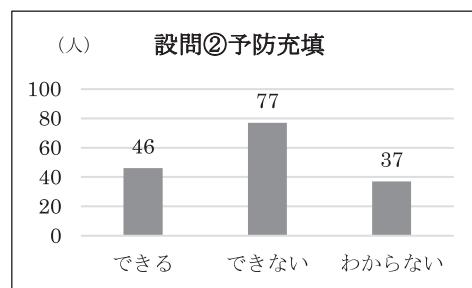


図4 予防充填

設問③「歯の周りにいた歯石を除去する。」の結果を図5に示す。

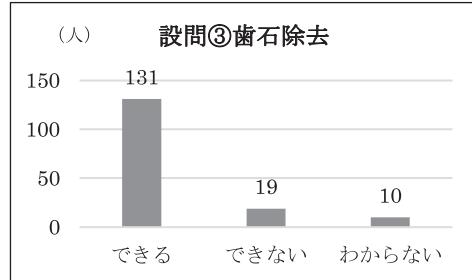


図5 歯石除去

設問④「歯の汚れを染めて歯磨き状況をチェック後指導する。」の結果を図 6 に示す。

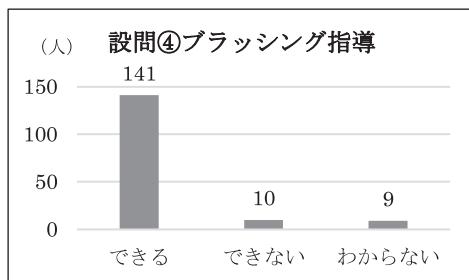


図 6 ブラッシング指導

設問⑤「歯の健康のために食事栄養摂取分析後指導する。」の結果を図 7 に示す。

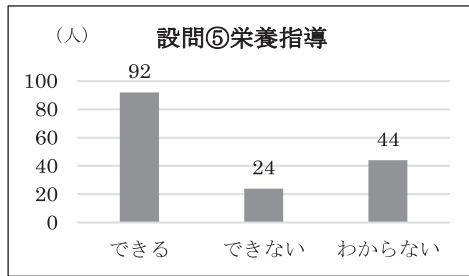


図 7 栄養指導

設問⑥「むし歯や歯周病になりやすいリスクを検査し指導する。」の結果を図 8 に示す。

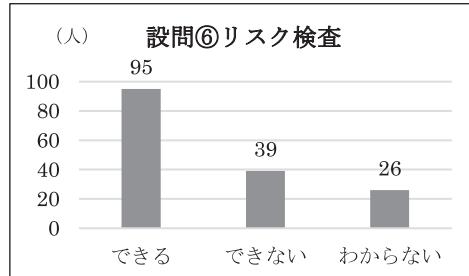


図 8 リスク検査

設問⑦「乳歯のむし歯の部分を削り金属や合成樹脂をつめる。」の結果を図 9 に示す。

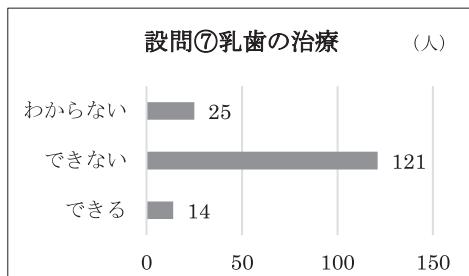


図 9 乳歯の治療

設問⑧「不要になった乳歯を抜く。」の結果を図 10 に示す。

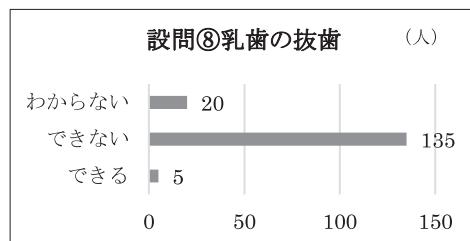


図 10 乳歯の抜歯

設問⑨「麻酔注射を打つ。」の結果を図 11 に示す。

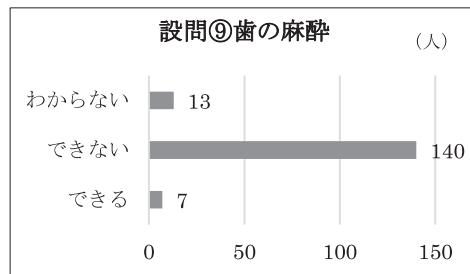


図 11 麻酔注射

設問⑩「保健所、学校で歯の健康教育をする。」の結果を図 12 に示す。

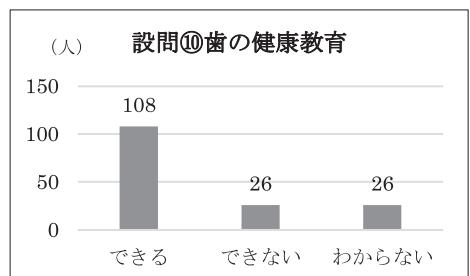


図 12 歯の健康教育

設問⑪「がん患者への術前・術後の口腔衛生管理（口腔ケア）を行う。」の結果を図 13 に示す。

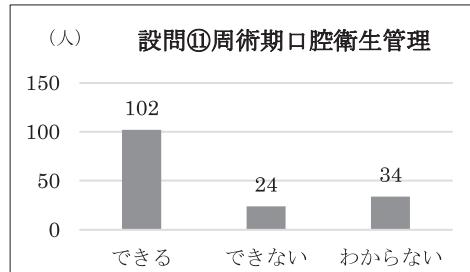


図 13 周術期口腔衛生管理

設問⑫「患者に摂食機能療法を行う。」の結果を図 14 に示す。

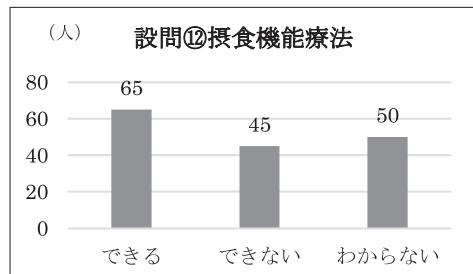


図 14 摂食機能療法

設問⑬「口腔機能向上支援サービス（介護予防）を行う。」の結果を図 15 に示す。

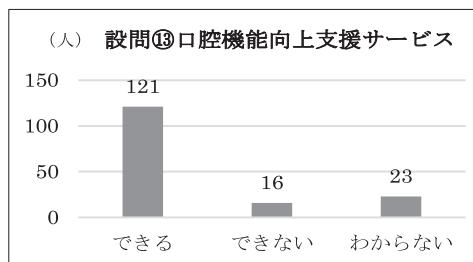


図 15 口腔機能向上支援サービス

設問⑭「歯科衛生士は、女子のみの職種である。」の結果を図 16 に示す。

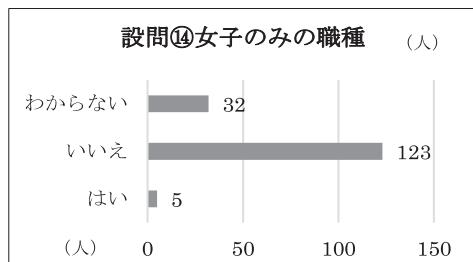


図 16 女子のみの職種

設問⑮「歯科衛生士は、第二次世界大戦終了後生まれた職種である。」の結果を図 17 に示す。

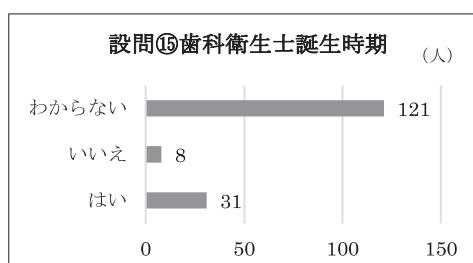


図 17 歯科衛生士誕生時期

考察

1. 認知度の高かった歯科衛生士業務

大学生に行った松田らの調査で、「ブラッシング指導」は認知度が高く男子 65%、女子 80% であった。「予防充填」は最も低く男子 33%、女子 40% であったと報告している¹⁾。

成人を対象とした高阪らの調査では、「ブラッシング指導」、「フッ化物塗布」の順で高く認知されていた²⁾。

また、他大学生に行った合場らの調査で、「ブラッシング指導」は認知度が高く男子 71.5%、女子 83% であった。次いで「歯石除去」、「歯の健康教育」、「リスク検査」は高く、男子 65% 以上、女子 70% 以上が認知していた⁴⁾。

今回の調査でも、「ブラッシング指導」が 88.05% と認知度は最も高く、「歯石除去」 81.8%、「口腔機能向上支援サービス」 75.6%、「フッ化物塗布」 70.0% とこの業務は他職種にも浸透していると考えられる。「口腔機能向上支援サービス」が高い結果（3 位）となった。介護予防施策には、主に①運動器の機能向上支援、②栄養改善、③口腔機能の向上支援がある。今回は対象者が介護保険施設等に所属しているため、介護予防に関する知識は他の職場の職種より高いと思われる。

2. 認知度の低かった歯科衛生士業務

今回の調査で、最も認知度が低かったのは、「歯科衛生士職種の誕生時期」であり、大学生や他の報告で行った調査の項目には入っていないため比較することは不可能である。

その次に低かったのが「予防充填」であり、大学生行った調査報告と同様に認知されていないことが分かった。

追加した設問の「摂食機能療法」の正答率は、40.0% で「予防充填」の次に低かった。「摂食機能療法」は、1994 年医科・歯科同時に保険医療に導入され、26 年が経過している。また、2018 年度から、「口腔機能低下症」が

診療報酬に導入され、地域の歯科診療所において徐々に診療報酬実績を上げつつある。この導入により他職種にも認知度が高まることを期待する。

一般社団法人全国歯科衛生士教育協議会が作成した歯科衛生学教育コア・カリキュラム一教育内容ガイドライン一には、近年の歯科保健医療に関する国民のニーズが多様化し拡大する中で良質な歯科保健医療サービスを提供していくためには、歯科衛生士数を充足し、資質の向上を図ることが重要である⁵⁾と記述されている。

歯科衛生士の教育年限が三年制以上で全国一律になったのが、2010年度（平成22年度）であり、卒業生は2012年度からとなり三年制教育を修了した歯科衛生士は、全国的に10年経過していない。歯科衛生士養成校教員は、一定水準の質を担保できるように努めていかなければならない。

しかしながら、歯科衛生士就業者数は、132,629名（平成30年度）で名簿登録者の2人に1人しか就業していない⁶⁾。平成26年に女性のみの職業ではなくなったが、現状では圧倒的に女性が多い。女性のライフイベント（結婚・出産・育児等）と両立ができるさらなる職場環境の改善及び整備が求められる。

まとめ

歯科衛生業務本来の目的は、歯及び口腔の疾患を予防し、身体の健康の維持増進を図り、QOLの向上を支援する。また、生活習慣病を有する患者の健康管理を行う役割が必要とされている⁷⁾。

歯科衛生士誕生から、72年が経過した。その間に業務は拡大し、職域も拡大している。専門性をもちながら、他職種と連携する力が必要である。長繩は、多職種から求められる歯科衛生士に近づくためには、コミュニケーション能力8つの力（傾聴能力、観察能力、

情報収集能力、理解力、問題分析能力、表現力、伝達能力、文書力）が欠かせない⁸⁾と述べている。

現在、90.5%以上の歯科衛生士が地域の歯科診療所に勤務している。その地域の中で地域包括ケアシステムを強化するには、多職種連携を深めることが重要である。歯科衛生士業務が拡大するなか、歯科衛生士自身が業務内容を他者に理解される発信力が必要であろう。

「プラスシング指導」は最も認知度が高かつたが、近年増加した業務もより認知されるよう歯科衛生士養成校での学内外における学修が歯科衛生士職の基盤となるような教育、すなわちコミュニケーション能力が伸ばせるように教員が取り組んでいかなければならぬ。

また、人々の健康の維持・増進に携わる職種として、生涯にわたり歯科衛生士として就業できる環境を整備していくことが重要である。

今回の調査では、介護保険施設等に従事する専門職等に調査を実施した。その結果、対象者の年齢、職種は様々であった。次回以降の研究では、さらに対象者の職種を限定（医療機関）し研究する予定である。

参考文献

- 1) 松田裕子、森田一三、高阪利美、外山敦史、中垣晴男、梅川正美：A私立大学2年生における歯科衛生士の業務の認知と健康度、口腔衛生学会雑誌、60：38-45、2010.
- 2) 高阪利美、森田一三、加藤一夫、中垣晴男、向井正規：歯石除去後の受診経験と歯科衛生士の職業認知、口腔衛生学会雑誌、61：38-47 2011.
- 3) 遠藤圭子他：全国歯科衛生士教育協議会歯科衛生士教本 歯科衛生学総論、医歯薬出版（株）、東京、2019、11頁。

- 4) 合場千佳子、中垣晴男、森田一三、大澤功、渡邊貢次：大学生の Sense of Coherence(SOC) と歯科衛生士業務の認知度に関する研究、口腔衛生学会雑誌、61：22-29、2011.
- 5) 一般社団法人全国歯科衛生士教育協議会：歯科衛生学教育コア・カリキュラム—教育内容ガイドライン—http://www.kokuhoken.or.jp/zen-eiky/publicity/file/core_curriculum_2018.pdf、2018.3.31.
- 6) 厚生労働省：平成 30 年衛生行政報告例（就業医療関係者）の概況、平成 30 年衛生行政報告例（就業医療関係者）の概況
https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei_houkoku/18/、2021.2.1
- 7) 高阪利美他：全国歯科衛生士教育協議会歯科衛生士教本 歯科予防処置論・歯科保健指導論第 2 版、医歯薬出版（株）、東京、2019、4 頁。
- 8) 長縄弥生：歯科衛生士の基礎力を高めよう—問題指向型で考える、領域を越えた連携のコツ—、障害者歯科学会雑誌 36：72-77、2015.

幼少期からの育ちの中の運動経験が与える大学生の運動機会への影響 —運動系科目を受講する女子大学生を対象に—

Impact of exercise experience in growing up from childhood on
exercise opportunities for college students
—For female university students taking athletic courses—

垣添忠厚
Tadahiro KAKIZOE

はじめに（背景）

運動は健康の3要素の1つであることから、健康的な生活を送るために生涯にわたり適度な運動を行うことが求められている。厚生労働省による国民健康・栄養調査（H29）¹⁾では、20歳以上の成人において「1回30分以上の運動を週2日以上実施し、1年以上継続している者（運動習慣のある者）」は、男性で35.9%、女性で28.6%であり過去10年を見ても大きな増減が認められないという結果が示された。つまり、国民の約7割が運動不足と解釈できる。

1. 問題と目的

1) 問題

日本において体育の授業等では、運動習慣を身につけるための教育がなされている。春日ら²⁾は、発育発達期の小学校低学年までは、運動の得意か否かが体育の好き嫌いの要因となり男女の差異は少ないが、小学校高学年以降は特に女児において、他人からの評価や集団心理が強い要因となり運動、スポーツ離れが始まると示唆している。一方、山本ら³⁾は、幼児期に運動の基礎となる遊びを含めた豊富な自然活動を体験した幼児が大人になり親になると、わが子にも積極的に自然活動を体験させる傾向にあることを明らかにした。これ

らの点から、筆者は運動の得意か否かに影響されない幼少期に、体を動かす遊びや運動を楽しむ体験が豊富であるほど、その後の主体的な運動活動への意識が高まるのではないかと考えた。

2) 目的

本研究では、筆者が担当する運動系科目を受講する女子大学生を対象に、過去の運動体験と健康のための運動への意識の関係について調査し、幼少期からの育ちの中での運動経験が、現在の運動への意識や主体的な運動への取り組みに、どのように影響しているかをまとめ、その結果に基づき体育指導において運動をどのように指導すべきかを考察することを目的とする。

2. 方法

1) 対象

本学の後期の運動系科目「スポーツ演習Ⅱ」「スポーツレクリエーションⅡ」「幼児と健康」「幼児の運動と遊びⅡ」及び前期科目の「障害者スポーツ演習」を受講する学生144人を対象とした。なお、「スポーツレクリエーションⅡ」と「幼児の運動と遊びⅡ」を重複受講している学生は、「幼児の運動と遊びⅡ」において調査を行った。

2) 調査期間

令和2年12月21日～12月28日

3) 調査方法

各科目的授業内で学生に研究趣旨を説明し、Google フォームを活用し、自己記入方式よって行った。

4) 調査の内容

質問項目は、表1のとおり、10項目の質問を行った。

5) 回収率

研究利用の同意のあった107人の提出があり、回収率は74.3%であった。

表1 調査の内容

【質問1】日常生活以外による、最近1カ月の運動する機会についてお聞きします。（選択）
・毎日30分以上の運動をしていた
・週5日以上、30分以上の運動をしていた
・週に2～3日程度、30分以上の運動をしていた
・週に1日程度、30分以上の運動をしていた
・月に2日程度、30分以上の運動をしていた
・月に1日程度、30分以上の運動をしていた
・ほとんどしていなかった
【質問2】運動に関する現在の意識を次から選んでください。（選択）
・運動は好きだ　・運動によって好き嫌いがある　・運動は嫌いだ
【質問3】運動が好きな方にお聞きします。いつ頃、どの様な理由で運動が好きになりましたか。（記述）
【質問4】運動が苦手な方にお聞きします。いつ頃から、どの様な理由で運動が嫌いになりましたか。（記述）
【質問5】これまでに学校の体育以外で取り組んできた運動を教えてください。（習い事や部活、クラブなど）（記述）
【質問6】幼児期（幼稚園、保育園）のあなたの運動遊びについて覚えている範囲で教えてください。（選択）
・外でよく遊ぶ子だった　・外であまり遊ばない子だった　・その他
【質問7】これまでの運動経験（遊びも含む）で、楽しかったことを書いてください。（記述）
【質問8】これまでの運動経験（遊びも含む）で、嫌だったことを書いてください。（記述）
【質問9】運動が健康に及ぼす良い影響について、1つ挙げてください。（記述）
【質問10】運動が健康に及ぼす悪影響について、1つ挙げてください。（記述）

3. 結果

1) 現在の運動習慣について

運動系科目を受講する学生107人の運動習慣について聞いた結果は図1のとおりで、1回30分以上の運動を行っている人数は、「毎日」が8%、「週5日以上」が2%、「週2～3日」程度が9%、「週1日」が21%、「月2日」が4%、「月1日」が5%、「ほとんどしていない」が51%であった。

この結果から表2のように、厚生労働省が示す成人の運動習慣「1回30分以上の運動を週2日以上」を「運動習慣あり」の群、月に何度かの運動機会のある場合を「運動機会あり」の群、運動機会がほとんどない場合を「運動機会なし」の群に分類した。

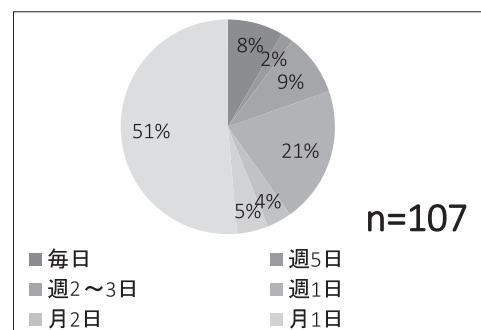


図1 運動習慣（1回30分以上）

表2 運動機会の分類

群	1回30分以上の運動日数
運動習慣あり	週2日以上
運動機会あり	月1～4日程度
運動機会なし	ほとんどなし

結果の分布は図2のとおりで、「運動習慣あり」の群が19%、「運動機会あり」の群が30%、「運動機会なし」の群が51%であった。成人女性の全国平均28.6%と比較すると、運動習慣がある本学の女子大学生の割合は、約9ポイント低いことが分かった。

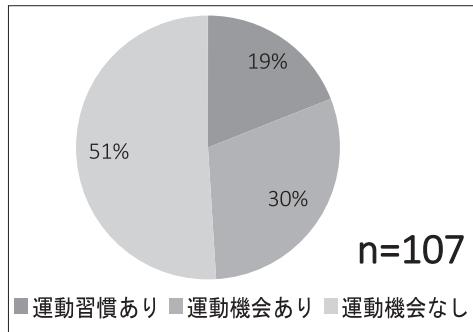


図2 運動機会の分類の割合

2) 運動の好きと嫌いの意識

運動が好きか嫌いかの意識について、「運動が好き」「運動によって好き嫌いがある」「運動が嫌い」の3項目の選択回答を行った。結果は図3-1のとおりで、全体では「好き」が29%、「運動によって好き嫌いがある」が50%、「嫌い」が16%、未回答が5%であった。運動機会の群別に比較すると、「運動習慣あり」と「運動機会なし」では、「好き」において30ポイント、「嫌い」において-10ポイントの差があり、「運動が好き」な学生は運動習慣を身につけやすい結果となった。

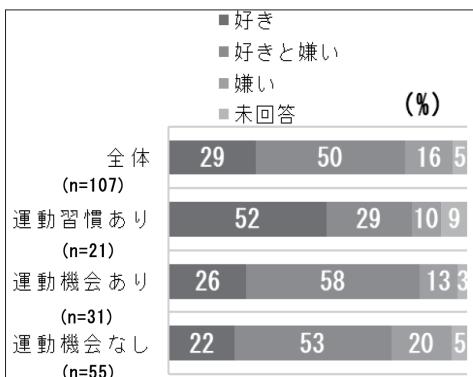


図3-1 運動への意識

運動が好きか嫌いかの意識と運動機会の関係は、図3-2からわかるように、「好き」の35%が「運動習慣」につながっている。「好きと嫌い」及び「嫌い」はともに11%であり約3倍の違いがあった。

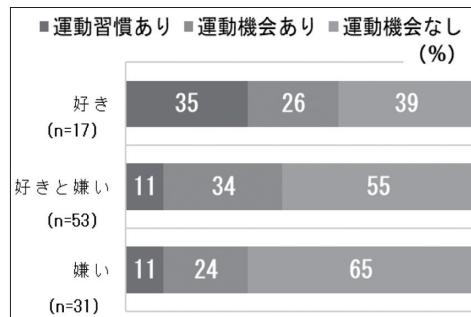


図3-2 運動機会と運動の好きと嫌いの関連

運動が好きである理由を自由記述で聞いたところ38人から回答があった。主な回答を群別にまとめた。

表3-1 運動が好きな理由（運動習慣あり）

- ・幼い頃からよく公園で遊んでいたし、小4からスポーツを習っていたから
- ・小学生から野球やソフトボールをしていたから
- ・小学生の頃、バレーボールを始めたことで好きになった
- ・体を動かすことが好きだから
- ・小学生の時に運動が得意だったから

表3-2 運動が好きな理由（運動機会あり）

- ・保育園の時から遊ぶのが好きで外遊びをよくしていた。
- ・体を動かすのが楽しいから昔から好き
- ・中学の時の部活をきっかけに
- ・小学生の頃クラス全員で遊んだこと

表3-3 運動が好きな理由（運動機会なし）

- ・動くと気持ちいいから
- ・昔から運動が好きで、ストレス解消になる
- ・小学校の頃からバレーボールを少年団でしていて好きになってきた
- ・幼いことから体を動かすことが好きだった
- ・小さい頃から父と一緒に外で遊んでいたから好きになった
- ・体育で自分の体を上手く使えるようになった時から好きになった
- ・ずっと運動してきたから

運動が嫌いである理由を自由記述で聞いたところ 26 人から回答があった。主な回答を群別に表 4 にまとめた。

表 4-1 運動が嫌いな理由（運動習慣あり）

- ・何なく疲れることが好きではなかったので、小中高体育の時間もあまり好きではなかった
- ・走るのが遅いから
- ・運動が出来ないから苦手

表 4-2 運動が嫌いな理由（運動機会あり）

- ・外で寒い時に運動するのが嫌い
- ・苦手でどんな動きをしても上手くいかなくて運動出来る子から見放されたことがあるから
- ・バスケで突き指したり、筋肉痛がひどかつたりして苦手意識が高まった
- ・動くのが嫌い
- ・昔から運動能力が低いから

表 4-3 運動が嫌いな理由（運動機会なし）

- ・小学校の授業で長距離を走るがいつも寒い
- ・球技が苦手
- ・小学生のときの持久走、辛すぎてストレスだった
- ・うまくできなかつたりするから
- ・成長していると感じないから
- ・出来ない運動もあるから（バスケ）
- ・運動が苦手だから
- ・喘息があると知った時から
- ・走るのが遅いから
- ・中学生から、体育がおもしろくなかった
- ・疲れることが好きではなく、小中高の体育の時間もあまり好きではなかった

運動が好きな理由では、幼少期からの運動体験の中で、遊びやスポーツが楽しかったり、体を動かすことが気持ちよかつたり、運動が上手くいったりする経験がきっかけになったことなどが挙げられた。また、少年団や部活動など継続的に運動を続けてきたことも好きになる理由となった。

一方、運動が嫌いになるのは、運動が上手くできないことで苦手意識がついたり、人とのかかわりの中での負の体験や運動中の痛い思いや苦しい思いをしたりすることがきっかけとなる。

3) 運動経験について

次に、高校生までの少年団や部活動など体育以外の運動経験を聞いたところ、結果は図 4-1 のとおりで、「運動経験あり」が 47%、「運動経験なし」が 53% であった。群別にみると、「運動習慣あり」での運動経験者は 48%、運動未経験者は 52% であった。「運動機会あり」での運動経験者は 71%、運動未経験者は 29%、「運動機会なし」での運動経験者は 30%、運動未経験者は 70% であった。

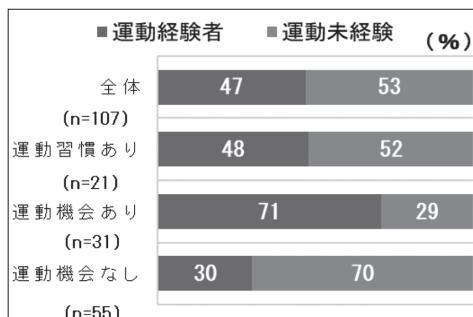


図 4-1 部活動等の経験

運動経験と運動習慣の関係では図 4-2 のとおり、運動経験者が運動習慣につながるのは 20%、運動機会につながるのは 46%、運動機会につながらないのは 34% であった。運動未経験者が運動習慣につながるのは 8%、運動機会につながるのは 17%、運動機会につながらないのは 74% であった。

高等学校までの運動経験者が、大学進学後の運動習慣につながるのは 20% だが、運動をする機会を合わせると 66% であり、運動未経験者の運動習慣や運動機会につながる 25% の約 2.6 倍であった。

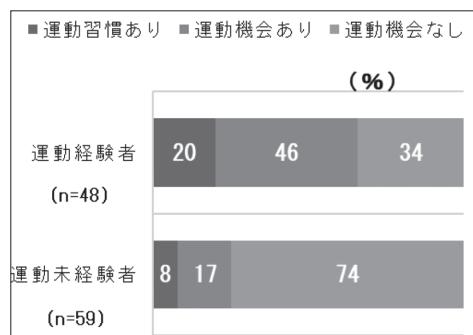


図 4-2 運動習慣との関係

運動経験と運動が好きか嫌いかについてまとめた結果は図5のとおりで、運動経験者の48%が運動を好きなのに対し、運動未経験者は16%と32ポイントの差があった。一方、「運動は嫌いである」と回答した運動経験者が6%であるのに対し、運動未経験者26%であった。運動経験者が運動好きになるのは、運動未経験者の3倍、運動未経験者が運動嫌いになるのは、運動経験者の約4.3倍になるという結果となった。

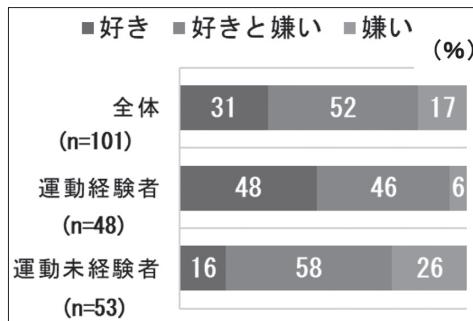


図5 経験者と未経験者の意識

4) 幼児期の運動の状況

幼児期の外遊びの状況を聞いたところ図6-1のとおりで、全体では「よく遊ぶ」が66%、「あまり遊ばない」が21%であった。大学生になってからの運動機会の群において比較しても概ね差はない結果となった。この結果から、幼児期に外でよく遊んだか、遊んでないかは、学生になってからの運動習慣や運動機会にあまり影響しないことが分かった。

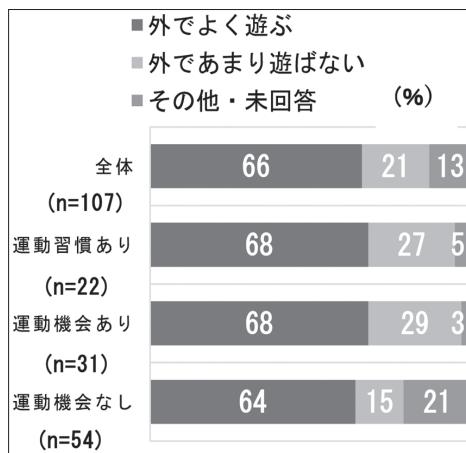


図6-1 幼児期の外遊び

幼児期の外遊びの経験と、その後の小学校から高等学校までの運動経験との関係についてまとめた結果が図6-2である。外でよく遊んだ子が体育の授業以外の部活動等の運動経験につながっていたのは55%で、あまり遊ばなかった子の39%と16ポイントの差があり、外でよく遊ぶ子の方がその後の運動経験につながりやすいことが分かった。

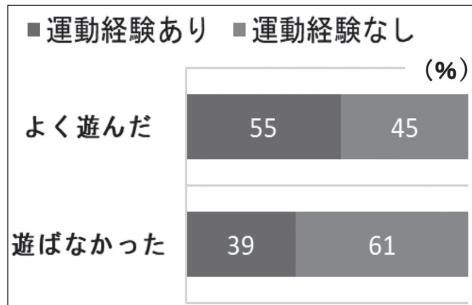


図6-2 外遊びの経験と運動経験の関係

5) 好きと嫌いを分ける運動体験

遊びを含む過去の運動経験から楽しかったことを自由記述で聞いた99人からの回答を、楽しかった体験を5つに分け整理し表5にまとめた。また、嫌だったことを聞いた自由記述の96人からの回答についても、嫌だった体験を6つに分け整理し表6にまとめた。

表5 運動経験で楽しかったこと

<あそび・ゲーム> (42人)	
・鬼ごっこ	・ドッジボール
・だるまさんが転んだ	・なわとび
・田んぼの田	・遊具遊び
・自転車	・一輪車
・自転車	・アスレチック
・小学低学年の頃父が家の中にダンボールと	・雪合戦
かで遊び箱作ってくれてそれをやつたこと	など
<行事や授業> (7人)	
・球技大会、運動会	
・大学のスポーツの授業	
・小学生の頃の体育の授業	
・部活	など
<スポーツ種目> (32人)	
・バドミントン	・テニス
・ソフトボール	・野球
・走る系	・ホッケー
・キンボール	・ボッチャ
・卓球	・器械体操
・器械体操	・新体操
など	
<人とのかかわり> (11人)	
・チームプレーで喜びを共感したとき	
・バレーなど限られた回数のなかでチームと	
協力する運動	

- ・サポートやみんなの応援をすることにも楽しさ
- ・人と関わりながらスポーツすること
- ・知らない人とも仲よくなること
- ・みんなで楽しみながら運動したり試合したりすること
- ・家族と外でバトミントンしたこと
- ・友だちとキャッキャすること

＜向上心・技術の高まり＞ (7人)

- ・試合で勝つこと
- ・ひとつの目標に向かってみんなでがんばったこと
- ・試合や練習で上手くいったとき
- ・サッカーでゴールを決められたこと
- ・球技大会で勝てたこと
- ・自分の特技がいかせたとき

表6 運動経験で嫌だったこと

＜あそび・ゲーム＞ (21人)

- ・かけっこ ・縄跳び ・ドッジボール
- ・ボール遊びが苦手だった ・負けること

＜行事や授業＞ (8人)

- ・本気でやる種目
- ・マット運動や跳び箱などが苦手で、それらの授業形式が自分ができるまでその班は座れないという、プレッシャーが強くかかるという思いをしたのが嫌だった
- ・仲間意識を高めるより勝ちに進む、勝つためなら。という指導員がいたこと
- ・繊細なスポーツが苦手なので授業でやるとなったとき不安だった
- ・集団行動 ・団体競技 ・リレー
- ・マラソン大会で最下位のメンバーの常連だった事 など

＜運動・スポーツ種目＞ (43人)

- ・鉄棒 ・マット運動 ・器械体操 ・水泳
- ・跳び箱 ・走ること ・持久走、マラソン
- ・球技系の種目 ・ソフトボール
- ・バスケットボール ・バレーボール など

＜人とのかかわり＞ (7人)

- ・試合など勝負ことで仲の良い友達に自分が勝ち、友達は悔しがっていてそのあと話す時に気まずかったこと
- ・出来ないことに対し文句を言われたこと
- ・長距離走で自分が遅いのを皆に見られているのが嫌だった など

＜不器用・劣等感＞ (6人)

- ・上手くできないとき
- ・できない自分を見られること
- ・自分の運動神経のなさが目立ったこと
- ・タイムを図って走ること
- ・ボールの競技でチーム戦だと自分が足を引っ張って相手チームに点を取られた時の空気感が嫌で、たとえフォローされても責任を感じるから
- ・ついていけない時が嫌だった など

＜身体的苦痛＞ (11人)

- ・怪我をしたとき
- ・大縄で縄が頭にぶつかるのが怖かった
- ・真冬に授業で持久走をさせられたこと
- ・持久走等の辛いこと
- ・疲れる運動 など

6) 運動体験から得た運動効果の意識

運動が健康に及ぼす良い影響を自由記述で聞いたところ、107人から回答があり結果を表7にまとめた。

表7 運動が及ぼす良い影響

＜身体機能の向上・維持＞ (42人)

- ・体の未発達の所が発達していく
- ・筋肉がつく、抵抗力がつく
- ・適度に運動することで体力がつき、病気になりにくくなる
- ・強い身体を作る
- ・体が強くなることで免疫力が上がる
- ・筋肉が付き、基礎代謝がアップする
- ・体が衰えない
- ・すぐ呼吸が荒くならない
- ・体力維持
- ・体がスッキリする など

＜健康的な生活・生活改善＞ (30人)

- ・体が適度に疲れて睡眠がしっかりと取れる
- ・肩こりや頭痛が減る
- ・便秘解消
- ・生活習慣病予防になる
- ・ダイエット効果がある
- ・体のリズムを整える
- ・長生きできそう
- ・心身共に健康で居られる
- ・寝つきが良くなる、お腹が空く
- ・メタボ解消

＜精神面の安定＞ (21人)

- ・ポジティブになれる
- ・日常生活とかも楽しくなると思う
- ・リフレッシュできる
- ・自律神経が整う
- ・良い気分転換になってストレス発散
- ・気持ちが軽くなる
- ・元気になる
- ・気持ちが軽くなるように感じる など

＜認知機能の活性＞ (2人)

- ・長生きが出来、認知症予防になる。
- ・脳が活性化される

＜コミュニケーション力の向上＞ (3人)

- ・自らを成長する良い機会、コミュニケーション能力を育む場
- ・団体競技は人との協同性を高める
- ・仲間で取り組むことが多いから友達関係が良くなる。

＜その他＞ (9人) 分からない など

運動が健康に及ぼす悪影響を自由記述で聞いたところ、107人から回答があり結果を表8にまとめた。

表8 運動が及ぼす悪影響

<u><負傷リスク> (35人)</u>	
・怪我をする	
・疲労骨折、骨折	
・ルールを守らないと怪我に繋がってしまうこと	
・運動のやり方を間違えると怪我をする	
・怪我が悪化する恐れがある。	
<u><疲労・不快感> (20人)</u>	
・筋肉痛になる	
・疲れる	
・体が痛くなる	
・辛い、しんどくなる	
・筋肉が衰えてしまう	
・汗をかく	
・寒さや暑さなど体温調節	
<u><体調の変化> (15人)</u>	
・体調不良になる	
・生活習慣の乱れ	
・体力が落ちて、免疫が低下する	
・体調をすぐ崩しそう	
・太る、肥満	
・激しい運動で生理が止まる人もいる	
・病気になる	
・ちゃんと運動の後に水分とか取らないと脱水になったりする など	
<u><精神面の低下> (6人)</u>	
・疲れて何もかもやる気がなくなる	
・ストレス溜まり、ネガティブになる	
・嫌いなスポーツだとマイナスな気持ちになる	
・やる気の低下	
・集団スポーツだとチームメイトといい関係が築けていないとストレスになると思う	
・運動の種類によってストレスを感じる	
<u><過度な運動> (10人)</u>	
・無理しすぎやすい	
・やりすぎると体を痛めてしまう	
・運動のし過ぎで体調を崩す など	
<u><特にない> (12人)</u>	
<u><その他> (9人)</u> 分からない など	

高等学校までの運動体験等から得た健康に関する意識と運動機会の関連として、運動機会の分類ごとで比較したところ、運動による正の効果での比較は図7のとおりであった。

「運動習慣あり」の群では、「健康的な生活」に意識のある学生が55%で半数以上と高く、「運動機会あり」の19%と「運動機会なし」の22%の、どちらと比べても30ポイント以上の差があった。

「運動機会あり」の群では、「身体機能の向上・維持」に意識がある学生が51%と概ね半数

を占め、「運動習慣あり」の群23%と28ポイント、「運動機会なし」の群の39%と12ポイントの差があった。

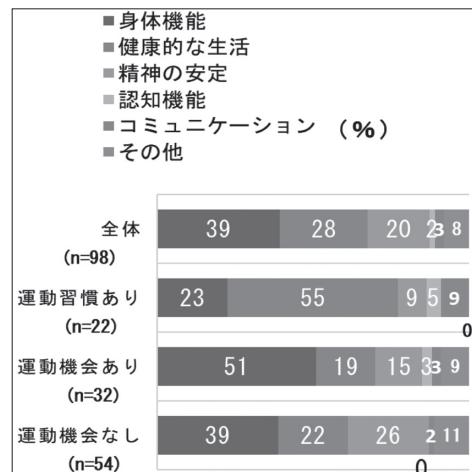


図7 運動による正の効果の意識（群別）

一方、運動による負の効果の意識の比較は図8のとおりであった。

「運動機会あり」の群では、「負傷リスク」の意識の高い学生が48%と約半数を占め、「運動習慣あり」の群の27%と21ポイント、「運動機会なし」の群の26%と22ポイントの差がみられた。

「運動習慣あり」の群では、「体調の変化」の意識が23%であり、「運動機会あり」の群の3%と20ポイントの差があった。

また、運動によって「精神面の低下」となるのは、「運動習慣あり」の群では0%であった。

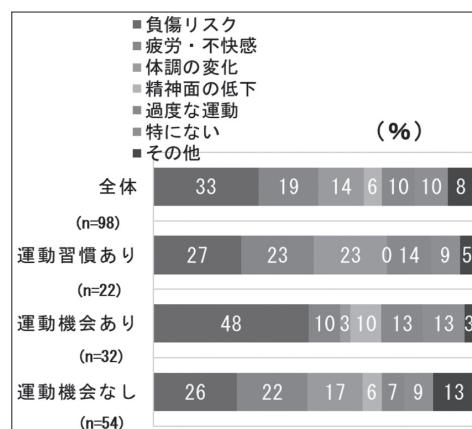


図8 運動による負の効果の意識（群別）

4. 考察

1) 運動への意識と運動機会との関連

調査の対象とした本学の運動系科目を受講する女子大学生において、図3-1に示した「運動が好き」とした学生全体の29%に対し、「運動習慣あり」の群では52%、「運動機会なし」の群では22%という結果から、運動が好きであることが運動習慣につながる傾向にあるといえる。また、図3-2に示した「運動が好き」の群の39%、「運動が嫌い」の群の65%は、大学入学後に運動機会がなく、「運動が嫌い」の群が運動機会につながりにくい傾向が認められたが、運動が好きとした学生の約4割が運動機会にふれていないことも分かった。この点に関しては、中学校や高等学校では各学校に複数の運動系の部活動が設置され運動に取り組みやすい環境にあるが、本学進学後は同等の環境はなくなるなど、生活環境の変化が影響していると考えられる。今後は、生活環境と運動機会の関連を視点に研究を進めたい。

2) 遊びやスポーツ等が与える運動への意識

「運動が好き」と「運動が嫌い」の理由を表3、表4に挙げたが、運動機会の有無による大きな違いはなかった。運動が好きになる理由については、得意であること、技能が高いことだけではなく、スポーツにふれた楽しさによるところが大きい。嫌いな理由についてはうまくできないことやつらい体験がきっかけになっている。運動が好きか嫌いかの意識は、「運動によって好き嫌いがある」とした学生が50%（図3-1）と半数を占めたことから、運動が上手くできるかできないか、運動が心地よいか辛いかだけでなく、集団の活動での様々な体験の影響により、好きな面があつたり嫌いな面があつたりしていると考えられる。運動が好きという意識を高める体育指導には、活動そのものが楽しく感じられる創意工夫が必要である。

3) 運動が嫌いになる理由について

表6を整理すると、個人の運動技能の高まりが求められる活動が運動の負の経験になる傾向にある。「走る」「跳ぶ」「投げる」という3つの動きに男女によって差があることがすでに分かっており、女児は複合的な動きを苦手とするため、これらの動作を必要とするかけっこ、縄跳び、ドッジボール、跳び箱、持久走、ソフトボールなどが苦手な運動となっている。よって、幼少期にこの「走る」「跳ぶ」「投げる」の動きが熟達されることが、苦手な運動やスポーツ種目を作らないことにつながると考える。

また、運動が嫌いになる理由として、身体的苦痛が挙げられている。スポーツ全般において身体機能向上の過程段階に身体的苦痛は伴う。しかし、集団スポーツでは仲間と励まし合ったり、感情を共感したり、競技では記録が向上することによりその苦痛が軽減される。ゲームそのものを楽しむことで活動中に苦痛を感じることもある。しかし、個人競技は、自己の精神と向き合うことが多い。特に、水泳や持久走は、泳ぎや走りが苦手であればその運動自体に楽しみを感じにくいうえ、心肺機能や筋力の持久性も求められ苦しさが強調される運動である。運動嫌いを育てない観点からすれば楽しい運動経験が運動を好きになる意識につながるため、個人競技においては、運動によって自らが成長を感じられたり、楽しみを感じられたりする動機づけが指導者に求められる。

4) 運動経験と運動機会の関係

運動経験者と運動未経験者の運動機会について比較したところ（図4-2）、大学進学後に運動習慣や運動機会がある学生は、運動経験者が合わせて66%、運動未経験者が25%と大きな差がみられた。高等学校までの体育以外での運動経験が将来の運動機会につながりやすいことが明らかになった。幼少期からの育ちの中で、ほぼ全員が経験した体育の授業だけでは、将来の運動習慣や運動機会につ

ながるのは4人に1人程度である。学校体育において、将来の主体的な運動活動につなげる目的は十分に達成できていない。運動経験者の3人に2人が将来の主体的運動に取り組んでいることを考えると、スポーツ教室や部活動の役割は極めて大きい。調査した本学の学生の運動経験者は約半数であったが、この割合を増やすことが学校体育の役割である。様々な遊びやゲーム、スポーツをとおして、運動をめいっぱい楽しむ活動を提供し、子どもたちの「もっと遊びたい」「もっと運動したい」という内発的動機付けを引き出すことが、今の体育指導に求められている。その上で家族と一緒に体を動かしたり、主体的に部活動やスポーツ教室に参加したりできる子を育てる必要がある。教員の働き方改革により、部活動が縮小している昨今、地域の社会体育の広がりは急務であろう。

5) 幼児期の外遊びと成人での運動機会

幼児期に外でよく遊んだ学生の割合は、全体の66%（図6-1）で、運動機会の分類の各群と差はほとんどなく、幼児期の外遊びと現在の学生の運動機会との相関関係はあまりないことが分かった。

杉原ら⁴⁾は「走る」「跳ぶ」「投げる」運動動作の基礎が5才までに概ね発達すると述べている。本調査では、幼児期に外遊びをあまりしなかった学生が2割程度存在した。幼児期に体を使った遊びに取り組めていない幼児は、幼児期に発達する身体機能や運動機能が十分ではないため、小学校以降の運動体験が、うまくできない、苦手、苦しい、楽しくないなどの負の経験になりやすく、運動が嫌いという意識が芽生えると推察できる。幼児期に体を使って楽しくめいっぱい遊んで、身体感覚や運動機能、心肺機能を高めておくことが重要だといえる。

6) 運動の影響の理解と運動機会の関連

運動機会の群に関係なく、幼少期からの育ちの中での運動経験から運動が嫌いであつ

ても「運動習慣あり」の学生が1割いる（図3-1）ことに注目したい。この点は、運動効果の意識の調査における「運動が及ぼす良い影響と悪影響」の結果から考えることができる。表7、表8のように回答の記載内容を分類し、運動機会の群と比較した結果から、運動習慣につながりやすいのは、運動が及ぼす良い影響において「健康的な生活・生活改善」の意識が高い学生であった。「運動が嫌い」の1割の学生が運動習慣につながるのはこの意識が高かったからだと説明できる。体育指導では、健康の要素である適度な運動量を設定し、健康的な体づくりの意識化を図る必要がある。

5. まとめ

本研究では、幼児期に外でよく遊んだ経験と大学進学後の運動機会との直接的な関連は認められなかつたが、幼少期からの運動経験による運動が好きか嫌いかの意識が、大学進学後の運動機会に影響を与えることを明らかにした。また、体育の授業以外の運動経験が将来の運動機会につながりやすいこと、健康意識が高いことが、成人後の主体的な運動習慣につながりやすい傾向があることも分かつた。

運動やスポーツに楽しく取り組んだ体験によって内発的動機付けされることが運動を好きになる大きな要素となる。運動が嫌いとなる主な要素には、「運動の苦手さ」と「身体的苦痛」が挙げられる。女児においては、将来苦手になるであろう「走る」「跳ぶ」「投げる」という運動動作や、持久力の基礎となる心肺機能を高めるための体育指導が必要である。幼児期の体を使った遊びにはこれらの機能を高めるための重要な役割があり、その習得を軸に楽しくめいっぱい遊ぶ子を育てたい。

以上のことから、園では「走る」「跳ぶ」「投げる」動作を高める遊びに十分触れ、学校での体育指導では、運動が楽しい、もっとやり

たい思える活動を設定し、主体的に運動に取り組める動機づけを図り、授業以外での運動の機会につなげることを大切にする。その上で家族に、園や学校以外の場で運動に参加する大切さを啓発する必要がある。さらに、健全な健康に必要な知識の理解と健康的な生活が実感できる経験を目指す必要がある。

参考文献

- 1) 厚生労働省：厚生労働省による国民健康・栄養調査報告書、2018.12.
- 2) 春日晃章、中野貴博、小栗和雄：発育発達期における女子の運動、スポーツ離れに関する基礎研究—女子が進んで取り組むためには何が必要なのか？—、2017年度笹川スポーツ研究助成:223-229、2018.
- 3) 山本裕之、平野吉直、内田幸一：幼児期に豊富な自然体験活動をした児童に関する研究、国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要:69～80、2005.3
- 4) 杉原隆、河邊貴子：幼児期における運動発達と運動遊びの指導、ミネルヴァ書房：2014.5.30

新型コロナウィルス感染症(COVID-19)対策により行動制限を受けた本学学生 の生活様式の変容と健康への影響に基づく授業と学生支援に関する一考察

A Study on Classes and Student Support Based on Lifestyle Changes and Health Impacts of Our Students Whose Behavioral Restrictions Due to Countermeasures for Coronavirus Disease (COVID-19)

垣添忠厚
Tadahiro KAKIZOE

はじめに

ための工夫と備えが求められている。

1) 背景

2020年世界は、新型コロナウィルス(COVID-19)のパンデミックにより未曾有の被害をもたらされている。厚生労働省の発表¹⁾によると、12月末の時点での世界での感染者は8千万人を超え、死者は170万人になる。感染者数は、全世界人口の1%にあたる。

国内では、同年3月後半から流行の第1波の予兆が見られ、政府は4月7日に7都府県を対象に緊急事態宣言を発出し、4月16日には全都道府県に対象を広げ、5月25日に解除されるまで約7週間にわたって自粛生活を送ることとなった。今まで当たり前だった生活が制限され、働き方や学び方が大きく見直されるきっかけとなった。同年7月後半に第2波、11月後半からは第3波が発生し、その都度感染者数のピークは増加しており、ワクチンの開発により今後の流行の終息が期待されるが、発生から10カ月が経過した今でも危機的状況は脱していない。

COVID-19により行動に制約を受けた生活はこの10カ月でどのような変化を与えたのか、また、健康面にどのような影響を与えているのかを把握し、COVID-19による感染の影響をできるだけ避け、健康的な生活を送る

2) 全国の大学等の授業の実施状況

文部科学省が2020年6月1日時点での全国の短期大学を含む国立大学、公立大学、私立大学、高等専門学校の計1069校の授業の実施状況を調査した結果²⁾によると、99.7%の大学等で授業を実施している。しかし、授業の実施方法は、対面授業(面接授業)での実施が9.7%、対面授業と遠隔授業の併用での実施が30.2%、遠隔授業での実施が60.1%であり、7割以上の大学が以降の対面授業の全面再開に慎重な状況にあった。

同年9月15日に同省が発表した全国の大学等の計1060校の後期等の授業の実施方針等に関する調査結果³⁾によると、対面での授業を実施した大学は6月調査から9.6%増えた19.3%、対面授業と遠隔授業を併用する大学は49.9%増え80.1%となった。しかし、調査の全体数の約4割の学生がキャンパスに通える週の日数が1日以下であった。

3) 本学の状況

本学では、COVID-19の流行を受け、感染防止対策として、2020年度4月の第1週は、健康診断以外の入学式、オリエンテーション等はすべて中止とした。第2週から授業を

開始する予定であったが、全国的な感染拡大や政府や県からの緊急事態宣言の発出を受け、5月の第2週まで完全休校となった。5月第3週から授業を開始し、3週にわたり遠隔による授業を実施した。6月第1週からは、本学の学生数が500人程度と小規模の大学であり密集が避けられること、教室等の消毒や換気を徹底すること、授業内での接触を極力避ける学修活動とすること、学修活動以外の活動を自粛すること、学生の健康管理と感染予防対策を徹底すること等の条件や対策を講じ完全対面授業を開始した。学年暦や大学行事を大きく変更することとなつたが、後期12月末の第13週まで終え、学生、職員の感染者は1人も発生しなかった。

1. 問題と目的

1) 問題

筆者は、本学全学科の運動系科目を担当している。科目によって学修の目標や内容は異なるが、学生が心身の健康な生活づくりとして、日常生活の中で主体的に運動に取り組む態度を育成することは共通している。1年次生66名が受講した教養科目「スポーツ演習I」では、前期の第1～3週までの遠隔授業の際に、感染症対策の注意喚起と日常的にできる運動課題を提示した。「新型コロナウィルスの特徴や感染対策の注意喚起」の課題学修後のアンケートで、感染対策への意識について「とても高まった」「高まった」「高まらなかった」の3択で自己評価を求めたところ、「とても高まった」とした学生が58%、「高まった」とした学生が42%で合わせると100%であった。「ストレッチをする課題」において、課題を実施した感想を記述で求めたところ、「毎日同じことを繰り返す生活なので体が硬く、鈍くなっていた。すぐ足がつる。」「体がガチガチで肩こりが酷く腰と首が痛い」など、全体の9割が運動不足により以前より身

体の状態が悪くなっているとした。

コロナ禍での自粛生活では、感染症予防の意識が高まり感染を防ぐこととなっているが、健康面への負の影響が問題となる。

2) 目的

COVID-19のパンデミックにより全世界において人々は行動の制限を受け生活様式は一変した。今後、幅広い分野においてCOVID-19が与えた人々への影響について研究が進められることが推察できる。本研究では、全国的には少数である全面的に対面授業を実施した本学に通う学生を対象に、コロナ禍での日常生活の変容と運動面や健康面への影響を調査し、筆者が担当する科目での授業環境と内容の課題、及び、学生支援上の配慮点を考察する。

2. 方法

1) 対象

本学の後期の運動系科目「スポーツ演習II」「スポーツ・レクリエーションII」「幼児と健康」「幼児の運動と遊びII」及び前期科目の「障害者スポーツ演習」を受講する学生144人を対象とした。

2) 調査期間

令和2年12月21日～12月28日

3) 調査方法・内容

各科目の授業内で学生に研究趣旨を説明し、Google フォームを活用し、自己記入方式によって行った。調査の内容は、表1のとおり18項目の質問を行った。

4) 考察の視点

①新しい生活様式の理解について

【質問1】～【質問3】において、国が示す「新しい生活様式」の実践例⁴⁾を参考に、学

生のその理解と実施の状況、及び学生が対面授業の実施で不安に感じていることを調査する。学生の理解度と行動の関連を、具体的な行動様式の実施状況から分析し、学生の意見を参考に実技(演習)系の授業や学生支援での感染予防対策について考察する。

②生活様式の変容について

学生が不要不急の外出を自粛したことにより、日常生活にどのような影響があったかを【質問4】にて調査する。さらに、【質問5】～【質問11】において外出機会と人とのかかわり、家事機会、趣味の時間の変容を具体的に聞き取り、その結果を対象者の学年や項目を分類ごとにまとめて分析し、学生支援及び授業内で取り扱う内容について考察する。

③運動面について

行動制限による学生の運動量の変容について

て、【質問12】～【質問17】によって調査する。学生が感じている身体(運動面)の状況と主体的な運動への取り組みについて、感染拡大前、自粛期間中、対面授業再開後の結果、新入生と在校生の結果等の比較によって分析し、運動系科目が学生の運動量の確保等にどのような役割が求められているかを考察する。

④健康面について

生活の変容による食事や睡眠、ストレス等への影響について、【質問18】にて学生の実際の状況の結果を、平常時のストレス状況との比較によって分析し、健康的な生活を送るための指導の重点、学生支援の配慮点を考察する。

5) 回答率

研究利用への同意のあった144人中107人の提出があり、回答率は74.3%であった。

表1 調査における質問項目

【質問1】 新型コロナウィルスの感染対策として、日本国政府が示す「新しい生活様式」について理解していますか。(選択回答)
・十分理解している
・おおむね理解している
・あまり理解していない
・理解していない
【質問2】 あなたが確実に守っている感染予防対策をすべて選んでください。(複数回答)
・外出時のマスクの着用
・こまめな手洗い
・こまめな消毒
・人が密集する場所へは行かない
・人と接するときのソーシャルディスタンス
・滞在する部屋の喚起
・小声での会話
・不要不急の外出の自粛
【質問3】 新型コロナウィルスの影響を受け、対面授業での大学生活に不安に思うこと、よりよくするため提案がありましたら記入してください。(自由記述)
【質問4-1】 2020年3月から、新型コロナウィルス感染症が広がり、私たちの生活は一変しました。感染症の流行前と比較し、みなさんの生活習慣に変化が生じたと感じますか。(選択回答)
・とても感じる
・少し感じる
・あまり感じない
・全く感じない
【質問4-2】 どのような点に変化を感じましたか。(複数回答)
・日常生活での過ごし方

- ・家族や友達とのかかわり
- ・1日の運動量
- ・趣味の時間
- ・健康に関する意識
- ・その他

【質問5】外出する機会についてお聞きします。(選択回答)

- ・外出する機会が増えた
- ・外出する機会が減った
- ・変わらない

【質問6】家で過ごす時間の変化についてお聞きします。(選択回答)

- ・とても増えた
- ・やや増えた
- ・あまり変わらない
- ・やや減った
- ・とても減った

【質問7】家で家事をする機会についてお聞きします。(選択回答)

- ・家事をすることがとても増えた
- ・家事をすることがやや増えた
- ・あまり変わらないが家事はする方だ
- ・あまり変わらずしない方だ
- ・その他

【質問8】家族と過ごす機会についてお聞きします。(選択回答)

- ・家族とのコミュニケーションがとても増えた
- ・家族とのコミュニケーションがやや増えた
- ・あまり変わらない
- ・家族とのコミュニケーションがやや減った
- ・家族とのコミュニケーションがとても減った

【質問9】友だちと過ごす機会についてお聞きします。(選択回答)

- ・友だちとのコミュニケーションがとても増えた
- ・友だちとのコミュニケーションがやや増えた
- ・あまり変わらない
- ・友だちとのコミュニケーションがやや減った
- ・友だちとのコミュニケーションがとても減った

【質問10】趣味をする機会についてのコロナの影響をお聞きします。(選択回答)

- ・趣味ができていない
- ・趣味をする機会が減っている
- ・趣味をする時間がやや増えた
- ・趣味をする時間がとても増えた
- ・趣味をする時間に変わりはない
- ・もともと趣味をする時間がなかった
- ・その他

【質問11】あなたの趣味を記入してください。(自由記述)

【質問12】4～5月の外出自粛期間中の1日の運動量についてお聞きします。(選択回答)

- ・運動量が減り、体力の衰えを強く感じた
- ・運動量が減り、体力の衰えをやや感じた
- ・運動量を増やし、体力の向上に努めた
- ・その他

【質問13】昨年度と現在の運動量の変化についてお聞きします。(選択回答)

- ・変わらない
- ・コロナの影響で減った
- ・コロナの影響は関係なく減った
- ・コロナの影響で増えた
- ・コロナの影響に関係なく増えた
- ・その他

【質問14】最近1ヶ月の運動する機会（1日30分以上）の頻度をお聞きします。（選択回答）

- ・毎日
- ・週5日
- ・週2～3日
- ・週1日
- ・月2日
- ・月1日
- ・ほとんどなし

【質問15】4～5月の自宅待機中の運動する機会（1日30分以上）の頻度をお聞きします。（選択回答）

- ・毎日
- ・週5日
- ・週2～3日
- ・週1日
- ・月2日
- ・月1日
- ・ほとんどなし

【質問16】対面授業期間の日常生活での運動量についてお聞きします。（選択回答）

- ・十分な運動量がある
- ・運動不足を感じない程度の運動量がある
- ・日常生活だけではやや運動不足である
- ・日常生活だけでは全く運動量が足りない
- ・その他

【質問17】運動不足解消のために心掛けていることを記入してください。（自由記述）

【質問18】コロナの影響による健康面への変化であてはまる項目を選んでください。（複数回答）

- ・食欲過多である
- ・食欲減退である
- ・睡眠過多である
- ・睡眠減退である
- ・不安な気持ちになることがよくある
- ・時々不安な気持ちになる
- ・ストレスが溜まっている
- ・やる気が出ない
- ・その他

3. 結果と考察

回答者の内訳

① 学年

- ・1年次生 68人(64%)
- ・2年次生 30人(28%)
- ・3年次生 9人(8%)

② 居住環境

- ・自宅（家族と同居） 90人(84%)
- ・下宿（一人暮らし） 17人(16%)

図1のとおりで、「十分理解している」と「おおむね理解している」を合わせると80%であった。「あまり理解していない」と「理解していない」を合わせると20%であった。現時点では他に調査結果が発表されていないため比較は難しいが、感染が蔓延する中、大学側が常々感染予防対策の徹底を呼びかけ、授業内でも教員が周知を図ってきた現状においても、2割の学生は十分に理解できていないことが分かった。

1) 新しい生活様式の理解について

【質問1】では、学生の「新しい生活様式」の実践例の学生の理解度を調査した。結果は

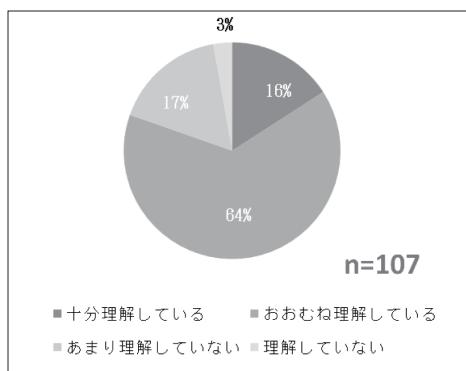


図1 新しい生活様式の理解度

【質問2】では、新しい生活様式の実践例を参考に、8つの具体的な行動が徹底できているかについて聞いた。結果は図2-1のとおりであった。感染症対策行動の徹底の呼び掛けによって、マスクの着用はおおむね定着できているものの、こまめな手洗いや消毒では約2割、密集を避けるや不要不急の外出を避けるでは約5割、換気や密接を避けるは約8割、小声での会話に至っては9割以上が徹底できていない。調査した時期は、身近に感染者がいないことで危機感が薄れていたことや、冬場の寒さなどの環境、毎日の対面授業による他者との関係性の影響が要因となっていると考えられる。

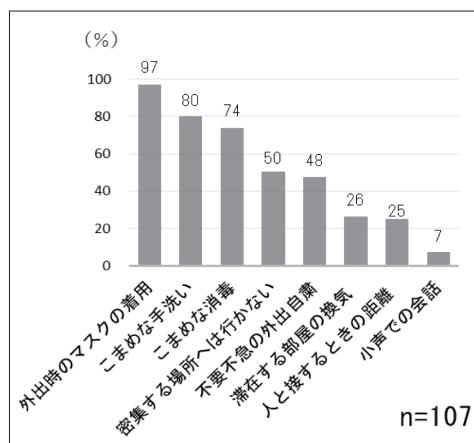


図2-1 感染対策行動の徹底

学生1人が選択肢に挙げた8つの感染対策の行動で徹底した項目数の内訳を図2-2に示す。8項目すべてを徹底したのは2%、以下7項目が5%、6項目が16%、5項目が18%、4項目が22%、3項目が20%、2項目が10%、1項目が7%、0項目は0%であった。また、3密といわれる、「密集する場所へは行かない」「部屋の換気」「人と接するときの1m以上の距離」の3項目をすべて徹底できている学生は9名の8%であった。8割の学生が新しい生活様式を理解しているが、行動の徹底は不十分である結果となった。特に、集団生活の中での他者との関係性が行動に影響を与え、本人の意識だけでは望ましい行動が徹底しにくい状況にあったと考えられる。

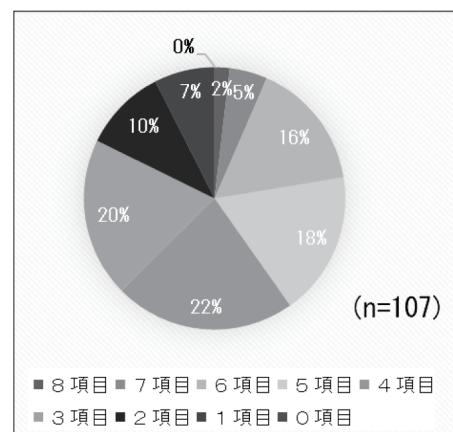


図2-2 1人の感染対策行動の項目数

【質問3】で対面授業の実施において不安に思うこと、対面授業での感染対策の提案を自由記述で聞いたところ、22人から表2のとおりの回答があった。回答があったのは全体の1~2割であったが、記述内容からは、主に密集、密接、遠隔授業における学修に関する不安が挙げられている。今後感染症蔓延時には対面授業から遠隔授業への切り替えが想定され、実技・演習系の科目での学修効果を担保した遠隔授業の展開には高い教育技術が求められるため、そのICT環境の整備やオンライン教材の準備が必要である。

表2 対面授業の課題と対応策

<不安なこと(15人)>	
・スクールバスを含む通学(2)	
・対面授業で密接なることでの感染(7)	
・グループワークが十分にできないこと(1)	
・昼食時にマスクを外し会話してしまっている状況(1)	
・学内に陽性者がでたとき(1)	
・遠隔授業時の自宅のネット環境(2)	
・遠隔授業になった時の学修効果(1)	
<感染対策への提案(8人)>	
・遠隔授業と対面授業を併用し対面授業での授業時間数を減らす(6)	
・時差登校(1)	
・冬季の教室等の寒さ対策(1)	

COVID-19に効果的なワクチンや特効薬が開発され、感染症拡大が終息するまでは、身近に感染症陽性者が発生する可能性がある。学生に対し、これまでに分かってきた感染経路や感染リスク、濃厚接触者の定義、陽性が判明した時や濃厚接触者になった時の対応を具体的に伝える必要がある。そのうえで学生の規範意識を高めることが、状況に応じた正しい行動の徹底につながると考える。また、理解が高い中でも対策の徹底に至りにくい大学キャンパス内や授業内での密接や換気については、他者との関係性や環境要因の影響を受けやすく本人の意識だけでは改善しにくいため、大学側が例えば、定期的に換気して回る、食事スペースにアクリル板を設置するなど、対策を講じる必要がある。授業内では、教材や教具を共有する場合には消毒を徹底するのはもちろんあるが、学生同士が密接になる状況があるため、学生一人一人、あるいはグループごとに消毒スプレー等を用意するなどして、こまめに手指等の消毒をする習慣をつけることが必要である。

2) 生活様式の変容について

【質問4-1】において日常生活全般を通してコロナ感染症による生活の変化について聞いた。結果は図3のとおりで「とても感じている」と「少し感じる」を合わせた96%の学生が変化を感じている。

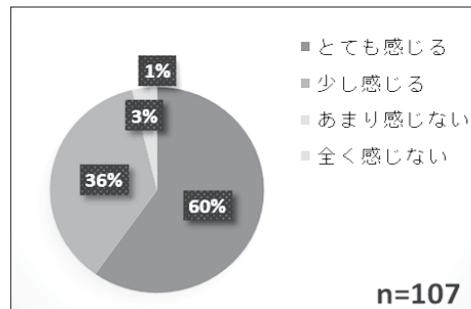


図3 感染症流行前後の生活の変化

【質問4-2】において生活の中でどのような点に変化を感じているかを聞いたところ、図4の結果であった。日常生活での過ごし方が84%、家族や友達との関わりが62%、健康に関する意識が43%、趣味の時間が34%、1日の運動量が16%であった。

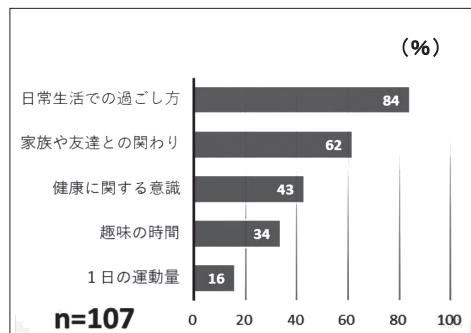


図4 変化を感じた点

COVID-19の感染対策による行動制限は、96%の学生が日常生活に変化を感じる大きな影響を与えた。その変化の実情を【質問5】～【質問11】で聞き取った結果から具体的に分析する。

【質問5】で聞いた外出する機会の変化の結果は、図5のとおりで「減った」が80%、「変わらない」が18%、「増えた」が2%であった。図2-1では不要不急の外出を徹底した学生は48%であることを示したが、平日は毎日大学に登校する状況下において、外出の機会が減っていると回答した学生が8割に至り、行動制限による日常生活への大きな影響があつたと考えられる。

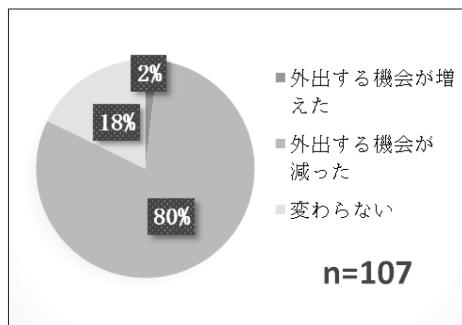


図5 外出する機会

【質問6】で聞いた家族と過ごす機会(コミュニケーション)の変化については図6のとおりで、回答者の58%に変化は認められなかった。しかし、「とても増えた」と「やや増えた」は合わせると32%で、3人に1人が家族と過ごす時間が増える結果となった。

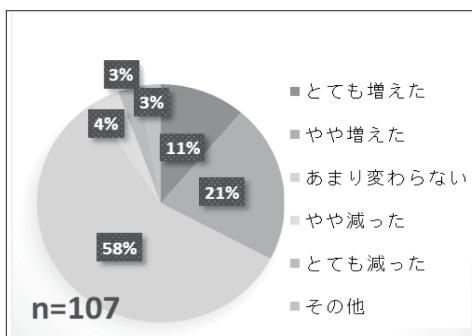


図6 家族と過ごす機会

コロナ禍により学生も家族も外出機会が減ったことで共に自宅で過ごす時間が増え、その結果、3割以上の学生において家族とのコミュニケーションが増えており、これは学生のコロナ禍の不安や精神面の支えになっていると推察できる。「とても減った」とした3%は、すべて下宿（一人暮らし）する学生であった。実家が県外の学生は、休日等の帰省を控えたことが要因と考えられる。下宿をしている学生は、家族の支えを受けにくい状況にあるため、特に自宅待機による自粛生活期間が長引く場合は、大学側から定期的な面談や、人数制限をしての面接授業の受講を優先的に認めるなど、大学への登校機会を設け

るなどの配慮が必要になると考える。

【質問7】の家で家事をする機会については図7-1のとおり、「とても増えた」が10%、「やや増えた」が20%、「変わらないがする方だ」が39%、「変わらずしない方」が31%であった。この結果から、家事機会のある学生が69%ととらえることができる。

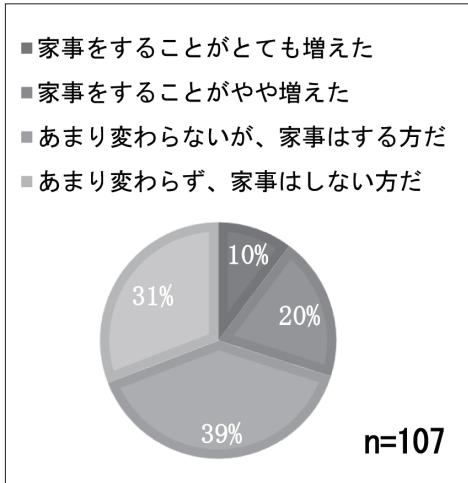


図7-1 家事機会 (全体)

藤田⁵⁾によると女子大生に調査した家族と過ごした高校時代での家事機会がある学生は48.8%である。家族と過ごす学生90人の家事機会の結果を図7-2に示す。「変わらないがする方だ」が38%、「とても増えた」が5%、「やや増えた」が21%で家事機会が増えた学生は26%であった。「変わらずしない方」の36%を除く64%に家事機会がある結果となった。これは、藤田が示した48.8%を約15%上回った。コロナ禍により家庭で過ごす時間が増えたことが、家事機会が増えた26%の学生に影響したと考えられる。下宿生を含む家事に向き合う学生の割合は約7割であり、運動系の科目においても、この機会に健康的な生活づくりのための日常生活の見直しや、健康の要素の一つである食事（栄養）を題材とした学修内容を取り扱うことも検討していく。

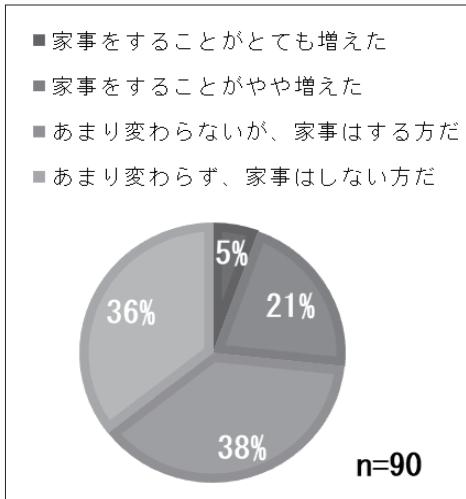


図 7-2 家事機会（家族と同居）

【質問9】の友だちと過ごす時間（コミュニケーション）についての結果は図8-1のとおり、「あまり変わらない」が50%を占め、「とても増えた」と「やや増えた」が14%、「やや減った」と「とても減った」が36%であった。行動制限による減少を予測していたが、減ったのは3人に1人程度であった。8割の学生の外出機会が減っている状況下で、「とても減った」のは6%と1割に満たず、対面授業下では、行動制限があっても友だちとのコミュニケーションに大きな影響があまり見られないことが明らかになった。

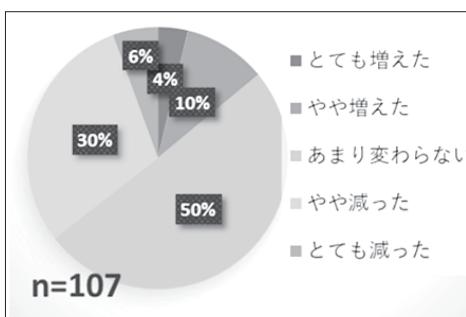


図 8-1 友だちと過ごす時間（全体）

報道等では、遠隔授業が続く大学の新入生が孤立化する問題が取り出されている。本学での状況を把握するため、新入生と在学生を比較した。新入生の結果は図8-2、在学生の

結果は図8-3のとおりで大きな差がなかった。6月の早い時期から対面授業を実施したことによって、新たな人間関係の構築に大きな影響はなかったと考えられる。しかし、入学当初から遠隔授業が長く続く場合には、支え合える友だち関係の構築が難しいため、新入生に対しては、早い段階から学生同士の仲間づくりの機会を設ける対応が必要であり、例えば学生支援の立場から通信機器を活用した仲間づくり活動等の展開が考えられる。

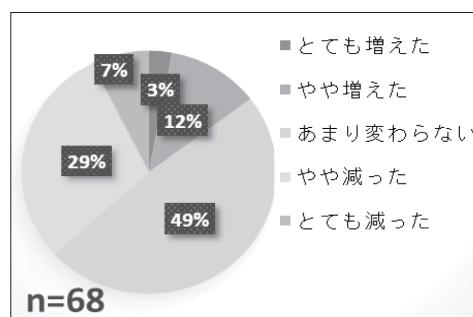


図 8-2 友だちと過ごす時間（新入生）

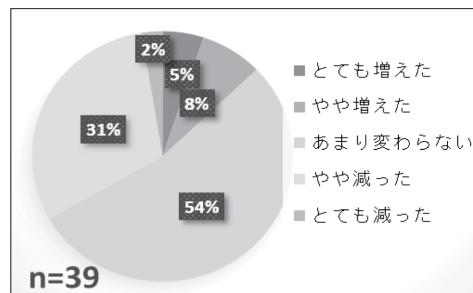


図 8-3 友だちと過ごす時間（2・3年次生）

図2-1では、感染対策の「人と接するときの距離」について、75%の学生が徹底できていないことを示した。仲の良い友だちと直接関わる場合に十分な感染対策が取られていないことが示唆できる。集団活動や集団生活の中では、特に友だちとの関係性により、本人の意識だけでは望ましい行動が徹底しにくい状況になりやすいため、感染症が爆発的に蔓延する状況下においては、速やかな遠隔授業へ切り替える等の対応が求められる。

【質問 10】の趣味の時間の変化についての結果は、図 9-1 のとおりで、「できなくなった」が 6%、「減った」が 19%、「やや増えた」が 18%、「とても増えた」が 5%、「変わらない」が 44%、「もともと時間がなかった」が 6%であった。

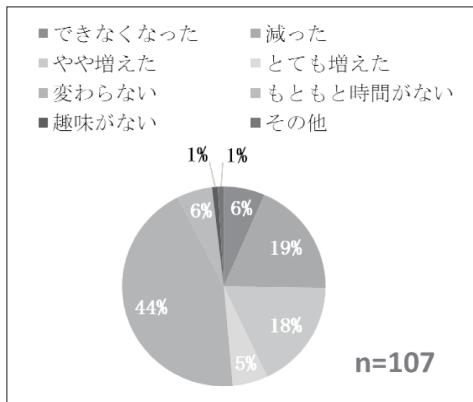


図 9-1 趣味の時間の変化

【質問 11】のどのような趣味があるのかを自由記述にて聞いた結果 70 人から回答があった。回答のあった趣味の内容から、趣味をするにあたり厚生労働省が感染リスクを指摘する密集、密接、密閉等の可能性の高い趣味を「感染リスクを伴う趣味」、「感染リスクを伴わない趣味」とし表 4 のように分けた。

表 4 趣味の分類

<感染リスクを伴う趣味>	
・アーティストのライブ、コンサート	
・旅行、お出かけ、買い物	
・ジムでのトレーニング	
・バンド活動、歌を歌うこと（カラオケ）等	
<感染リスクを伴わない趣味>	
・YouTube、TVゲーム	
・映画、TV、ビデオ、音楽の鑑賞	
・ピアノ等の楽器演奏	
・読書	
・漫画、絵を描く、小説を書く	
・料理、手芸、書道	
・一人でする軽い運動 等	

感染リスクを伴う趣味のある学生と伴わない趣味のある学生の割合は、図 9-2 のとおりで、「感染リスクを伴う趣味のある学生」が 24%、「感染リスクを伴わない趣味のある学生」は 76% であった。

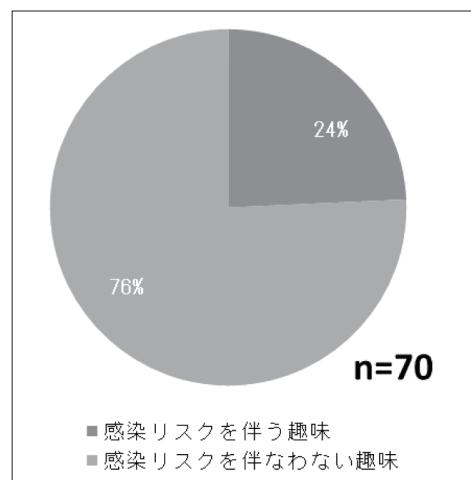


図 9-2 趣味の分類

感染リスクを伴う趣味のある学生の趣味の時間の変化については、図 9-3 のとおりで、「趣味ができなくなった」と「減った」を合わせて 82% と 8 割以上の学生が趣味に十分に時間が取れていない結果となった。行動制限によって感染リスクを伴う趣味のある学生には、趣味の時間に大きな影響があった。

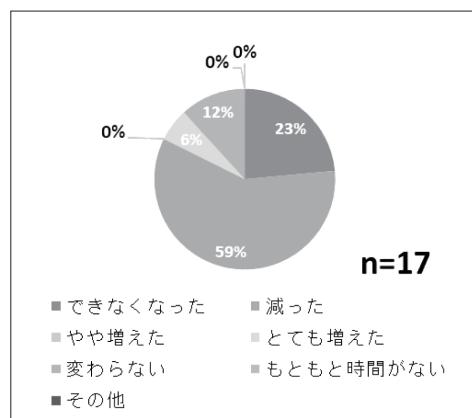


図 9-3 趣味の時間の変化（リスクあり）

感染リスクを伴わない趣味のある学生の趣味の時間の変化については図 9-4 のとおりで、「変わらない」が 55% と半数以上を占め、「やや増えた」と、「とても増えた」を合わせると 35% であった。3 人に 1 人に趣味の時間が増えるという影響があった。自宅で過ごす時間が増えたことで趣味に取り組む機会が増えたと考えられる。

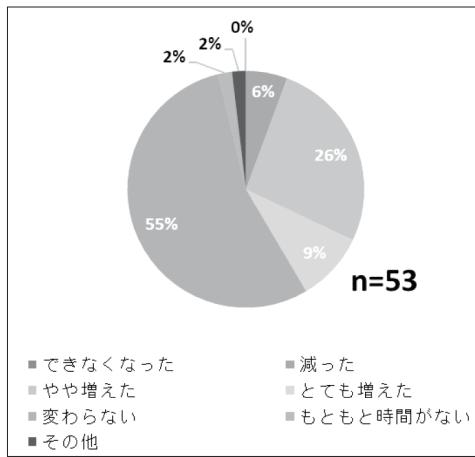


図 9-4 趣味の時間の変化(リスクなし)

これらの結果から、感染リスクの低い趣味のある学生の半数以上に趣味の時間に変化はないが、自宅等において一人で楽しむ趣味の時間は3人に1人が増えており、趣味が充実している学生もいる。一方、外出を伴う感染リスクの高い「旅行に行く」「買い物に行く」「ライブに行く」などの趣味のある学生はその行動が大きく制限され、8割以上の学生が楽しみとなる活動に制約を受ける影響があった。大学では学祭の中止やサークル活動が自粛または縮小化される中で、学生にとって楽しみとなる活動が減っている状況がある。図8-1で示した36%の学生が友だちとのコミュニケーションが減っている結果と関連し、人との接触の制限が、新たな楽しみや仲間関係の広がりを少なからず妨げている。そのための対策として、学生の自治活動やサークル活動がオンラインによって実施できる学生支援上の工夫や環境整備が考えられる。また、運動系科目の授業においては、感染症対策を講じながら仲間と楽しく活動や仲間づくりに取り組むことを軸とした学修内容を設定することが求められていると考える。

3) 運動面について

【質問12】では、4～5月の自宅待機期間中の運動量及び体力の変化について聞き、結果は図10のとおりあった。運動量が減り体力の衰えを感じた割合は「強く感じた」と「やや感じた」を合わせ91%であった。図4から対面授業実施中の本調査時に運動量の変化を感じていた学生は16%であったことから、約2カ月に及ぶ自宅待機は、約9割の学生に運動量の減少による体力の衰えを感じさせる大きな影響を与えていたと考えられる。

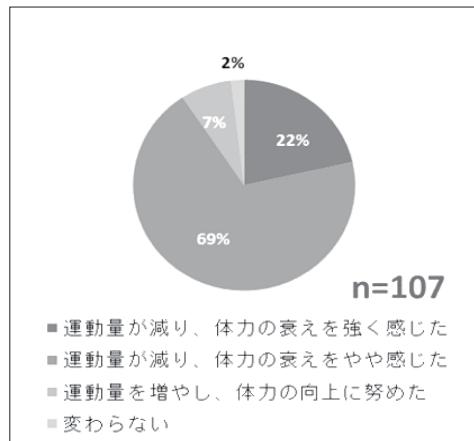


図 10 自粛期間中の体力の状態

【質問13】では、昨年度と現在の運動量の変化について聞いた。1年次生と在学生を比較した。結果は図11のとおりで、「変わらない」が全体では46%、1年次生では38%、2・3年次生では59%であった。「コロナの影響で減った」が全体では12%、1年次生では13%、2・3年次生では10%であった。「コロナの影響に関係なく減った」が全体では38%、1年次生46%、2・3年次生では26%であった。「コロナの影響で運動量が増えた」は、2・3年次生に5%みられ全体の2%であった。

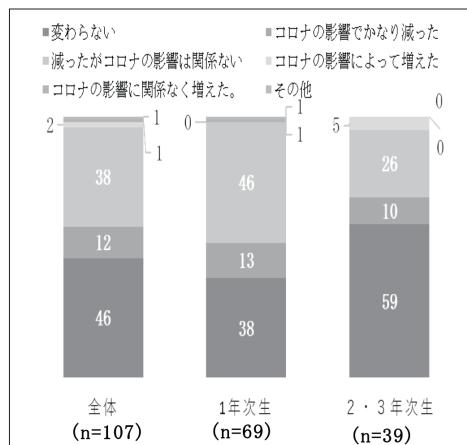


図11 運動量の変化

運動量が行動制限により減ったのは1割強であり、38%が行動制限の影響を受けていないが運動量が減っていることが分かった。1年次生では、約半数が感染症に関係なく運動量が減ったと感じており、在学生の結果と2割近い差があった。これは高校生活から大学生活になり日常的に運動量が減っていると考えられる。在学生でも2割強の学生が感染症に関係なく運動量が減っている結果となった。

【質問14】【質問15】では、日常生活での運動機会の変化について最近1ヶ月と自粛（自宅待機）期間中において1日30分以上の運動日数について聞いた。結果は図12のとおりで、ともに51%が「ほとんどしていない」であった。「毎日」は最近1ヶ月が8%、自粛期間中7%であった。「週5日」は2%と6%、「週2～3日」は8%と14%、「週1日」は21%と13%であった。

自粛（自宅待機）期間と最近1ヶ月の運動量を比較すると、運動機会がある学生において、自粛期間中は「週1日」の運動が8%減ったのに対し、「週5日」の運動が4%、「週2～3日」の運動が6%、合わせて10%増えており、この10%の学生は運動する日数を増やしていることが分かる。つまり、その他の9割の学生の運動機会は増えていない。山田⁶⁾らは、

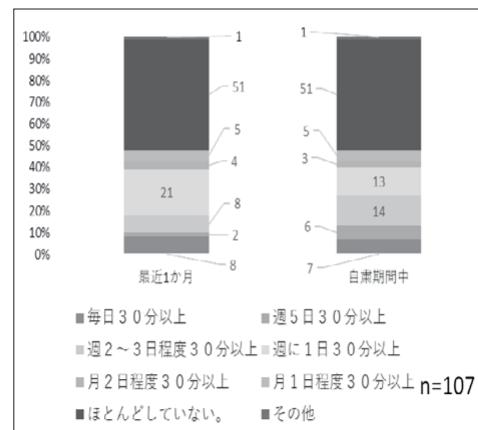


図12 運動機会

女子大生の運動量は日常生活状況における生活環境に関連すると示唆しているが、本学の学生においては意図的な運動機会につながらない実態が明らかになった。

【質問16】での対面授業の期間中における学生自身の運動量に対する意識についての結果は図13のとおりで、「十分な運動量がある」と感じているのは7%、「運動不足を感じていない」は17%であった。「日常生活だけではやや運動不足である」は49%で、「全く運動量が足りていない」は27%であった。

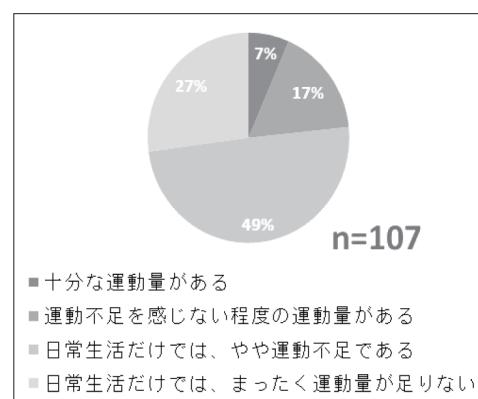


図13 運動量の意識

【質問17】での運動不足を解消するために心掛けていることの自由記述では、時間を設けて運動するが24人、日常生活の中で心掛けているが39人から回答があった。「特に

何もしていない」や未回答は44人であった。回答の主な内容は表3のとおりであった。

表3 運動不足の解消の取り組み

<時間を使いた運動> (24人)	
・ウォーキングをする	
・ストレッチをする	
・筋トレをする	
・体操をする	
・ジョギング	
・テレビで見たトレーニングをする	
・なわとびをする	
・ランニングマシーンを購入した	
・毎日トランポリンを15分する	
・週1回のスポーツの授業を頑張る	

<日常生活で心掛けていること> (39人)	
・出掛けるときになるべく歩くようにする	
・階段を使うようにしている	
・歩く姿勢に気を付けている	
・歯磨きの時にま先立ちをする	
・大股や速足であるく	
・自転車や徒歩で通学する	
・家事をする	

健康のために学生が意図的に運動機会をもつてることを目的に運動系科目を実施してきたが、図12から分かるように約5割の学生は、授業以外での運動機会につながっていない。感染症対策による行動制限に関係なく授業のあり方を見直す必要がある。感染症に負けない丈夫な体づくりには、自己免疫力（体力）を高めることが必要であり、そのための学生の運動量の確保は必須である。今後、遠隔授業等により登校する日数が制約されるようになれば、学生の運動量を確保する対策が必要になる。運動系科目においては、運動量の確保と日常生活において運動量を確保するための方法を提示し、学生の運動への意識と行動化の一致を目指す必要がある。

4) 健康面について

【質問18】では健康面の状態について、食に関する食欲の状態、休養に関しては睡眠の状態、精神面では不安感の頻度及びストレスの状態、活動意欲については気力（やる気）の状態を聞いた（複数回答）。結果は図14のとおりであった。食欲に関しては、「過多」

が32%、「減退」が5%で合わせて37%が異常を感じている。睡眠については、「過多」が12%、「減退」が26%で合わせて38%が異常を感じている。不安感の状態では、「よく不安になる」が19%、「時々不安になる」が21%で合わせると40%が不安を感じている。精神面では、34%がストレスを感じ、22%がやる気が出ない状態であった。特に健康上に問題を感じていない学生5%であった。

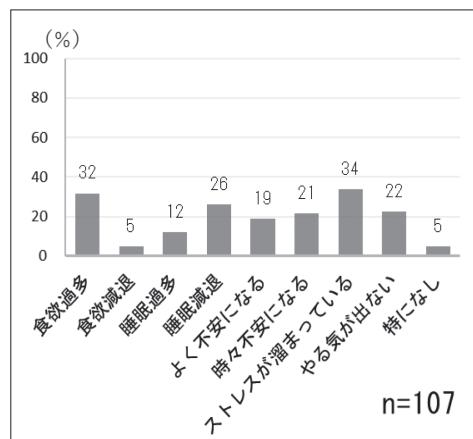


図14 健康面の状態

金子ら⁷⁾による女子大学生の平常時の日常におけるストレッサーの状況は、「食欲がない」学生が11%、「よく寝られない」学生が26%、「やる気が出ない」学生が38%、「ストレスを感じる」学生が74%いると指摘している。今回の調査では、「食欲減退」が5%、「睡眠減退」が26%、「やる気が出ない」が22%、「ストレスが溜まっている」が34%とおおむね同じか低い数値であったことから、本学の学生はCOVID-19の感染症の流行下による影響を大きくは受けていないと考えられる。これは、私生活での外出に制限はあるものの、家族や友だちとのコミュニケーションが支えになっていることや通常どおり対面授業が実施されていることで日常的な不安がないこと、身近に感染症陽性者が発症していないことなどが要因と考えられる。

今後、感染爆発により自粛生活が求められ

たり、身近に陽性者が発症したりすることで学生の不安が増し健康のバランスが崩れることが予想できる。この場合の学生へのメンタルケアが重要となる。健康を扱う運動系科目では、ストレスケア等学生が自己の精神面をコントロールできることを目的とした内容を取り扱うことも検討していく。また、緊急時に備え学生支援としての相談体制を学生に周知する必要がある。

4. まとめ

本研究により、COVID-19の感染症対策により行動制限を受けた本学学生の生活様式の変容と健康への影響として明らかにしたことをまとめ、今後の学生支援や筆者が担当する運動系科目の学修の目的や内容に反映することとする。

本学の学生の「新しい生活様式」の理解度は8割であり、周知徹底を行っても約2割の学生は十分な理解に至らない。また、感染対策の行動化は、個人の意識によって実施できるマスクの着用や手指の消毒等は、理解度に応じ8割以上が徹底できているが、集団生活の中での3密（密集、密閉、密接）は、理解が高くても集団内の関係性等が影響し十分な徹底が難しいことが分かった。感染症が身近で爆発的に拡大する状況下では、速やかな自宅待機による遠隔授業への移行の判断が求められる。感染症の蔓延下で対面授業を実施する場合には、学生に濃厚接触となる具体的行動の理解を周知し、キャンパス内では、喫茶スペースなど人が集まりやすい空間の感染予防の環境設定を強化する必要がある。また、演習・実技等の授業でグループワークを実施する際には、密接を避ける内容を設定し、かつ、こまめに手指消毒の機会を設けるなど徹底できるルールを決めての授業展開が必要となる。

感染症対策の行動制限により学生の96%

が生活に変化があったと感じている。具体的には、外出機会の減少を8割の学生が挙げている。外出機会の減少は自宅で過ごす時間の増加を意味し、約3割の学生において家族とのコミュニケーションや家事機会、自宅でできる趣味機会が増える傾向が見られた。一方、友だちと過ごす時間は学生の36%、感染リスクのある趣味機会は学生の82%に減る傾向が見られた。学祭やサークル活動など、集団での楽しめる行事や活動が自粛されるため、友だち関係が広がりにくく、人間関係が固定化され易い状況にある。運動系科目には、スポーツやレクリエーションをとおして、仲間関係の広がりがもてる機会を大切にし、授業後には友だちや家族と一緒に楽しむことにつながる活動を仕組むことが求められていると考える。また、家事機会のある学生が増えたこの機に、食と運動を関連付けた健康指導に取り組むことも検討していく。

自粛（自宅待機）期間中に運動量が減り体力に衰えを感じた学生は9割を超えたが、意図的に運動に取り組んだ学生は1割程度であった。対面授業を実施している状況でも76%の学生が運動不足を感じていたが、運動不足が行動制限による影響とする学生は12%であったため、64%の学生は慢性的な運動不足にあると考えられる。女子大学生は一般的に日常生活での運動量が1日の運動量となる傾向にあることから、運動系科目では、まず、健康に過ごすために必要な適度な運動を確保する。さらに、日常生活の中で運動量を増やす工夫や、1人でもできるエクササイズを授業内容として扱い授業外課題につなげるなど、日常生活での運動量の確保を目的とした工夫が必要である。

コロナ禍によってストレスを感じている学生は4割に満たず、日常的なストレスを感じている状況と比較すると低い数値である。大学に登校することで友だちとの支え合いが維持され、今回の行動制限による影響は大きく

ない。しかし、食事や睡眠に問題を抱えている学生は存在するため、授業内で健康課題とその解消について取り扱うこととし、さらに保健室や学生相談室と連携し、学生を支えていくことが重要である。また、大学生には自学が求められるが故に、家族や友だちの支えが必要になる。自宅での自粛を求める場合には、下宿生は家族の支えが受けにくく孤立化することも考えられるため、学生支援上の配慮が必要である。

今回の感染症対策の影響を受け、全国的にICT機器を活用した遠隔授業が注目された。学修効果が検証され、有効とされる遠隔授業は感染症の影響とは関係なく積極的に導入されることが予想される。遠隔授業の導入により登校する日数が減ることは、直接学生同士が関わる機会や体を動かす機会の減少の可能性が示唆できる。学生の人間関係の構築や運動量の確保を視点とした、オンラインによる学生同士のコミュニティーや健全な健康づくりのための相談機能やツールの提供を、学習支援上の新たな課題として体制整備に取り組む必要があると考える。

引用・参考文献

- 1) 厚生労働省：国内の発生状況など、<https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/kokunainohasseijoukyou.html>.2020.12.30
- 2) 文部科学省：新型コロナウィルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況、2020.6.5
- 3) 文部科学省：大学等における後期等の授業の実施方針等に関する調査、2020.9.15
- 4) 厚生労働省：新しい生活様式の実践事例、https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunit-suite/bunya/0000121431_newlifestyle.html,2020.11.30
- 5) 藤田 智子：家事分担から見る女子大生の性別役割分業意識と親へのイメージ、東

京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ、66:
387- 395、2015.

- 6) 山田 紀子、石見 百恵：女子大生の生活習慣に関する研究 運動量と日常生活状況、岐阜市立女子短期大学研究紀要、第 59 彙 :81-84、2010.3
- 7) 金子 智栄子、関根 美佳：女子大学生のストレスに関する研究—ストレス反応とストレッサー、コーピングとの関連について—、文京学院大学人間学部研究紀要、Vol.8 : No.1、67-90,2006.12

保育者養成におけるストップモーションアニメーションを使ったおりがみ動画による造形表現の指導への効果の考察

A Consideration for the effect of teaching art expression by origami movies which is created by the stop motion animation in training childcare providers

立 崎 博 則
Hironori Tachizaki

第1章 研究背景と研究の問い合わせ

折り紙という素材は保育現場で様々な使われ方をし子どもの表現を助ける。また、折り紙での表現を通して子どもの様々な能力が育つことも報告されている。保育者養成校での造形の授業においても折り紙を使った課題を実施している。その中で、本授業では、課題の1つとしておりがみ図鑑の作成を課している。

また、本稿では素材を意味する折り紙を「折り紙」と記述し、遊びや活動を意味する折り紙を「おりがみ」と表記する。

おりがみ図鑑は、おりがみの手順を実際の折り紙（サイズは1/4などバリエーションあり）を使い表したものであり、実習時や現場に出てから子どもとのおりがみ制作の時間に使うことを目的とし作成するものである。またおりがみ図鑑の制作を通して学生は、折り紙を使って折り順を段階的に表すだけではなく、図鑑を充実させることによりおりがみのレパートリーを増やす。また、おりがみの手順の説明や子どもと制作する際に使いたい声がけを文字で表し、イラストを使って楽しさを演出したりしおりがみの楽しさを伝える工夫をすることを通して、子どもたちとの関わりを考える機会を得る。

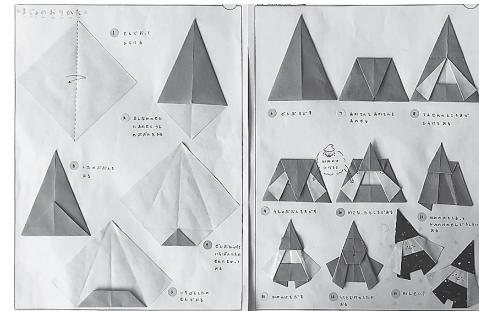


図1 おりがみ図鑑

五十嵐¹は、「一人ひとりの発達と興味に応じて適切な援助を提供する能力を、保育者がいかに獲得するかということ」と課題を指摘している。おりがみ図鑑の作成によりおりがみのレパートリーが増えることは予想されるが、子どもの発達と興味に応じた援助につながる学びは達成されるだろうか。おりがみ図鑑の制作では、学生は折り方の手順を本やインターネットで検索しそれを実際に折り紙で折り、図鑑にしていく。この手順通りに折られた折り紙を貼り付けていく作業だけでは、子どもの発達と興味に応じた援助につながる学びに繋がりづらい。おりがみ図鑑の制作ではその後、文字やイラストで、子どもたちとの関わりを考え、子どもがわかりにくそうな部分を説明を加えるなどしていく。続けて五十嵐¹は「東・阿部らが主張するように、児童にとっては折り紙を折ることそのものに加えて、どのように教わって折るのかが重要

なのである。そこでは、折って見せるだけでなく、情緒的なつながりを意識しながら、明確なわかりやすい言葉を添えていくことが大切である。」と説明するように、どんな言葉や態度で教えるかが大切であり、おりがみ図鑑の折り紙で説明する部分以外の文字やイラストは教えるための言葉や態度を伝えるための重要な要素である。しかし、おりがみ図鑑の見た目だけで子どもたちがおりがみを教わる場合、文字を理解できる事が前提となる。さらに、梨元²が主張するように、『遊びが遊びであるためには、子どもが「面白い、やってみたい」と感じながら自発的、主体的に活動することが必要である。』ということからも、おりがみに苦手意識を抱く子にとって、イラストなどで工夫されたおりがみ図鑑だったとしても、自発的になり始めるかという想像しづらい。このように、おりがみ図鑑の文字やイラストによる説明は、文字が理解できない未満児やおりがみに苦手意識を抱く子の興味にとって適切な援助にならないという欠点となる。また、川並³が「おりがみのようにお母さんとならんで、お母さんの手つきをまねしながら何かをつくるという作業は、順序を追って論理的に物事を理解する能力にもつながります。」と説明するように、実際の「作る」または「折る」を追体験することで理解につながっていく。この点についても、おりがみ図鑑は不得意とするが、その代替案として、本研究では折り紙を題材としたストップモーションアニメーションの制作課題を提案する。一般的な辞書では、ストップモーションアニメーションとは「アニメーション技法の一。絵や人形などの静止した対象物を、一こまごとに少しづつ動かしながら撮影するもの。また、その映像のこと。対象物が人形やぬいぐるみの場合は人形アニメーション、粘土製のものは特にクレーラーニメーションともいう。ストップモーションアニメ。こま撮りアニメーション。」と説明されるもので、昨

今ではスマートフォンで専用の無料アプリを使用することで簡単に制作することも可能なものである。このアプリを使い、折り紙を題材としたストップモーションアニメーションの制作（以降おりがみ動画と記述）をすることにより学生はおりがみ図鑑を制作する時とは異なる視点で折り紙と向き合うことができる予想した。辻⁴は、保育の造形においての材料について、『単に作品を構成するための要素の一つというものではない。子どもは、材料に対して「これはいったい何なんだ？」と問いかけることから始める。』と指摘している。そして、「この、感じ、考え、試し、失敗し、また考え、試すということこそが、子どもの発想や創意工夫、創造力を育む源であり、尊いものである。」と続ける。保育者養成校の学生にとってもおりがみ動画の制作が保育で使える教材という意図ではなくおりがみ動画制作を通して先に挙げた説明のための声掛けや苦手意識がある子が折り紙に興味を持てるようなイラスト、そして「作る」を真似して追体験することで理解する能力を養うことについて再考する機会となるのではないかと考えた。辻⁴が「失敗することによって多くの材料体験と、自ら創意工夫して壁を乗り越えるという機会を得ていく。」と続けるようにおりがみ図鑑と同様におりがみ動画も一つの道具や材料と捉えおりがみ指導を促す教材と捉え授業課題とした。以上のことを踏まえ本研究では、「おりがみ動画はおりがみ指導に効果があるか？」また「おりがみ動画制作体験の学修効果について」を研究の問い合わせし、おりがみ動画制作を道具としたおりがみ指導について実践をまとめていく。

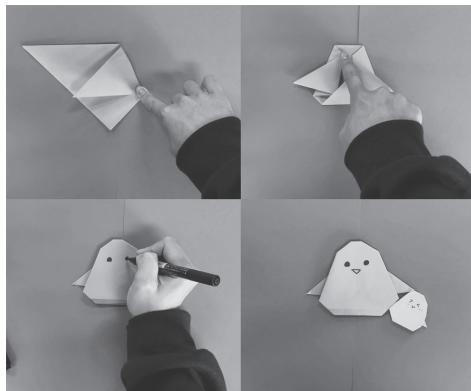


図2 おりがみ動画

第2章 調査方法

課題の実践

実践として本学幼児教育学科2年生の「幼児と造形表現II」の授業で、おりがみ図鑑とおりがみ動画の作成の2つの課題を実施した。折る折り紙の題材については、どちらも同じ題材とすることとし、題材自体は学生が選べるようにした。おりがみ図鑑については1年次より継続して作成している方法で作成させた。また、おりがみ動画については短い時間ではあるがアプリのダウンロードからその操作方法を説明した上で、すべての学生がストップモーションアニメーションの制作を経験したと確認した上で実施した。調査対象は授業履修者2年生39名を対象とした。以上のおりがみ図鑑とおりがみ動画の各制作の後にそれぞれアンケート調査を実施した。アンケート内容は下記の通り、分析はおりがみ図鑑とおりがみ動画を同じ質問で比較して行った。

アンケート調査

アンケートは、授業でおりがみ図鑑とおりがみ動画の制作を終えたタイミングでそれぞれ行った。

○「おりがみ図鑑のアンケート」

Q1-1 お家や実習中に幼児に対して、おりが

みの指導をおこなったことはありますか？

ある・ない

Q1-2 あると答えた方に質問です。おりがみ指導で工夫したことや困ったことはありましたか？

自由記述

おりがみ図鑑の制作についてお聞きします。

Q2-1 【おりがみ図鑑】の作成はあなたにとって簡単ですか？

難しい 1 2 3 4 5 簡単

Q2-2 理由 ()

Q3-1 【おりがみ図鑑】は、実習中に教材として使いやすいですか？

使いにくい 1 2 3 4 5 使いやすい

Q3-2 理由 ()

Q4-1 【おりがみ図鑑】は、子どものおりがみ制作の助けになると思いますか？

助けにならない 1 2 3 4 5 助けになる

Q4-2 理由 ()

Q5-1 【おりがみ図鑑】は、子どものおりがみへの興味関心を高めるために効果があると思いますか？

効果はない 1 2 3 4 5 効果がある

Q5-2 理由 ()

Q6-1 【おりがみ図鑑】の制作の中で、自分なりの表現や工夫を入れることができましたか？

できない 1 2 3 4 5 できた

Q6-2 理由 ()

Q7-1 今回制作した【おりがみ図鑑】について、幼児が折り紙の折り方を理解するため、また、興味関心を持つためにどんな工夫をしましたか？

自由記述

Q7-2 前の質問であげた【おりがみ図鑑】の工夫について、どのようなねらいでその工夫をしたのか紹介してください。

自由記述

○「おりがみ動画のアンケート」

Q1-1 【おりがみ動画】の作成はあなたにとって簡単ですか？

難しい 1 2 3 4 5 簡単

Q1-2 理由 ()

Q2-1 【おりがみ動画】は、実習中に教材として使いやすいですか？

使いにくい 1 2 3 4 5 使いやすい

Q2-2 理由 ()

Q3-1 【おりがみ動画】は、子どものおりがみ制作の助けになると思いますか？

助けにならない 1 2 3 4 5 助けになる

Q3-2 理由 ()

Q4-1 【おりがみ動画】は、子どものおりがみへの興味関心を高めるために効果があると思いますか？

効果はない 1 2 3 4 5 効果がある

Q4-2 理由 ()

Q5-1 【おりがみ動画】の制作の中で、自分なりの表現や工夫を入れることができましたか？

できない 1 2 3 4 5 できた

Q5-2 理由 ()

Q6-1 今回制作した【おりがみ動画】について、幼児が折り紙の折り方を理解するため、また、興味関心を持つためにどんな工夫をしましたか？

自由記述

Q6-2 前の質問であげた【おりがみ動画】の工夫について、どのようなねらいでその工夫をしたのか紹介してください。

自由記述

Q7-1 おりがみ動画の制作を行ったことで、次におりがみ図鑑の作成を行う際に反映させたい工夫はありますか？「ある」場合はどのような工夫か教えてください。

ある • ない

Q7-2 上記の質問で「ある」と答えた場合、どのような工夫か教えてください。

自由記述

第3章 研究結果

指導のための声掛けや折り紙に興味を持つてもらう工夫、また、理解する能力を育てる目的とし、おりがみ図鑑と共におりがみ動画の制作を課題として実施した。そして、2つの課題を比較しそれぞれの利点や欠点を明らかにした上でおりがみ動画を制作することによる保育者養成校学生への効果をまとめたためアンケートを実施した。以下よりその結果を示す。アンケート結果の内容はカテゴリ一分けをしそれぞれ回答数を数えた。

①学生の折り紙の指導に対する意識

はじめに、対象となる学生の現状を把握するため、折り紙の指導の経験とその際の工夫や困ったことの結果を示す。

表1 「折り紙指導の経験」

Q1-1 お家や実習中に幼児に対して、折り紙の指導をおこなったことはありますか？

選択肢	回答数	割合
ある	14	35.9%
ない	25	64.1%
全体	39	

Q1-2 折り紙指導で工夫したことや困ったことはありましたか？ 年齢や場所など簡単な事例形式で記入してください。		
カテゴリー	回答数	割合
折り方を言葉で伝えることが難しい	5	35.7%
子どものペース	3	21.4%
一緒に折る	2	14.3%
1つづつ確認してすすむ	2	14.3%
紙を折る難しさ	1	7.1%
難易度	1	7.1%
全体	14	

表1を見ると、39回答に対して、指導したことが「ある」と答えた学生は14(35.9%)、「ない」が25(64.1%)となった。また、指導したことがあると回答した学生が挙げた工夫や困ったことは、「折り方を言葉で伝えることが難しい」が5(35.7%)、「子どものペース」3(21.4%)、「一緒に折る」が2(14.3%)と続き、先行研究であげたように言葉の難しさや一緒に折ることにより折り方を見せる指導が実践されていることがわかる。また、子どものペースは、大人数への折り紙指導での個人差に対して学生は困っていることがわかる。

②作成の難易度

次に、おりがみ図鑑とおりがみ動画の比較を6つの質問をおりがみ図鑑とおりがみ動画で聞いた。その同じ質問への回答を並べて結果を示したい。

表2 「比較1 作成の難易度について」

Q2【おりがみ図鑑】の作成はあなたにとって簡単ですか？		
選択肢	回答数	割合
1	1	2.6%
2	5	12.8%
3	17	43.6%
4	13	33.3%
5	3	7.7%
全体(平均)	39	3.3

Q2-2 理由をおしえてください。		
カテゴリー	回答数	割合
子どもの見せ方・説明の仕方	13	34.2%
おりがみが好き・楽しい	12	31.6%
おりがみの技術	9	23.7%
題材の選択	4	10.5%
全体	38	

Q1-1【おりがみ動画】の作成はあなたにとって簡単ですか？

選択肢	回答数	割合
1	0	0.0%
2	7	21.2%
3	15	45.5%
4	7	21.2%
5	4	12.1%
全体(平均)	33	3.24

Q1-2 理由をおしえてください。

カテゴリー	回答数	割合
子どもに伝えるための視点・客観的な視点	7	21.9%
撮影や編集へのこだわり	6	18.8%
動画制作が好き、楽しい	5	15.6%
アプリの使い方	4	12.5%
手間がかかるが難しくはない	4	12.5%
自分なりに工夫ができる	2	6.3%
工程が少ない	2	6.3%
題材の選択	1	3.1%
全体	32	

比較の1つ目に、作成の困難さについて質問した。1～5で程度を選択する形式で数値が高くなるほど容易に作成できることを表す。平均値はほぼ同じで3.3程度となったが、おりがみ図鑑では3と4で合わせて76.9%を占め、おりがみ動画は3と4を合わせた割合は66.7%となったことからおりがみ動画の方が少しだけ難しいと感じる人が多い。その理由を見ると、おりがみ図鑑では「子どもへの見せ方・説明の仕方」が難しい原因とする回答が13(34.2%)となり続いて、「おりがみが好き・楽しい」が12(31.6%)となった。続いておりがみ動画を見ると「子どもに伝えるための視点・客観的な視点」のカテゴリーが7(21.9%)となり、続いて「撮影や編集へのこだわり」を突き詰めると困難だという回答が6(18.8%)と続いた。その次に「動画制作が好き・楽しい」が5(15.6%)という結果となった。この結果では、どちらも子どもへの伝え方が難しいと学生は感じていることがわかる。また、おりがみ動画では「アプリの使い方」が4(12.5%)あげられ、おりがみ図鑑と異なり今回はじめて動画制作を体験する学生の中にははじめてのための困難さを感じたという人もいた。このことでおりがみ動画の方が少しだけ困難だという結果につながったと考えると、実質的には

図鑑も動画も困難さでは差はないことがはつきりとわかる。

③実習中の教材として

表3「比較2 実習中に教材としての使いやすさ」

Q3-1【おりがみ図鑑】は、実習中に教材として使いやすいですか？		
選択肢	回答数	割合
1	3	7.7%
2	11	28.2%
3	9	23.1%
4	10	25.6%
5	6	15.4%
全体(平均)	39	3.13

Q3-2理由をおしえてください。		
カテゴリー	回答数	割合
おりがみをする機会・環境がない	8	20.5%
指導の補助	7	17.9%
言葉での説明は難しい	5	12.8%
おりがみをする機会・環境があった、あれば使いたい	4	10.3%
子どもが自主的にみて折れる	4	10.3%
自分で作った物	2	5.1%
題材の選択	2	5.1%
図鑑のクオリティ	2	5.1%
保育技術の向上のため	2	5.1%
指導の補助として不十分	2	5.1%
子どもの好みによる	1	2.6%
全体(平均)	39	

Q2-1【おりがみ動画】は、実習中に教材として使いやすいですか？		
選択肢	回答数	割合
1	9	27.3%
2	5	15.2%
3	10	30.3%
4	6	18.2%
5	3	9.1%
全体(平均)	33	2.67

Q2-2 理由をおしえてください。		
カテゴリー	回答数	割合
実習中の使用	15	46.9%
過程がわかりやすさ	10	31.3%
動画での表現	6	18.8%
言葉で伝える	1	3.1%
全体	32	

2つ目に、実習中に使う教材としておりがみ図鑑とおりがみ動画をそれぞれアンケートをとりを比較する。1～5で程度を選択する形式で数値が高くなるほど実習中に使いやすいことを表す。平均値を比較するとおりがみ図鑑は3.13、おりがみ動画は2.67と差がついた。使いににくいを表す1について、おりがみ図鑑は3(7.7%)に対しおりがみ動画は9(27.3%)となり3割近くが実習中には使い

にくいと答えている。理由としておりがみ動画の「実習中の使用」で15(46.9%)の回答があったカテゴリーは、動画は実習中に使う機会がないという回答となる。ただし、おりがみ図鑑でも実習中にそもそも「おりがみをする機会・環境がない」という回答が8(20.5%)となり、実習園の環境次第ではあるが、なかなか折り紙をして遊ぶ機会がないことがわかつた。ただし、実際に折り紙で遊んだりおりがみ図鑑を使った、または実習園の先生が使っていたとする回答「折り紙をする機会・環境があった、あればやりたい」は4(10.3%)とあげられてもいる。また実習中でも「言葉での説明は難しい」は5(12.8%)と回答された学生の困っているポイントが見える。

④折り紙制作への援助的な効果

表4「比較3 子どもの折り紙制作の援助的な効果」

Q4-1【おりがみ図鑑】は、子どものおりがみ制作の助けになると思いますか？		
選択肢	回答数	割合
1	0	0.0%
2	2	5.1%
3	8	20.5%
4	7	17.9%
5	22	56.4%
全体(平均)	39	4.26

Q4-2理由をおしえてください。		
カテゴリー	回答数	割合
子どもが自主的に折れる	8	27.6%
実際のおりがみだから(イメージしやすい、触って確認できる)	6	20.7%
折る手順がわかる	4	13.8%
子どものベースに合わせて見れる	3	10.3%
題材の選択	3	10.3%
指導の補助	3	10.3%
図鑑のクオリティ	1	3.5%
保育技術が向上し結果として子どもへの指導に繋がる	1	3.5%
全体	29	

Q3-1【おりがみ動画】は、子どものおりがみ制作の助けになると思いますか？

選択肢	回答数	割合
1	1	3.0%
2	6	18.2%
3	8	24.2%
4	11	33.3%
5	7	21.2%
全体(平均)	33	3.52

Q3-2 理由をおしえてください。

カテゴリー	回答数	割合
折っているところが動いて見える	10	35.7%
言葉では伝わらない部分が伝わる	4	14.3%
過程が伝わりやすい	4	14.3%
自分のペースで見える	2	7.1%
動きでは伝わらない部分もある	2	7.1%
視覚的に理解しやすい	2	7.1%
何度も見返すことができる	1	3.6%
飽きた	1	3.6%
アレンジができるなくなる	1	3.6%
使う機会がない	1	3.6%
全体	28	

3つ目に、それぞれの作品が子どものおりがみ制作の助けになると思うか学生自身の意見を聞いた。はじめに、その程度を1～5で回答してもらった。1が「助けにならない」で数値が増えると「助けになる」という意味になる。平均値はおりがみ図鑑が4.26、また、おりがみ動画は3.52となり大きな差が見られた。おりがみ図鑑が助けになる理由として、「子どもが自主的に折れる」が8(27.6%)、「実際のおりがみだから（イメージしやすい、触って確認できる）」が6(20.7%)、「折る手順がわかる」が4(13.8%)が続き、子どもたちが自主的に使える道具であることが見えてきた。対して、おりがみ動画の結果では「折っているところが動いて見える」が10(35.7%)、次に「言葉では伝わらない部分が伝わる」が4(14.3%)、また「過程が伝わりやすい」が4(14.3%)と続き、見る環境があれば、どう折るのかが伝わりやすいことが利点だと考えていることがわかった。

⑤興味関心への効果

表5「比較4 折り紙への興味関心を高める効果について」

Q5-1【おりがみ図鑑】は、子どものおりがみへの興味関心を高めるために効果があると思いますか？

選択肢	回答数	割合
1	0	0.0%
2	2	5.1%
3	11	28.2%
4	10	25.6%
5	16	41.0%
全体(平均)	39	4.03

Q5-2 理由をおしえてください。

カテゴリー	回答数	割合
制作過程がわかる	14	48.3%
デザインにこだわる	7	24.1%
たくさんの種類がある	3	10.3%
触れることができる	2	6.9%
おりがみ自体の人気	1	3.4%
文字の説明がある	1	3.4%
指導の補助	1	3.4%
全体	29	

Q4-1【おりがみ動画】は、子どものおりがみへの興味関心を高めるために効果があると思いますか？

選択肢	回答数	割合
1	0	0%
2	0	0%
3	6	18%
4	15	45%
5	11	33%
全体(平均)	33	4.09

Q4-2 理由をおしえてください。

カテゴリー	回答数	割合
ストップモーションアニメ	11	45.8%
動きがある	8	33.3%
何度も見返すことができる	2	8.3%
理解しやすい	2	8.3%
完成までがわかるから	1	4.2%
全体	24	

4つ目は、それぞれの作品が子どもの折り紙への興味関心を引く効果があるかを聞いた。はじめに、その程度を1～5で回答してもらった。数値が高いほど興味関心を高める効果があると考えられている。結果を見るとおりがみ図鑑もおりがみ動画も平均値は4以上でどちらも同じくらい興味関心を高める効果があるという結果となった。またその理由として、図鑑は「制作過程がわかる」という子どもの伝わりやすさが14(48.3%)と半分程度の回答を得ており、対して、おりがみ動画は「ストップモーションアニメ」のカテゴリーが11(45.8%)また「動きがある」が8(33.3%)で動画自体の面白さが興味関心を高めると考えられていることがわかった。

⑥表現の工夫

表6「比較5 自分なりの表現や工夫について」

Q6-1【おりがみ図鑑】の制作の中で、自分なりの表現や工夫を入れることができましたか？

選択肢	回答数	割合
1	0	0.0%
2	5	12.8%
3	18	46.2%
4	11	28.2%
5	5	12.8%
全体(平均)	39	3.41

Q6-2理由をおしえてください。	回答数	割合
・イラスト	5	21.7%
・折り目に点線	4	17.4%
・矢印を入れる	3	13.0%
・番号を入れる	2	8.7%
・わかりやすい言葉	2	8.7%
・おりがみを丁寧に折った	2	8.7%
・シンプルにした	1	4.3%
・細かな手順	1	4.3%
・色数を多くした	1	4.3%
・手順を簡略化した	1	4.3%
・季節感で興味を持たせる	1	4.3%
・全体	23	

Q5-1【おりがみ動画】の制作の中で、自分なりの表現や工夫を入れることができましたか？

選択肢	回答数	割合
1	1	3.0%
2	3	9.1%
3	9	27.3%
4	11	33.3%
5	9	27.3%
全体(平均)	33	3.73

Q5-2 理由をおしえてください。	回答数	割合
・動画の構成	5	26.3%
・手を入れて折っているように見せる	2	10.5%
・強調するため同じ動作を繰り返した	2	10.5%
・アプリの機能	2	10.5%
・小道具を入れる	2	10.5%
・シールなどを使う	1	5.3%
・イラスト	1	5.3%
・時間がなかった	1	5.3%
・ゆっくりした段階	1	5.3%
・素材による表現	1	5.3%
・撮影方法	1	5.3%
・全体	19	

5つ目に、それぞれの道具を使って作品を作る際に、自分なりの表現や工夫が入れやすかったか、自由度があったかを聞いた。はじめに、その程度を1～5で回答してもらった。数値が高いほど自分なりの表現や工夫を入れることができ、自由度が高かったと言える。平均値を見ると、おりがみ動画の方が少しだけ数値が高く、表現の工夫ができる可

能性を感じていると考えられる。またその理由として、おりがみ図鑑では「イラスト」を入れる工夫が5(21.7%)、「折り目に点線」が4(17.4%)など、動画でも可能な工夫にとどまった。対して、おりがみ動画では、「動画の構成」5(26.3%)があげられ、続いて「手を入れて折っているように見せる」2(10.5%)と「強調するため同じ動作を繰り返した」2(10.5%)があげられた。おりがみ動画での表現の工夫として、動くことを使った動画ならではの表現があげられたと言える。

⑦子どものための工夫とねらい

表7「比較6 子どものための工夫について、その内容とねらい」

Q7-1今回制作した【おりがみ図鑑】について、幼児が折り紙の折り方を理解する為や、興味関心を持つためにどんな工夫をしましたか？

カテゴリー	回答数	割合
点線や矢印	9	23.1%
言葉での説明	6	15.4%
折り方	5	12.8%
イラスト	5	12.8%
遊びへの展開	4	10.3%
題材	3	7.7%
細かな手順	3	7.7%
手順を簡潔にする	1	2.6%
色数が多い素材を使った	1	2.6%
関連する折り紙を加える	1	2.6%
全体	39	

Q7-2【おりがみ図鑑】の工夫について、どのようなねらいでその工夫をしたのか紹介してください。

カテゴリー	回答数	割合
過程が伝わるように	19	48.7%
折り紙を楽しむために	9	23.1%
自分で折ることで達成感を持てるように	6	15.4%
自主的に始められるように	5	12.8%
全体	39	

Q6-1 今回制作した【おりがみ動画】について、幼児が折り紙の折り方を理解する為や、興味関心を持つためにどんな工夫をしましたか？

カテゴリー	回答数	割合
手を入れた	11	35.5%
始まりと終わりに動かす演出	3	9.7%
強調	3	9.7%
過程を詳しく	1	3.2%
マジック的な演出	1	3.2%
紙を回転させ、手前から折るように見せる	1	3.2%
小道具を入れた	1	3.2%
イラスト	1	3.2%
何度も手順を繰り返した	3	9.7%
子ども達が自分で工夫できるような展開を用意した	1	3.2%
ゆっくりとした展開	1	3.2%
簡単な題材	1	3.2%
細かな手順	1	3.2%
撮影方法	1	3.2%
ジオラマで表れるを表現	1	3.2%
全体	31	

Q6-2【おりがみ動画】の工夫について、どのようなねらいでその工夫をしたのか紹介してください。		
カテゴリー	回答数	割合
理解しやすいように	23	74.2%
楽しさを伝えるため	7	22.6%
自動的に折りたくなるように	1	3.2%
全体	31	

6つ目として、子どものためにどんな工夫をしたか工夫の内容とそのねらいについて質問した。結果を見るとおりがみ図鑑では、「点線や矢印」が9(23.1%)、「言葉での説明」が6(15.4%)と折り順を正確に伝えるための工夫が上位となった。対して、おりがみ動画では動画の中に自分の「手を入れた」が11(35.5%)となり、折るという行為を見せようとしていることがわかる。また、続いて「始まりと終わりに動かす演出」3(9.7%)は楽しさを伝え興味を持ってもらう工夫があげられた。次に工夫のねらいを比較すると、両方に大きな差はなく、折る過程や理解のためが多数を締め、それに続いて楽しさを伝えるカテゴリーが回答されていた。

以上のように、6つの視点でおりがみ図鑑とおりがみ動画を比較すると、作成に当たっての難易度や、実習中の教材についての使用、興味関心を高める効果、工夫をするねらいなどでは大きな差がない結果となった。そして、子どもが自動的に使うときにはおりがみ図鑑の方が助けになり、おりがみ動画の方が表現の自由度が高く、伝えるための工夫についてもおりがみ動画の方がさまざまなアイディアが出る結果となった。

これまでの結果から、子どもとおりがみを実際に行う際にはおりがみ図鑑の方が使いやすいことが言えるが、材料体験としてのおりがみ動画の制作によって、表現の工夫や伝えるための工夫について新しい視点の発見が期待できると言える。また、この結果を予想し、おりがみ図鑑に反映させたいおりがみ動画での気づきはあるか、そして、それはどんな工

夫かをアンケートの中で質問した。

表8「おりがみ動画の制作から気づく、おりがみ図鑑に反映させたい工夫について」

Q7-1【おりがみ動画】の制作を行ったことで、次に【おりがみ図鑑】の作成を行う際に反映させたい工夫はありますか？

選択肢	回答数	割合
ある	10	30.3%
ない	23	69.7%
全体(平均)	33	

Q7-2 上記の質問で「ある」と答えた場合、どのような工夫か教えてください。

カテゴリー	回答数	割合
細かな手順	3	33.3%
動画で伝えたことを言葉で説明	2	22.2%
イラスト	2	22.2%
楽しい演出	1	11.1%
計画	1	11.1%
全体	9	

表8ではおりがみ動画の制作を行なったことで、おりがみ図鑑の作成に反映させたい工夫があるか、その工夫の内容について質問している。「ある」と答えたのは10(30.3%)となった。このことからおりがみ動画の制作とおりがみ図鑑の制作の繋がりを理解する学生は多くないことがわかり、今後の課題となった。次に、「ある」と答えた学生があげた工夫の内容を見ると、おりがみ体験から、伝えるためにはもっと「細かな手順」が必要なことが3(33.3%)回答されており、動画の中で裏返したりなど動きで説明した部分を、どう図鑑の中で言葉などで伝えるか工夫を使用とする姿が見えた。

第4章 考察と今後の課題

本研究はおりがみ指導に必要な声掛け、折り紙に興味を持たせること、そして「作る」を通して理解する能力を養うことという3つの要素について、おりがみ図鑑とおりがみ動画の2つのツールを使った材料体験を実践し、おりがみ動画の制作体験の学修効果について、学生へのアンケートから考察をした。結果として、制作に当たっての難易度や、実習中の教材についての使用、興味関心を高める効果、工夫をするねらいでは、おりがみ図鑑とおりがみ動画では大きな差がないと学生が評価し

ていることがわかった。また、子どもとおりがみを実際に行う際にはおりがみ図鑑の方が使いやすいことが言える。そして、材料体験としてのおりがみ動画の制作によって、表現の工夫や伝えるための工夫について、おりがみ図鑑とは異なる視点の発見が期待できると言える。今後の課題として、おりがみ動画作品を使った効果のある声掛けや子どもの興味のもたせ方や子どものおりがみの折り方の説明方法について考察するとともに、保育者と子どもがよりよいおりがみ体験が得られるための図鑑と動画を使った活動のあり方をデザインしていきたい。

引用文献

- 1) 五十嵐祐子：折り紙の歴史と保育教材としてのおりがみに関する一考察、浦和大学・浦和大学短期大学部 浦和論叢(46)、2012
- 2) 梨元竜子：保育者養成における「折り紙」指導の必要性についての一考察—実習時における経験に関する学生アンケート調査を基にして—、新潟青陵大学短期大学部研究報告第(45)、2015
- 3) 川並知子：いちばんよくわかる おりがみの本 園長先生が教える 親子で楽しむおりがみ遊び、株式会社日本ヴォーグ社、2016
- 4) 辻泰秀：幼児造形の研究保育内容「造形表現」、萌文書林、2014

初年次教育における他学科学生との交流の効果

The effect of Students' Cross Departmental Interaction on the first year experience

茂木 七香¹⁾
Nanaka MOGI

矢田貝 真一²⁾
Shinichi YATAGAI

1. はじめに

1990年代以降に我が国の大学で急速な広がりを見せた初年次教育は、2001年にはすでに80%の大学での実施が報告されている¹⁾。大垣女子短期大学（以下、本学）でも、オリエンテーションの延長として従来から行われてきた初年次生向けの大学の学びへの導入教育を2010年度から「初年次教育」とし、全学科共通のプログラムで実施している。2013年からは学びの深化を目的に全学科教員の指導による学科混成少人数グループでの「基礎ゼミ」が始まった。2019年度の取組については既に報告したが²⁾、そこに示された基礎ゼミ終了時の質問紙感想欄の自由記述内容の分析から、他学科の学生との学修状況の交流が学生にとって自らを振り返る機会となり、自己の成長を実感したり自己を客観視したりする姿が見出された。そこで本稿では、基礎ゼミ授業時に学生が記入したワークシートを用いて、他学科の学生との交流が学生の自己理解にどのような効果を与えたのかをさらに詳しく検討する。また、コロナ禍の2020年度に実施した基礎ゼミについても報告する。

2. 方法

(1) 授業について

本学では幼児教育学科、デザイン美術学科、

音楽総合学科、歯科衛生学科の全学科1年次生を対象に、初年次教育を含む授業として「教養・キャリア基礎演習Ⅰ」（前期）・「教養キャリア基礎演習Ⅱ」（後期）を週1コマ（90分）行っている。2019年度には、全学科教員をファシリテーターとして、学科混成の少人数グループ（7～8名、以下、小グループ）による演習（「基礎ゼミ」）を前期・後期それぞれ1回ずつ実施した。

(2) 分析対象と分析方法

2019年度後期の基礎ゼミの授業では、自らの1年間の学修を振り返る内容のワークシートを記入させ、これに基づいて専門科目の学修で習得できしたことや今後の課題などを学生同士で発表させ、相互の質問や意見交換などを行った。ここで記入したワークシートの「他の人の発表への感想や意見」欄への自由記述内容を研究対象とし、以下の手順で分析した。

- ① 記述の内容に「自分自身」について言及した内容が書かれているものを抽出。
- ② ①で抽出した記述の内容をKJ法³⁾の手法を用いて分類。

なお、本研究の内容は本学研究委員会にて倫理基準等を審査・承認されており、基礎ゼミ実施後の質問紙調査やワークシートを分析

1) 大垣女子短期大学総合教育センター・学生相談室

2) 大垣女子短期大学総合教育センター

表1 自分自身について言及した記述の学科別の割合

学科と人数	自分自身に言及した記述の割合	記述例
幼児教育 (N=42)	33.3%	自分も目標に向けて頑張らなければならないという気持ちになった。 自分もできないことには焦らずに克服していきたいと思った。
音楽総合 (N=41)	43.9%	私はまだあいまいなので、自信をもって身に着けた！！といえるようにしたい。 私も自分に甘えずもっと努力しなければいけないと思った。
デザイン美術 (N=23)	39.1%	私も苦手なことを嫌いと決めつけずに頑張りたいです。 自分がいかに適当に考えていたか思い知らされました。
歯科衛生 (N=45)	66.7%	皆、夢にむかってがんばっていて、私も頑張ろうと思いました。 自分では気づかなかっただけど、話を聞いて、自分もできるようになってたことに気づけた。
合計 (N=151)	47.0%	

表2 自分自身について言及したコメントのKJ法による分類

カテゴリー ^{グループ}	カテゴリー	サブカテゴリー	回答例
自らの状況への気づき	現時点 (7)	出来ていること(4)	自分もできるようになっていることに気づけた
		出来ていないこと(1)	自分がいかに適当に考えていたか思い知らされた
		具体的な内容(2)	自分もアイディアが浮かばないことがある
	未来 (1)		つらさをこえたらよいことがあると思えた
今後の学修へのモチベーション	全体的態度	(弱い意思) 頑張れる (1)	みんな頑張っていると思うと頑張れる
		やや弱い意思(頑張りたい) (10)	私も日々の勉強をがんばりたい
		やや強い意思(頑張ろう) (21)	皆同じなので私も頑張ろう
		強い意思(頑張らなくては) (11)	自分ももっと頑張らないと
	具体的な目標	弱い意思(～たい) (13)	放課後残って練習していきたい。
		強い意思(～なくては) (3)	自分も実行に移さなきゃ
他者との関係		決意表明(～します) (2)	○○(職業名)になるよう、頑張ります
		応援する視点(1)	自分も頑張るけどみんなを応援したい
		対抗する視点(1)	私も負けないようにしなきゃ

対象とすることが許可されている（承認番号R1-1）。本分析には、研究の趣旨を理解し文書により同意した学生のワークシートのみを用いている。

3. 結果

(1) 自分自身に言及したコメントの割合

他学科の学生の発表を聞きながら、自らの学修を振り返ったり今後の学修への意欲を示したりするなど「自分自身」に言及したコメントの学科別割合とその内容の一例を表1に示す。ここに含まれていない記述は、「他学

科で学んでいる内容を色々聞けて良かった」「みんなそれぞれの学科で沢山の知識を身につけたことが分かった」など、項目で問われた内容についてのみ答えていたものである。学科別に割合を比較してみると、歯科衛生学科での割合が他学科から突出していることが明らかである。

(2) コメント内容の分類

次に、KJ法の手法に基づいて71件の思想を読み、類似したものをまとめる中でカテゴリーの生成や再分類を行った。再度各切片を読み、各カテゴリーの関係性を見直してカ

テゴリー間での切片の移動やあらたなカテゴリーの生成を経た結果、最終的に3つのカテゴリー・グループ、4つのカテゴリー、12の小カテゴリーが生成された。(表2)。

4. 考察

(1) 学科による違いについて

まず、自分自身について言及したコメントが歯科衛生学科で突出して多いという結果(表1)について考えてみる。本学の学科構成を見ると、どの学科も高い専門性や技能を求める学修内容であり、目指す資格のある学科・コースも多い。その中でも歯科衛生学科は最終学年で一定の合格基準の定められた国家試験をクリアしなくてはならない。このため、日ごろの学修においても自らの知識や技術のレベルを意識する機会が多く、必要とされる基準を満たしているかという視点で捉える傾向があるのではないかと思う。このことが、他学生の姿から自らを省みるコメントにつながったのではないかと推察される。

(2) 学生の心情と表現形との関連

他学科の学生の学修成果や今後の課題の発表に触発されて自分自身の学修へのモチベーションを表したコメントを読んでいくうちに、学生たちの心情とそれを表す表現形の多様さに目を引かれた。これについては別稿でも一部報告したが⁴⁾、実行に対する思いや実現可能性の度合い、なりたい自己への願望などにより微妙に異なる表現が使われている。授業後のミニッツペーパーなどへの学生の記述にも「頑張りたい」というような表現は頻繁に使用されており、「社会的のぞましさ」の現れとも取れるが、こうやって類似した表現形を多数比較してみるとその差異が明らかとなり、その表現形を用いてコメントを書いた学生の心情がよくわかる。今回の分類ではそれらの比較を通して、表現の違いを「意思の強さ」というサブカテゴリーとした。

(3) 他者との交流による自己への気づき

基礎ゼミでの他学科学生との関わりの中で自らの状況への気づきを得た学生の姿は、発達心理学における自己理解の発達過程と合致する。他者とのさまざまな関わりを通じて自分を相対的かつ客観的に見つめる「社会的比較」を行う時期は小学校中学年から高学年頃だと言われており、他者との比較で自らの成功・失敗や得意・不得意に気づき、自己理解を深めていく⁵⁾。通常は同じ学科の学生と共に授業を受け、その中の出来不出来を比較して自らが出来ないと感じた学生にとって、その学修内容は身に着けたと言えるものではないであろう。しかし全く専門の異なる他学科の学生と比較すれば、確かに学修したと言えるものである。比較する他者が異なることで、学生自身の学修への実感も変わってくる。また、自尊感情を向上させる方法として、自己肯定化理論の考え方では全体的な自己価値を肯定的に捉えることができればある特定の領域で自己価値が脅かされたとしても自尊感情を維持することができると言われているが⁶⁾、他学科の学生との比較で自分で気づかなかつた自己価値を認識することで、自尊感情を維持しこれからも頑張ろうというモチベーションも上がる。こうしたことから、基礎ゼミでの他学科学生との交流は学生の自己への気づきを促し、自己理解の深まりや自尊感情の維持・向上、今後の学修へのモチベーションへつながったことが窺える。

初年次教育を少人数のゼミ形式で行う事例は多く報告されているが、その人数は5名～20名程度と幅がある^{7～11)}。また、グループの構成者の所属学科は単学科のものもあるが^{7, 8)}本学のように学科混成で実施している例も見られる^{9～11)}。内容はいずれも、コミュニケーション・トレーニング⁹⁾や大学での学修に必要なプレゼンテーション力、聞き方や読み方の基本など学ぶもの¹⁰⁾、他者と協働する力(チームワーク力)を育てるもの¹¹⁾など、所属

学科の専門性には直接関連のないものである。本学で実施されているように、専門的な学修内容を活かしつつ学科混成少人数グループで学生同士がコミュニケーションを行う形のものは非常に珍しいため、この形態での基礎ゼミを今後も継続していきたい。

5. コロナ禍での初年次教育・基礎ゼミの実施状況

2020年度はコロナ禍の異例の状況下で初年次教育や基礎ゼミが実施された。その概要についてここで振り返る。

(1) 2020年度前期の様子

2020年度は、当初の計画では前年同様に教養・キャリア基礎演習ⅠⅡにおいて初年次教育、基礎ゼミを実施する予定であった。しかし、想定外の新型コロナウイルス（以下、COVID-19）の広がりとその感染拡大防止のため、4月からの対面授業の開始が延期となつた。本学では5月の連休明けから遠隔授業を開始し、6月から対面授業を開始した。これに伴い、前期の初年次教育は6月10日（水）の学科毎の一斉講義形式での説明のみとなり、少人数グループでの学科間交流は実施できなかつた。授業時間外に課したレポート課題（「なぜ私は大垣女子短期大学に入学したのか」）は回収し、学科での閲覧後、総合教育センターで集約・保管した。

(2) 2020年度後期の様子

全学科混成グループで学生間の交流を実現させるために、検討を重ね、いわゆる3密（密閉・密集・密接）を避けながら1部屋30名ずつ、6部屋に分かれて行う一年間の学びの振り返りの基礎ゼミを12月2日（水）に実施した。総合教育センター教員2名と各学科の教務委員である教員4名の計6名が各部屋のファシリテーターを担当した。前期基礎ゼミの授業時間外課題で学生が書いたレポートを各自に配り戻し、再度読み返させた後、一年間の学修成果や今後の課題についてワーク

シートを記入させた。COVID-19感染防止の観点から従来のような学生間の対面での意見交流は困難となつたため、受講者全体を対象としたアンケートを学生ポータル（学内のLMS：Learning Management System）を通じてGoogleフォームで事前に行った（図1）。この結果をまとめたパワーポイント資料を総合教育センターで作成したものを共通資料として各部屋で提示し、各学科の学生から寄せられたコメントを紹介しながら授業を進めた。

学修成果に関する記述の中には当該学科の学生にしか理解できない専門的な内容が含まれていたため、教室内の学生に具体的な説明を求めた。例えば筆者の担当したクラスでは、幼児教育学科の保育技術の「パネルシアター」、音楽総合学科の「和声」、デザイン美術学科の「MAYA」、歯科衛生学科の技術名「スケーリング」などを当該学科の学生に説明してもらった。説明する側としては、それが学科外の者には理解できない専門用語であることを再認識し、それが分かるようになっていることで自己の学修成果を実感する機会となつた。授業後の学生の感想からは、2019年度に実施した基礎ゼミ同様、他学科の学修についての意見交流の良い機会であったことや、自らの学修成果を実感したり課題を見出したりした様子が伝わってきた。担当した教員からは昨年同様の手ごたえを伝える一方で、学科間の交流と言ひながら一方通行の情報共有に留まり、個々の学生の交流が行えなかつたことへの残念な気持ちが表出された。担当教員らは、少人数のリラックスした雰囲気の中で和気あいあいと語り合う昨年度基礎ゼミでの学生の姿を見ているため、コロナ禍でも工夫して同じような場を提供することができないかという提案もあった。

(3) コロナ禍での基礎ゼミ実施に向けて

2021年1月の現状からは、2021年度にもCOVID-19感染対策が必要な状況下で基礎ゼ

教養キャリア基礎演習 II：学びの振り返りアンケート	
あなたの所属する学科は？ 【 幼児教育 音楽総合 デザイン美術 歯科衛生 】	
これまでに受けた専門科目の授業で、自分の専門分野に関する知識や技能が身についたと思いますか？	
【身についていない あまり身についていない まあまあ身についた 身についた】	
入学後の学びで、「これができるようになった・わかるようになった」と実感を持って言えることはどんなことですか？具体的に教えて下さい。（自由記述）	
今後の短大での学びについて考えてみて、これから力を入れて取り組みたいこと、または取り組むべき課題だと考えていることは次のうちのどれですか？（複数回答も可能）	
1)専門科目の知識 2)専門科目の技能 3)社会人に必要なコミュニケーション能力 4)社会人に必要な知識や教養 5)より良い人間関係の構築 6)余暇時間の充実	
あなたが今後力を入れて取り組みたいこと、または取り組むべき課題だと考えていることの、もう少し具体的な内容について教えてください。（自由記述）	
その他、これまでの短大での学びを振り返って思ったことや、意見・要望などがあつたら書いて下さい。（自由記述）	

図1 2020年度後期基礎ゼミの事前アンケートの内容 (Google フォームで実施した内容)

ミを実施せざるを得ないとと思われる。従来の方法の利点を残しつつ、感染対策を十分に行うためには、どのような方法があるだろうか。

感染対策上の支障となる一番の要因は、基礎ゼミでの主たる活動である「学生同士の直接対話」への制約である。本学での感染対策に関しては当初から3密を避けることが求められ、グループワークなどの対話もなるべく控える形で授業を行ってきた。しかし、今一度3密の意味を捉えなおすと、広い教室で換気を行い、座席の間隔を広くとて少人数でマスク着用での話し合いならば実施可能なのではないかとも考えられる。2019年度は現状では対話は困難であろうという判断のもとに従来通りの基礎ゼミ実施をあきらめてしまったが、2021年度は実施する前提で、安全な環境の確保や実施方法の検討などを関連する教職員とともにに行っていきたい。

また、コロナ禍という異例の事態により、全国の大学同様、本学でもICT活用が活発化し、学生たちも遠隔授業時にZOOMや学生ポータル、Google フォームなどの使い方を習得し、対面授業開始後も授業や学生生活関係の連絡などの日常で使いこなしている。また、個々の教員も、学生全員が所持し一番身近で使い慣れたツールである携帯電話を使っ

て授業中にテキスト入力で発言させたり、プレゼンテーション課題を動画で送らせたりと、従来の授業方法では考えられなかったような方法を教育に取り入れ始めている。最近の研究報告¹²⁾でZOOMのブレイクアウト機能を用いて一度も大学に通学していない一年次生を対象にゼミを実施した事例が報告されていたが、学生同士の交流も活発で対面のワークショップと同じ成果を得ることができたとのことである。このように、コロナ禍の制限された状況下でも、新しく開拓された方法を取り入れながら、従来の基礎ゼミと同じ効果的な学修・交流の機会を学生に与えることができるよう、検討と工夫を重ねてゆくことが重要であると考えられる。

文献

- 1) 初年次教育学会：初年次教育の現状と未来、世界思想社、京都、2013、p.12.
- 2) 茂木七香、矢田貝真一：初年次教育における全学科混成少人数グループ演習（基礎ゼミ）の役割と成果、大垣女子短期大学紀要、61：85-94、2020.
- 3) 川喜田二郎：発想法、中公新書、東京、1967、pp65-114.
- 4) 茂木七香、矢田貝真一：他学科学生との

- 交流が初年次生の学修意欲に及ぼす効果
－全学科混成少人数グループ演習（基礎ゼミ）ワークシートの分析から－、初年次教育学会第13回大会発表要旨集、50-51、2020.
- 5) 太田信夫、二宮克美、渡辺弥生：シリーズ心理学と仕事5 発達心理学、北大路書店、京都、2017、p.89.
- 6) 二宮克美、山本ちか、太幡直也、松岡弥玲、
音さやか：エッセンシャルズ心理学 心理学的素養の学び、福村出版、東京、
2015、pp.116-120.
- 7) 乙須翼、細野広美、内田智子、古賀貴子、
小川由起子、高井伸彦：初年次教育科目
「教養セミナーA」の実践と課題－学生
の成長時間と教育のプログラム評価に着
目して－、長崎国際大学教育基盤センター
紀要、2：13－26、2019.
- 8) 森理宇子：初年次教育における協働学修
の効果－「フレッシャーズ・セミナーa」
の授業実践を通して－、東京経済大学人
文自然科学論集、146:133-151、2020.
- 9) 渡部麻美：大学初年次教育におけるコミュ
ニケーションスキル・トレーニングの実
践、東洋学院大学「人文社会科学論集」、
34、41－55、2016.
- 10) 奥野真由、浦上萌、大橋充典、秦佳江、
行賽鉄平、野田耕：新設学部における初
年次教育の試み：学生の成長実感の質的
分析、久留米大学人間健康学部紀要、19
－26、2019.
- 11) 日本くるみ：「他者と協働する力（チー
ムワーク力）」を育てる初年次教育の試
み－2018年度フレッシュマン・プロ
ジェクトの授業を通して－、関西外国語
大学研究論集、111：323-338、2020.
- 12) 出村雅実：遠隔授業のみで実践した大学
一年生の集団づくりについて、日本デジ
タル教科書学会発表予稿集、9:59-60.
2020.

大学の授業における匿名発言の有用性について ～「sli.do」の利用を通して～

The Effectiveness of Anonymous Comments in College classroom —“Through the use of sli.do”—

茂木 七香¹⁾
Nanaka MOGI

1. 目的

2020年春、新型コロナウイルス（以下、COVID-19）感染拡大防止のため全国の大学で対面授業が中止され、遠隔授業が開始された。大垣女子短期大学（以下、本学）でも授業開始が当初の4月第1週から5月第2週に延期された上で、遠隔授業を行うこととなった。

筆者も担当科目を一部遠隔で行うことを見事に決定し、急遽いくつかのICTツールの使い方を学んで授業に導入した。最も頻繁に使ったのはsli.doである。sli.doはインターネットを介して無料で使用できるツールであり、「簡単に質問や投票ができ、講演者と参加者をつなぐことでミーティングやイベントを最大限に活用することを助ける」ものである¹⁾。学生ポータル（本学のLearning Management System:LMS）を通じてsli.doのリンク先アドレスを受講生全員に送り、授業開始時刻にアクセスさせて出席を取ったり、配信した資料についての感想を発言させて意見交流を行ったり、と遠隔授業の進行と実施に活用した。6月に対面授業が再開された後も、sli.doの使用が学生に好評であったことと、COVID-19感染防止の点から対面会話でのグループワーク等が実施不可能であったことから、発言機会の確保と学生間の意見交流

の目的で使用を継続した。

ここまで使用で、sli.doは手法として簡単に導入でき、学生の発言や交流を促すのにも効果的なツールであることが実感できたが、問題点にも気づいた。それは、従来の授業と異なりsli.doでの発言は「匿名」で行えるということである。機能上はsli.doでの発言時に実名を入力させることも可能であるが、使用開始当初、受講生たちは一度も登校しておらず初対面同士であったため、敢えて名前の入力を求めないこととした。sli.doの匿名性が学生に特に支持されていたこともあり、対面授業でも匿名での発言を継続した。従来の授業では教室で匿名のまま発言をすることは不可能であり、学生の発言は必ず顔と名前を伴つものであった。ICTツールの利用により、同じ教室で授業を受けている者であるということ以外の情報が全く無い、匿名での発言が可能となったのである。

インターネットを利用した匿名での発言について考える時、まず脳裏に浮かぶのは社会問題にもなっている「誹謗中傷」である。佐藤（2016）は著書「インターネットと人権侵害 匿名の誹謗中傷～その現状と対策」の中で「匿名であることは心理的な負担を軽減し、モラルの垣根を下げる効果がある」ようであり、「自分の名前や顔が知られなければ

1) 大垣女子短期大学総合教育センター

いつもはできない悪いことをやってみたくなる」のが人間の隠れた欲望なのだと述べている²⁾。2020年に起こったSNSによる誹謗中傷事件を扱った書籍にも、「普通の人」が匿名になったとたんに暴力的な言葉を吐く姿が「匿名性の刃」と表現されている³⁾。

このように、発言時の匿名性が発言内容に影響を及ぼすのであれば、不特定多数の閲覧が可能なSNSとは状況が異なるとはいえ、匿名発言をクラス全員が閲覧できるsli.doは大学の授業で用いるツールとして不適切なものなのではないだろうか。しかし学生の授業後コメントを読むと、sli.doでの発言は対面コミュニケーションの苦手な学生にとって気軽に発言し他者の反応を得ることのできる希少な場であり、他者の様々な意見を知ることで自らの視野を広げるのに役立っていることが窺えた。

そこで、匿名発言を大学の授業の中で安全に有効に活用するために、sli.doの授業での利用者を対象に探索的な質問紙調査を行い、利用の実態と利用時の意識、匿名の有無による影響などを明らかにすることを本研究の目的とする。

2. 方法

(1) 対象

筆者の授業を受講し、授業内でsli.doを使用する機会のあった同じ学科に所属する2年次・3年次の学生40名。

(2) 実施時期

2020年9月～12月の間に授業内でsli.doを使用し、その利用状況についての質問紙調査を2020年12月に実施した。

(3) 実施方法

質問紙は 1) sli.doについて 2) 匿名発言と実名発言について、の2つの部分から構成された。

1) sli.doについて：以下の項目による構成

① sli.do発言への参加状況を尋ねる項目

② sli.do使用への感想等を尋ねる10項目。「全くそう思わない」～「そう思う」の4件法で回答。項目内容は先行研究⁴⁾で用いられたものと、筆者が授業でsli.doを利用した時に学生のコメントに多く挙げられていた内容や筆者自身がsli.doでの学生の発言内容から感じたことなどから作成した。

③ sli.doの利点や欠点、利用方法を尋ねる自由記述2項目。

2) 匿名発言と実名発言について

①匿名発言と実名発言を比較してどのように感じるかを尋ねた11項目。「全くそう思わない」～「そう思う」の4件法で回答。各項目で尋ねた内容は先行研究⁵⁾で用いられたものと、著者が授業でsli.doを利用した時に学生から得られたコメントに多く挙げられていた内容や筆者自身が学生の匿名発言と実名発言を比較して感じたこと、匿名発言の主な特徴とされている内容^{2, 3)}を参考にして作成した。

②匿名発言・実名発言の利点や欠点、利用方法を尋ねる自由記述2項目。

本研究の内容については本学研究委員会にて倫理基準等を審査・承認されている（承認番号R2-1）。対象者には研究の趣旨を口頭と文面で説明し、研究参加への同意のある者のみ回答してもらった。調査は学生ポータルを通じて対象者全員にGoogleフォームへのリンク先と研究説明書を送信し、フォームへの匿名入力をもらうという形で実施した。

3. 結果

(1) 回答者

回答者は23名であった（回答率57.5%）。

(2) sli.doについて

授業でのsli.do使用時の発言の頻度につ

いて尋ねた結果を図1に示す。回答者の約70%がsli.do使用時には意見などの入力を「ほぼ全部した」と答えている。「あまりしなかった」「ほとんどしなかった」と答えた者は0名であった。

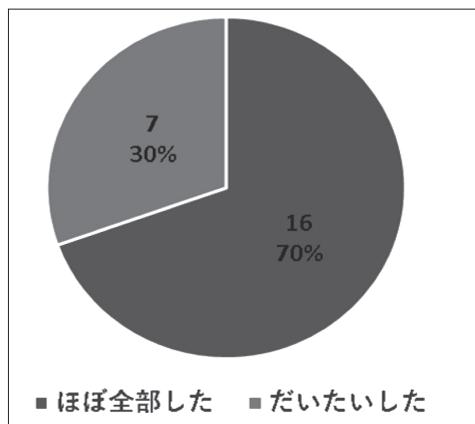


図1 sli.do 使用時の回答頻度

次に、sli.do使用への感想をたずねる10項目への回答結果を図2に示す。全ての回答者から「そう思う」と「まあそう思う」を合わせた肯定的な回答が得られたのは「授業での学びが深まった、授業に積極的に参加することができた、sli.doを使うことは楽しかった、クラスみんなの前で発表するより発言しやすい」の4項目であった。また、「全くそう思わない」と「あまりそう思わない」を合わせた「全くそう思わない」と「あまりそう思わない」を合わせた否定的な回答が大半を占めたのは「sli.doを使うことで気が散った(78.3%)、sli.doで『実名』で発言をしてみたい(87.0%)」であった。sli.doの利点と欠点を自由記述で尋ねた結果、11名から回答が得られた。利点で多かったのは「他者との意見交流」で、sli.doでは各自が送信し

図2 Sli.do使用についての感想

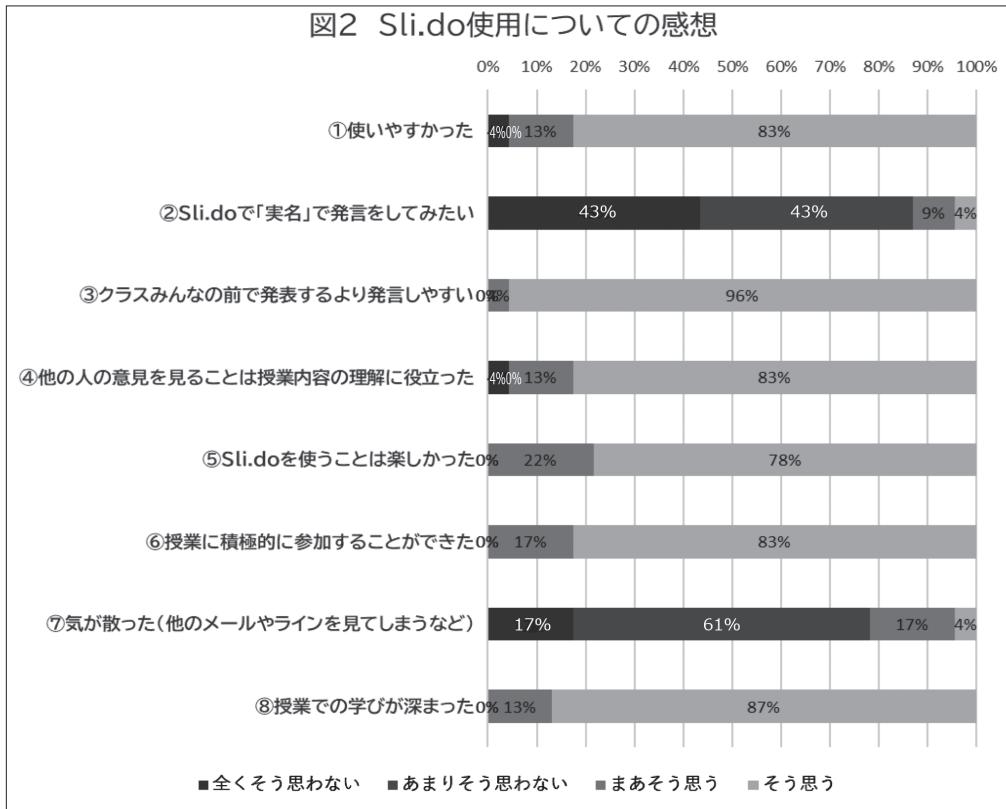


図2 sli.do 使用についての感想

表1 sli.doの利点（自由記述）

カテゴリー	人数	具体的な内容
他者との意見交流	7名	他の人の意見が見られる（参考になる 勉強になる 学びに繋がる） 全員の色々な考えが知れる
匿名発言	5名	意見が言いやすい（素直に落ち着いて発言できる 自信がなくても意見を発信できる 物怖じせず自由に発言できる）
発言しやすさ	3名	思ったことがいいやすい 気軽に発言できる 緊張せず発言できる
発言機会	1名	自分の思いを思いっきりみんなに知ってもらえた
リアルタイム性	1名	自分の意見はどう思われてるのかな、と気になって送り、自分の意見への先生の反応がすぐ返ってくるのが楽しい

表2 sli.doの欠点（自由記述）

カテゴリー	人数	具体的な内容
匿名発言	1名	どこまで書いていいのかわからず、余分なことを書いてしまうかも
携帯使用	2名	授業に集中しないかも SNSを見ている人がいる
通信負担	1名	WiFiがないとギガが心配

た回答を瞬時に一覧として見ることが出来るため、全員の様々な意見を知ることができる点が利点として多く挙がっていた。また、匿名であることが理由である利点を述べる記述も多かった。表1で「発言のしやすさ」とした記述については、匿名性によるものなのか文字入力によるものなのかが不明だったため、別カテゴリーとした。欠点を挙げる者は少なかったが、挙げられた内容はいずれも著者がsli.do使用時に懸案事項として感じていたものばかりだった（表2）。

sli.doの新たな利用法について尋ねた自由記述項目への回答者はいなかった。

（3）匿名発言と実名発言について

質問紙の後半部分である、匿名発言と実名発言についての質問への回答結果を図3に示す。全ての回答者から「そう思う」と「まあそう思う」を合わせた肯定的な回答が得られたのは、匿名発言は実名発言と比べて「発言に対する緊張が少なくなる、発言する機会が

増える、普段は話しにくいことが言える、自分の深い部分を表現できる」の4項目であった。また、「全くそう思わない」と「あまりそう思わない」を合わせた否定的な回答が多かったのは「誰が発言したかわからないのでやる気が低下する（95.7%）」「攻撃的・批判的な発言になる（87.0%）」「無責任な発言になる（82.6%）」「クラスのみんなの『ウケねらい』の発言をする（73.9%）」「話をおおげさにしたり、嘘を言ったりする（87.0%）」の5項目であった。回答がばらついたのは「良いコメントがもらえそうな発言をする」「誰が発言したかわからないので取り組まなくなる」であった。

匿名発言と実名発言の利点と欠点を自由記述で尋ねた結果、8名から回答が得られた。一覧にしたものを表3に示す。匿名発言の利点・欠点と実名発言の利点・欠点では表裏一体であり、匿名発言の利点は実名発言の欠点であるというような内容となっていた。匿名発言と実名発言の有効な活用についての自由

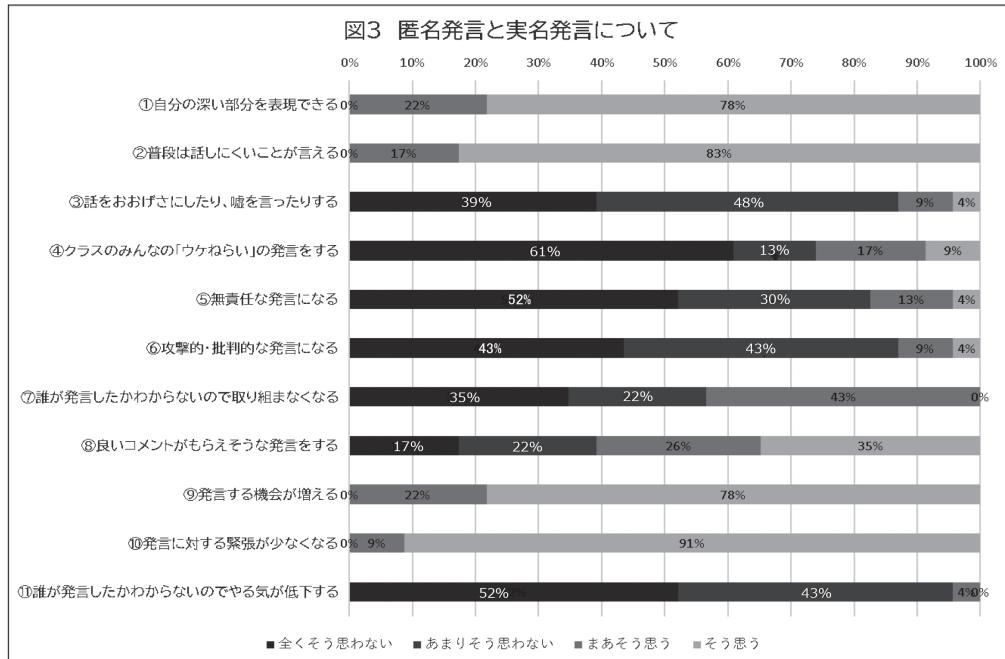


図3 匿名発言と実名発言について

表3 匿名発言と実名発言の利点と欠点（自由記述）

発言の種類	利点	欠点
匿名発言	発言しやすさ（気軽に 緊張せずに 不安でも安心して 自由に 周りを気にせず はっきりと）	責任感が薄れる 悪い意味での自由な発言になる 他人を 傷つける可能性がある その人の考えが分からぬ
実名発言	しっかりとした発言ができる 誰が何を考えているかがわかる	周りを気にする 本音が出にくい 自由な発言が出来ない 責任を持つ必要がある 名前がわかる

記述項目に回答した者は居なかった。

4. 考察

結果を考察する前に一つ言及しておかなくてはいけないのが、本調査の回答率の低さであり（57.5%）、通常授業の授業時間外課題などで学籍番号とともに Google フォームへの入力を求めた場合と比較すると非常に低い。研究依頼時に匿名である旨を伝えたことも理由の一つだと考えられるが、ここに匿名の特徴が表れているのではないかと思う。本調査の内容や目的から匿名で行う必要性があると判断した上で実施であったが、回答者は sli.do での発言に比較的積極的に参加した学

生だと思われるため、それ以外の学生たちの意見が得られなかつたことは今回の調査の限界である。潜在的に居るであろう、sli.do 利用や匿名発言に対して消極的あるいは批判的な学生の意見をどう取り入れてゆくかが今後の課題となる。

以上を踏まえた上で、以下に調査の結果について考察する。

(1) sli.do について

1) 発言のしやすさ・他者との意見交流機会

sli.do を使用した学生らの反応からは、授業での学びや発言意欲の高まりなどが示され（表 1）、先行研究⁴⁾で得られた「理解に役立つ

た、やる気が出た、楽しかった」という肯定的な評価と同様の傾向であった。発言のしやすさについては、自由記述の回答（表1）から「匿名性によるもの」「文字入力によるもの」の両方である可能性が考えられる。佐藤（2008）²⁾はインターネットを使用したコミュニケーションで自己開示が促進される際に、匿名性によるものか会話様式（文字・声）によるものかを明確にすることの必要性に言及しており、この点に留意して今後の使用方法を考えることも重要だと思われる。

匿名性の利点に関しては「落ち着いて・自信がなくても・物怖じせず」発言できるという記述があったが（表3）、ここには匿名ではない通常の対面発言で学生たちが感じている緊張や不安が表れている。sli.doを語学の授業で用いた先行研究⁶⁾でも、間違えたり同輩からいじめを受けたりすることを恐れて口頭での回答を躊躇していた学生たちが、sli.doの導入によって回答や質問を多く行い積極的になったという結果が示されている。本研究の対象となった授業では語学の授業のように正解・不正解があるような回答は求められないが、学生たちは自分の意見が正しいのか、他者にどのように受け止められるかを気にして対面では発言しにくいのだと思われる。

このことに関連するのが、sli.doの利点として多く挙げられていた「他者との意見交流」、他の人の意見が見られて学びに繋がる・参考になる・勉強になる、というものであり（表1）、sli.doと類似した双方向性のあるICTツールを用いた先行研究でも同様の傾向であった^{7)、8)}。自分の意見は他の人と比べてどうなのか、他の人はどのように考えているのかを瞬時に一覧として知る機会は対面授業ではまずない。sli.doでは匿名で入力した自分の回答が他の人の回答の中に交じって表示され、同じような回答がある安心感や他より秀でていると感じる満足感を得ることができる。また、教員からのコメント、中でも肯定

的なコメントを受けることは発言への意欲や自己効力感を高めることに繋がる。

実際の授業の中での例を挙げると、教育相談を行う際の非言語情報の重要性を習得させるために、2者間の会話場面の動画の視聴後に気づいたことをsli.doで回答させたことがあった。学生たちから挙げられた気づきは2者それぞれの表情や動作、声色や姿勢、視線やジェスチャーなど多岐に渡った。一人が挙げる項目は数個でも40名が挙げれば多数となり、それが他者と異なるものであれば希少価値となる。これらの回答を共有した後に再度動画を視聴させた結果、より多角的な視点から新たな気づきを得たというコメントが寄せられ、学びの深まりが実感できた。

2) 授業への集中について

sli.doを使用する際には学生は携帯電話から操作を行うため、授業への集中がそがれるのではないかと危惧したが、質問項目への回答では否定された（表1）。同様の結果を示す先行研究もあったが⁴⁾、授業を聞きながら携帯電話を操作することの難しさや集中への妨げに言及する意見を紹介したものもあった⁸⁾。本研究で出されたsli.doの欠点にも、「授業に集中していない人が増えるかも」「SNSを見ていたりする人がいる」などの意見が挙がっており、sli.doの使用が「携帯で他事をしやすい環境を提供していること」は否めない。この点について、吉岡（2014）⁸⁾が作成したツール「もばくり」では、投稿一覧は前方のスクリーンでしか見られない設定になっており、学生は投稿後には携帯を操作する必要がない。sli.doにはこのような機能はないが、自分の意見の入力後には画面を閉じて携帯を置くように指示するなど、同様の環境を作ることで授業への集中を保つことが必要である。

（2）匿名発言と実名発言について

1) 自己開示について

匿名発言が実名発言と比べて良いとする回

答の内容は、項目への回答からは、発言への緊張軽減や発言機会の増加など、sli.do の利点として挙げられていた匿名による要因とほぼ同じものであった（図 3）。さらに、普段は話しにくいことや自分の深い部分を表現できるなど、匿名時の自己開示の度合いの深まりも示された。匿名発言時の自己開示について 1 対 1 の面接条件で実験した研究⁹⁾では、自己の匿名性は相互作用時の不安感を低減させたが、自己開示への効果は見られなかつた。ここでは匿名性を「自己の匿名性」「他者の匿名性」とさらに分離して検討しており、他者の匿名性が自己開示を抑制することが明らかとなっている。本研究で行われた匿名発言では、自己の匿名性は保たれているが、受け手は匿名の他者一名ではなく、受講生全員である。クラス全体に向けて発言をする場合、発言を目にするのはクラスの中の者に限定され、発言に直接コメントするのは担当教員である筆者である。このような状況は、佐藤の研究を踏まえると「他者の匿名性」が保たれた状態とは異なるのではないかと考えられる。糸川（2019）の研究⁵⁾では他者を「面識のある他者」「面識のない他者」というように分けて捉え、面識のある 3 人で合意形成する際の匿名性の及ぼす影響を検討している。面識のある者同士の匿名での議論は効率的に合意形成に至るが否定的発言が少ないという結果が導き出され、議論の発想・展開は匿名、収斂は実名で行うテキストチャットシステムの検討が行われているとのことである。本研究で学生たちが匿名発言を行った相手の他者は、ここでいう「面識のある他者」という位置づけとなる。以上二つの先行研究の結果から、今後の授業で匿名発言を有効に活用するためには、本研究で「匿名発言」として扱ったものを、自己と他者の匿名性を分離する視点や、面識のある他者と面識のない他者を分けて捉える視点などを新たに加え、より細分化して検討する必要性がある。

2) 「誹謗中傷」との関連について

匿名発言で最も問題となっている誹謗中傷に繋がる攻撃的・批判的発言や無責任発言については、今回の調査では否定される結果となった（図 3）。ツイッターなどで誹謗中傷のトラブルがおこる落とし穴は「匿名」であることだと言われているが¹⁰⁾、佐藤（2012）の研究¹¹⁾では匿名性の対象となる情報を 11 種類に分類し、コンピューターを介したコミュニケーションで匿名の相手と会話する場合、他者に関するどの情報をどれくらい知りたいかを尋ねている。最も知りたい情報は性別であり、次いで年齢、趣味、性格と続く。本研究では学生たちの匿名発言の対象は同じ授業の受講生であり、性別と年齢の情報は既に明らかである。また、同じ学科に所属し、2 年次までに同じ授業を受講し、様々な活動を共にしているメンバーであり、お互いへの親密度や理解度も高い。このため、いわゆるインターネット上で誹謗中傷の原因とされる匿名発言とは異なった状況となり、ある程度の抑制のもとで節度のある匿名発言が行われていたのではないかと思われる。

3) 匿名発言の活用と注意点

匿名発言と実名発言それぞれの利点と欠点については発言のしやすさと発言への責任が論点となっており、匿名発言では発言がしやすいが責任が薄れる、実名発言では責任のある発言になるがそれが故に発言がしにくい、という結果であった（表 3）。これを見ると、匿名発言と実名発言のどちらかが良いとは一概に言えないが、他者からの視線を恐れて発言を躊躇する学生たちにとって、まずは匿名発言を活用することで自らの意見を他者に伝えることのハードルを低くすることができるのではないかと思う。この点について吉岡（2014）⁸⁾は、「学生を匿名でしか意見を言えない状態に留めておいてよいというもの

ではないが、本音で答えられる環境を提供することが face to face の関係の中で本音をぶつけ合えるための「かけ橋」となりうるのではないか」と述べている。筆者も、授業後のコメントから学生たちが sli.do での自分自身の匿名発言に対する他者の評価や反応によって自信を持ち、発言への意欲を高める姿を感じ取っており、匿名であっても発言を行うことが他者への発信や交流の経験となっていることを実感している。学生の中には、筆者が良いコメントをした匿名発言について実はあれは自分の発言であったと後から開示する者も時々あり、結果的に実名での発言が行えていることともなっている。

ただ、ここで一つ注意しておきたいのは、授業内での sli.do での発言は受講生や教員を受け手として行われているという場面上の制約である。学生たちの中には自分の意見を他者に知ってほしいという思いがあり、sli.do での匿名発言はこの発言欲求を安全に満たしてくれる。sli.do の利点の中にも「自分の意見を皆に知つてもらえた」というものがあり、さらに「どう思われるかと思って発言すると先生のコメントがすぐ返ってくるのが面白かった」という意見もあった（表 1）。ここでいう先生のコメントとは、おそらく良いコメントのことであると思われ、授業で大勢に向けて発言する際に、無意識であっても社会的にのぞましい意見を言ってしまうことは十分に予測できる。実際に sli.do に関する質問項目の「良いコメントがもらえそうな発言をする」については、肯定的な回答と否定的な回答がばらついていた（図 1、全くそう思わない 17%、そう思わない 22%、まあそう思う 26%、そう思う 35%）。本研究で sli.do を用いる際には、寄せられた回答を教室のスクリーンで閲覧しながら担当教員がコメントを加えるという形で活用しており、このことが学生の発言にバイアスを与える要因になっているとも考えられる。野入（1999）¹²⁾ はこ

の点について、学生と教員の間には成績を与える側と与えられる側という権力関係が存在していると述べている。匿名発言は直接の評価にはつながらないとはいえ、SNS で「いいね」がたくさんつくことを求めるように、受け手側の反応を過度に意識して偏った発言がなされていないか、注意深く見守りながら活用することが大切だと思われる。

（3）従来からの対面型授業への問い直し

2020 年度は COVID-19 感染拡大防止を発端に日本全国の大学で急速に ICT 活用が広まる一年となった。筆者の授業でも対面授業再開後にも、sli.do の他、Google フォームでの意見入力や調査の実施、授業関連の連絡や資料配付の学生ポータル利用、3 密を避けるための学内複数拠点での ZOOM や Microsoft Teams を用いた講義の実施など、現在の環境下で可能な限りの ICT を教育に導入した。日本の大学における ICT 活用は従来から進められており、学内に LMS を導入している大学は 2014 年時点で半数に及んでいる¹³⁾。高等教育における ICT を活用した授業実践の方法についても以前から各種報告されているが¹⁴⁾、本学ではハード面での制約や利用体制・サポートシステムの不備などがあり、実用は難しいのではないかと二の足を踏んでいたというのが実情である。しかし今回のコロナ禍ではこれらの問題にも対処せざるを得ず、LMS や ZOOM、Microsoft Teams、sli.do などの ICT ツールの使い方に関する FD 研修会を 5 月と 9 月に総合教育センターの主導で実施し、全教員の ICT 技術を高める取り組みを行った。

ツールとしての ICT の利用方法をある程度習得し一定の効果を実感した今、コロナ禍を抜け出した後に従来通りの対面型授業を行うという選択肢はもう無いと言っても良いであろう。対面型授業の機能を補完し強化する形で ICT 活用を行えば、これから情報化社会で活躍してゆく学生にとって有益な授業を提供

することができる。江澤（2019）¹⁵⁾はインターネット時代では一般市民が情報を受信する側であるのと同時に情報を複製・加工して発信する側ともなることから、情報発信者の倫理として守るべきマナーや社会的規範が必要であると述べている。また、「自分独自の判断は思い込みや偏見にとらわれる危険性が大あることに留意」し、「社会的な知のネットワークを構築する努力が重要である」¹⁵⁾としている。この点について、sli.doの活用は、学生各自が匿名性を保ちながら同じ授業の受講生という限定的匿名性のある他者との意見交流を通して自らの意見の位置づけを知ることを可能にする貴重な場である。自分と同じ意見や異なった意見に触れながら、一つの事柄に対する多角的な捉え方や多様な反応を同時に知ることは、従来の対面型授業の手法では実現できないものであり、ICTツールの活用によってこそ可能となるものである。今後は、匿名性の構成要素や分類を細分化し、実名発言へのかけ橋となるような匿名発言をどのような条件で行うことが有効であるか引き続き検討し、対面授業の中にICTツールを取り入れて行きたいと思う。

文献

- 1) sli.do <https://www.sli.do/about> 2021.1. 8.
- 2) 佐藤佳弘：インターネットと人権侵害
匿名の誹謗中傷～その現状と対策、武蔵野大学出版会、東京、2016、pp.81.
- 3) 每日新聞取材班：SNS暴力 なぜ人は匿名の刃をふるうのか、毎日新聞出版、東京、pp.6-75.
- 4) Shetty, N.H. : Slido as a student response system in engineering education, Proceedings of the ASEE Southeastern Section Annual Conference 2020, 57, 2020.
- 5) 糸川萌、大久保雅史：テキストチャットでの匿名性が知人同士の合意形成に及ぼす影響、ヒューマンインターフェース学会論文誌、21：13-20、2019.
- 6) Muthmainnah, N. : An Effort to Improve Students Activeness at Structure Class Using Slido App, Journal of English Education Society, 4(1):1-7, 2019.
- 7) 中田美喜子：ICTを利用したアクティブ・ラーニング－ICT利用の事例－、広島女学院大学論集、67：1-11、2020.
- 8) 吉岡一志、宇田川暢：携帯電話を使ったインラクティブな授業の試み～大教室講義における学生の潜在的な発言を呼び起こす～、山口県立大学学術情報、7：33-40、2014.
- 9) 佐藤広英 吉田富二雄：インターネット上における自己開示－自己－他者の匿名性の観点からの検討－、心理学研究、78(6)：559-566、2008
- 10) 吉岡豊：知らずにやっているネットの危ない習慣、青春出版社、東京、2019、pp.146.
- 11) 佐藤広英：CMCにおける他者の匿名性がコミュニケーション行動に及ぼす効果－情報の種類の観点からの検討－、社会言語科学、15 (1) : 17-28、2012.
- 12) 野入直美：学生コメントの利用と大教室講義における双方向コミュニケーション、メディア教育開発センター研究報告、6:61-72、1999.
- 13) 中川一史、苑復傑：教育のためのICT活用、放送大学教育振興会、東京、2017、pp.145-152.
- 14) 久保田賢一、今野貴之：主体的・対話的で深い学びの環境とICT アクティブ・ラーニングによる資質・能力の育成、東信堂、東京、2018、pp.193-196.
- 15) 江澤義典：情報技術の進展と情報倫理の

課題、関西大学総合情報学部紀要「情報
研究」、49：3-10、2019.

コロナ禍での学生相談室の活動

The Activity Report of the Student Counseling Room in the Coronavirus Spread

茂木 七香¹⁾
Nanaka MOGI

1. 目的

新型コロナウイルス（以下、COVID-19）の感染拡大により、2020年度は異例尽くしの大学生活となった。大垣女子短期大学（以下、本学）でも通常は4月第1週目に実施される全学生向けのオリエンテーションが延期され、5月第2週目から遠隔授業の開始、6月に入ってやっと学生たちが登校して対面授業が始まった。その後も終日のマスク着用、間隔を空けた座席で会話や発言・発声を控えての授業や昼食など、制約の多い大学生活となった。本稿では、コロナ禍での本学の学生相談室活動を振り返って現状を把握するとともに、今後必要な対応について考える。

2. 本学での2020年度の取り組み

(1) 学生相談室のオリエンテーション

例年は4月第1週のオリエンテーション期間に全学年の教室を回り、学生相談室の紹介と相談方法の説明、相談カードの配付などを行っているが、2020年度は中止となった。その代わりに1年次生を対象とした初年次教育の「教養・キャリア基礎演習Ⅰ」の中で保健室と合同の「心身の健康について」という講義を1コマ実施した。学生相談室の場所や相談室内の様子、相談方法などを写真も交えたスライドで説明した。講義の実施は3密を避けるため学内4か所でのMicrosoft

Teamsによる遠隔実施となった。この講義で次に述べるUPI（University Personality Inventory、学生精神的健康調査）の項目の構成や結果説明会についても説明した。

(2) UPIの実施

UPI¹⁾は全国学生保健管理協会によって1968年に開発された心理検査で、大学生の心身の健康状態を把握して早期対応に活かすために多くの大学で用いられている。（項目内容は巻末の付表1を参照）。本学でも2008年度から毎年実施しており、例年はオリエンテーション時にUPI質問用紙を配付しその場で記入させて回収していた。2020年度は5月の遠隔授業期間に学生ポータル（本学のLearning Management System :LMS）を通じてGoogleフォームへの入力という形で実施した。UPI結果の研究利用については2018年度と2019年度に本学研究委員会の審査を経て承認されており（承認番号30-14、R1-7）以下の分析は、研究参加への同意の得られた者の結果のみを用いて行った。

全体の結果をStudentのt検定を用いて2019年度の結果と比較したところ、総合得点と身体症状で有意差が見られた（統計学的有意水準はp<.05とした）。いずれも2019年度の方が高得点で、より不調を示す結果となった（総合得点2019年度13.5点、2020年度12.1点、p=0.034、身体症状2019年度3.4

1) 大垣女子短期大学総合教育センター・学生相談室、臨床心理士・公認心理師

点、2020年度2.5点、 $p<.001$ 、Nは2019年度372名、2020年度394名、図1)。

さらに学年ごとでも、Studentのt検定を用いて2019年度の結果と2020年度の結果を比較した。1年次生では身体症状に有意差が見られ(2019年度3.6点、2020年度2.7点、 $p=0.003$ 、Nは2019年度156名、2020年度171名、図2)、2019年度の方が不調を示す傾向であった。2年次生では総合得点と身体症状、抑うつ傾向に有意差が見られたが(総合得点2019年度14.9点、2020年度11.7点、 $p=0.006$ 、身体症状2019年度3.5点、2020年度2.5点、 $p=0.001$ 、抑うつ2019年度6.4点、2020年度4.8点、 $p=0.002$ 、Nは2019年度153名、2020年度143名、図3)、いずれも2019年度の方が不調を示す傾向であった。3年次生は他学年と異なり、2020年度の方が不調を示す傾向のある項目が多かったが、有意差のあるものはなかった(総合得点2019年度9.7点、2020年度10.9点、抑うつ2019年度4.1点、2020年度4.9点、不安2019年度1.7点、2020年度2.2点、Nは2019年度63名、2020年度80名、図4)。

また、UPI60項目の他に「今、困っていること」「伝えたいこと」などを書く自由記述欄を設けたが、記入者は、2019年度35名、2020年度24名であった。記述のあった者には個別に連絡し必要な場合にはメールでも相談できる旨を伝えた所3名の希望があり、1～3回のメール相談を実施した。

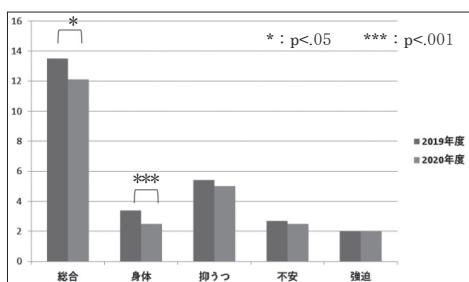


図1 UPI結果の年度別の比較(全体)

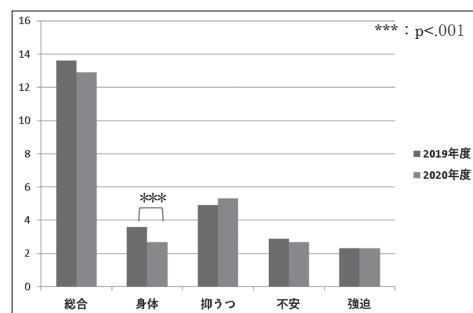


図2 UPI結果の年度別の比較(一年次生)

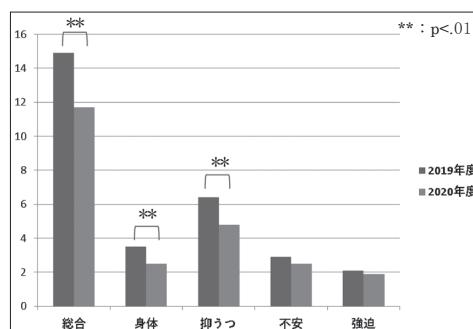


図3 UPI結果の年度別の比較(二年次生)

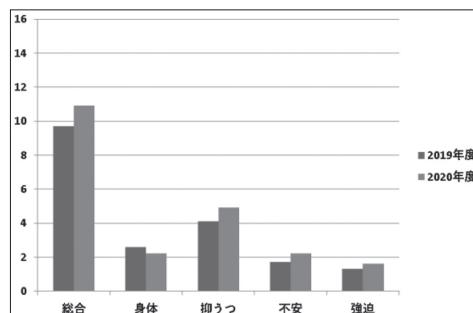


図4 UPI結果の年度別の比較(三年次生)

これらの結果から、全体的にみるとコロナ禍であった2020年度の学生の精神的不調が前年度と比べて高かったわけではないということが分かる。むしろ通常通り新学期が始まり通学していた2019年度の方が不調が多く、特に身体的状態を感じた者が多かった。2020年度の調査実施は遠隔授業が始まって数週間ほどの時期であり、自粛生活で外出を避けながら授業を受け始めた頃であったため、それほど強い不調を自覚することがなかったのかもしれない。しかし他学年と比べて3年生の精神的不調の自覚は2020年度の方が強く、

後に述べる前期の振り返りアンケートの結果とも関連するが、就職活動を行う学年であることが関係しているとも考えられる。

(3) 前期の振り返りアンケートから

前期終了時に遠隔授業期間の振り返りと学生の学習環境や生活状況、精神状態、経済状態、就活への影響などを把握するためのアンケート調査を本学総合教育センターが実施した。COVID-19 による精神的不調について問う項目では、不調を「感じる」「かなり感じる」「強く感じる」と回答した学生は全体の 26.2% であった。学年ごとに集計したところ、1 年次生 25.6%、2 年次生 25.5%、3 年次生 27.8% と、3 年次生で最も多い傾向であった。同アンケート内の COVID-19 の就職活動への影響で「ややある」「かなりある」と答えた学生が 49.6% であったことも精神的不調の原因の一つなのではないかと思われる。このアンケートは匿名で実施したため、学生への結果フィードバック時に不調や問題を抱えている場合の各部署の連絡先を明記した。

(4) その他の活動

例年同様、各学科掲示板に季節ごとの学生相談室だよりを掲示したが、その中に、海外の専門家団体^{2、3)} や日本学生相談学会⁴⁾ からの情報を参考にして COVID-19 の影響で現れやすい精神的不調などに関する説明を掲載し、必要時の学生相談室受診を呼びかけた。また、筆者の担当する授業の中でも、「コロナ不安⁵⁾」「コロナうつ」について取り上げ、一人で抱え込まず誰かに相談するよう呼びかけて学生相談室の利用方法も再度説明した。

(5) 学生相談室の相談件数

遠隔授業実施期間にメールでの相談希望があった。相談者と相談員双方の COVID-19 の感染の可能性も踏まえ、学生相談室の環境整備（①対面席に距離を取るための机・椅子の移動、②手指消毒液の設置）、相談上のルールの提示と申込書の作成（発熱や咳・鼻水などの体調確認項目、緊急時の連絡先と開

示内容など）を新たに実施した。これらの対応には、日本学生相談機関代表者協議会会員とのオンライン上の情報交換により把握した他大学での取組を参考にした。

2020 年度 12 月末時点での相談件数は新規 9 名、継続 3 名、延べ 28 件であり、2019 年度の同期間の 77 件と比較すると非常に少ない。この数字が何を意味するのか、今すぐに理由は明らかにできないが、授業などの日常場面で学生と接していく感じるのは「非日常」感覚である。コロナ禍以前にも継続的に学生相談室を利用していた学生が就活や卒業課題などで忙しくなり、相談に行きたいのだが忙しくてそれどころではない、と言いつながら無事に就職を決め卒業していくケースなどが見られていた。コロナ禍の大学生活はこれらのケースのように、今はとにかく非常事態で目の前のことこなすのに精いっぱいであり自らの悩みや不調に没頭することもできない、という状況なのかもしれない。今 COVID-19 を原因とした退学者や休学者の増加も見られないで、皆何とか自分自身の力で持ちこたえているようだが、今後全体的なケアが必要であると感じる。

2. コロナ禍の学生相談

(1) 学生相談に関する情報共有

突然始まった未曾有の事態に本学の学生相談室ではどのような対応をすれば良いのかを模索していた時に、筆者の所属している日本学生相談学会からの情報が非常に役立った。HP 上⁴⁾への掲載と同時に全会員にメールで送られてきた「新型コロナウィルス感染症（COVID-19）への対応について」は 2020 年 3 月 2 日を始めとして 5 月 27 日までに第 5 報となり、学生への情報や遠隔相談の実施、感染防止を伴った対面相談の留意点など、様々な情報がガイドラインなどとともに届けられた⁶⁾。これらを参考にしながら、本学での新たな相談体制を整えることができた。

大半の大学では遠隔授業が継続されていたため、その後のセミナーや研修会では主に遠隔相談実施上の問題点などが議論され共有されていたが、考えておくべき事態として参考になった。遠隔相談を安全に行うためには相談者が「Wi-Fiのある自分ひとりの部屋」を獲得する必要がある⁷⁾といわれるが、先述の前期の振り返りアンケートから学生の通信環境や機器整備には格差があり、家族から離れた落ち着いた場所で相談することが難しいケースも想定された。今後の感染拡大状況で遠隔相談を導入する際の検討事項である。

(2) 今後、やるべきこと

本学では2020年6月以降2021年1月現在まで対面授業を継続できているため、多くの大学で言われているような遠隔授業による学生の孤立化という問題は生じてはいない。しかしこロナ禍での2020年度の大学生活を、高石（2020）の言う「当然あったはずの『キャンパスライフ』の喪失」と捉えると、「すべての学生にとって、これから長い時間をかけて回復していく必要のある心の傷つきをもたらした」ということとなる⁸⁾。また、COVID-19による影響は、本来学生相談室が主に対象としている精神的健康のみならず、学生本人や保護者の経済状態悪化や就職活動への支障、学習機会の制約など多岐にわたる。このため、「心理学的支援の専門家として、学生の心の回復や成長のための支援を行う」ことが使命である学生相談にとって⁹⁾、学生一人一人が抱える問題を解決し支えるためには、「相談室単体ではなく、教務課や就職キャリア相談など様々な窓口が連携していく必要」があり¹⁰⁾、「これまで大学がやってこなかったようなこともそれぞれの役割を総動員しながらチャレンジしていく姿勢がこれからは必要になる」¹⁰⁾と思われる。

本学でも、学生たちがCOVID-19による慢性ストレスを抱えて生活していることは間違いない事実であるが、そのことは学生相

談室の利用件数にも直接的に表れてはおらず、各学科の学生支援担当教員からも相談として挙がってはこない。授業の折などに聞く個々の学生の声からは、仕方ないとかみんなそうなのだからという諦めとも言える思いが伝わってくるが、だからといっていつまでも頑張れるわけではない。杉原（2020）は学生相談担当者との座談会の中で「大学には相談室があるので来てくださいという待ちの姿勢ではなく、何かしらこちらからアクセスする方法を探っていかなければならないと思っています」と述べており¹⁰⁾、学生相談室に相談に訪れる、という従来の形に囚われずに、学生たちの精神的健康をなんとかして少しでも向上させる方法を考える必要がある。

とりあえず筆者がすぐにできることとしては、「授業に取り入れる」という方法がある。担当授業の中に心の健康への気づきやストレス対処法などの内容を今まで以上に取り入れ、全体の意識を高めるのである。また、「相談予約」という形ではなく、気軽に寄つてちょっと話せる場所があれば、問題を抱えていても「相談するほどのことではないので…」と相談室利用をためらっている学生が足を向けやすいかもしれない。COVID-19感染防止のため対面での会話は極力避ける必要があるのであれば、オンライン上に匿名でつぶやいたりストレスを吐き出したりする場所を作れないだろうか。2021年度を迎えて、学生だけでなく教職員も含め全ての大学構成員がCOVID-19による慢性的な不安とストレスにさらされた状態で過ごすことが予測されるため、学生相談室からの発信でできることは何かを引き続き考えながら臨機応変な対応を行っていくこととする。

文献

- 1) 平山 眞、全国大学メンタルヘルス研究会：大学生のメンタルヘルス管理 UPI 利用の手引き、創造出版、東京、2011、pp.10-11.
- 2) 日本心理学会広報委員会：もしも「距離を保つ」ことを求められたなら あなたの安全のために（アメリカ心理学会の記事の日本心理学会広報委員会による翻訳）https://psych.or.jp/about/Keeping_Your_Distance_to_Stay_Safe_jp/ 2021.1.8.
- 3) 福島県立医科大学グループ：新型コロナウイルス流行時のこころのケア Version1.5 (IASC によるブリーフィング・ノートの日本語翻訳)
<https://interagencystandingcommittee.org/system/files/2020-03/IASC%20Interim%20Briefing%20Note%20on%20COVID-19%20Outbreak%20Readiness%20and%20Response%20Operations%20-%20MHPSS%20%28Japanese%29.pdf> 2021.1.8.
- 4) 日本学生相談学会ホームページ
<https://www.gakuseisodan.com/>
2021.1.8.
- 5) 藤本修：コロナ不安に向き合う、平凡社新書、東京、2020、pp.136-158.
- 6) 日本学生相談学会：遠隔授業に関するガイドライン Ver0.1
https://www.gakuseisodan.com/wp-content/uploads/2020/10/enkaku_soudan_guideline_ver01.pdf 2021.1.8.
- 7) 東畑開人：コロナ時代の愛 つながりを再考する（緊急特集：コロナウイルス時代のカウンセリング 1.0）、臨床心理学、20 (4) : 469-476、2020.
- 8) 高石恭子：学生相談室という場 ニッ チから多様性という価値の実現に向けて（特集コロナ時代の大学）、現代思想、48(14) : 154-162、2020.
- 9) 高野明：コロナ時代の学生相談を考える（緊急特集コロナウイルス時代のカウンセリング 2.0）、臨床心理学、20(5):637-639、2020.
- 10) 杉原保史、西浦太郎、田上正範、早川知宏、音好宏：座談会「コロナ禍における学生の心のケア（小特集 コロナ禍における学生の心のケア）、大学時報、No395 : 16-31、2020.

付表1 UPI の質問項目

1 食欲がない	16 不眠がちである	31 赤面して困る	46 体がだるい
2 吐き気、胸やけ、腹痛がある	17 頭痛がする	32 どもつたり、声がふるえる	47 気にすると冷や汗がでやすい
3 わけもなく便秘や下痢をしやすい	18 首すじや肩がこる	33 体がほてつたり、冷えたりする	48 めまいや立ちくらみがする
4 動悸や脈が気になる	19 胸が痛んだり、しめつけられる	34 排尿や性器のことが気になる	49 気を失つたり、ひきつけたりする
5 いつも体の調子がよい	20 いつも活動的である	35 気分が明るい	50 よく他人に好かれる
6 不平や不満が多い	21 気が小さすぎる	36 なんとなく不安である	51 こだわりすぎる
7 親が期待しすぎる	22 気疲れする	37 独りでいると落ち着かない	52 ぐり返し、確かめないと苦しい
8 自分の過去や家庭は不幸である	23 いらいらしやすい	38 ものごとに自信がもてない	53 汚れが気になって困る
9 将来のことを心配しすぎる	24 怒りっぽい	39 何事もためらいがちである	54 つまらぬ考えがとれない
10 人に会いたくない	25 死にたがなる	40 他人に悪くとられやすい	55 自分のへんな匂いが気になる
11 自分が自分でない感じがする	26 何事も生き生きと感じられない	41 他人が信じられない	56 他人に陰口をいわれる
12 やる気が出でこない	27 記憶力が低下している	42 気をまわしすぎる	57 周囲の人が気になって困る
13 悲観的になる	28 根気が続かない	43 つきあいが嫌いである	58 他人の視線が気になる
14 考えがまとまらない	29 決断力がない	44 ひけ目を感じる	59 他人に相手にされない
15 気分に波がありすぎる	30 人に頼りすぎる	45 とりこし苦労をする	60 気持ちが傷つけられやすい

<身体症状項目>1-4、16-19、31-34、46-49 <抑うつ項目>6-15、21-30

<対人不安項目>36-45 <強迫・関係念慮項目>51-60

彙 報

学外における主な研究・教育並びに社会活動 (令和2年4月～令和3年3月)

A. 論文・著書、学会等研究活動、作品展・演奏活動

論文・著書

氏名	共同研究者	題目	形式	発表の場	発表年月日
松村 齋	大橋 淳子 垣添 忠厚 他	子どもとともに未来をデザインする 保育者・教育者論	共著	わかば社	2.10.25
	田中 卓也 (静岡産業大学) 他	日本乳幼児教育学会自主シンポジウム	指定討論者	愛知教育大学 (遠隔地 による)	2.11.14
光井 恵子	越山沙千子 他	領域「表現」における「専門的事項」の教 授内容の検討～教科書目次及びシラバスの テキストマイニングをもとに～	論文	乳幼児教育・保育者養 成研究 第1号	2.11.20
	吉永 早苗 他	領域「表現」の遠隔授業事例から考 える「保育者の実践力」	ポスター発表	日本乳幼児教育・保育 者養成学会 保育教諭 養成課程研究大会	2.12.6
田中 久志		マンガ社会のとびら	新聞連載	中日週刊こどもウイー クリー	2.1.4～ 2.6.20
伊豫 治好	中山 唯 三宅 佑佳 (デザイン美術 学科学生)	「すきなせかい」 「寒地の使い」	出展及び受賞	「ASIAGRAPH 2020 in Gifu CG Art Gallery」	2.11.25
宮川 友子		Stay at home	作品	Twitter	2.4.12
		名古屋市 子ども・若者 総合相談セン ター 終結カード	作品	名古屋市 子ども・若 者 総合相談センター	2.10.1
		所蔵ポスター展リーフレット寄稿「ワ ルシャワ・ショーモン・ラハティ 世界の、 ポスターのある街から。」	執筆	日本国際ポスター美術館	2.10.23
		大垣城ライトアップ告知ポスター	ポスター	大垣市内各所	2.11.1
	デザイン美術学科 学生 1名	大垣まつり行列ポスター展「神楽山車、 大黒山車、恵比須山車」	ポスター	OKBストリート、 大垣共立銀行本店	2.11.22～ 3.1.31

氏名	共同研究者	題目	形式	発表の場	発表年月日
宮川 友子	デザイン美術学科 学生 2 名	大垣女子短期大学デザイン美術学科 1 年生有志展「Chirari」 「ピアノトリオコンサート」ポスター	ポスター ポスター	大垣女子短期大学 ぎふ清流文化プラザ	2.12.16 3.1.6
	デザイン美術学科 学生 3 名	大垣市トリックアートによる街づくり 実証実験 「Cello Cello Cello! チェロ四重奏演奏会」ポスター	作品 ポスター	大垣市役所 ぎふ清流文化プラザ	3.2.22 ~ 3.31 3.3.31
小原 勝	目瀬 浩 山本 大介 高倉 裕明 海原 康孝 石川 隆義	採取唾液 48 時間後の口腔常在菌叢の 変化	原著論文	全国大学歯科衛生士教 育協議会雑誌 10 号(通 算 25 号) 29 ~ 38	3.3.15
海原 康孝	村上 大輔 稻田 紘美 齊藤 一誠 海原 康孝 野上有紀子 櫻井 薫 山崎 要一 新里 法子 海原 康孝 笠原妃佐子 上田 裕次 上川 克己 細原 賢一 山崎 健次 香西 克之 Nogami Y., Saitoh I., Inada E., Kaihara. Y., et. al Inada E., Saitoh I., Kaihara. Y., Yamasaki Y.	第 57 回日本小児歯科学会大会 小児 における顔面軟組織成長変化の長期縦 断研究 第 5 回日本子ども虐待防止歯科研究会 学術大会 「被虐待児童のスクリーニ ングに役立つ小学校教員を対象とした 質問項目の検討」	学会(ポス ター発表) 学会(ポス ター発表)	オンライン開催 オンライン開催	2.5.21 ~ 2.5.22 2.11.8
		Prevalence of an incompetent lip seal during growth periods throughout Japan: a large-scale, survey-based, cross-sectional study	原著論文	Environmental Health and Preventive Medicine	3.1.21
		Factors related to mouth-breathing syndrome and the influence of an incompetent lip seal on facial soft tissue form in children	総説	Pediatric Dental Journal	3.3.6
	小原 勝 目瀬 浩 山本 大介 高倉 裕明 海原 康孝 石川 隆義	採取唾液 48 時間後の口腔常在菌叢の 変化	原著論文	全国大学歯科衛生士教 育協議会雑誌 第 10 号, 29-38	3.3.15

氏名	共同研究者	題目	形式	発表の場	発表年月日
久本たき子	飯岡 美幸	他職種からみた歯科衛生士業務の認知度調査結果報告	ポスター発表	日本歯科衛生教育学会 (WEB)	2.12.18～ 2.12.28
水嶋 広美	相原 喜子 夏目 長門 新崎 章 井村 秀人 新美 照幸 速水 佳世 古川 博雄 高坂 利美 西條 英人 相原 喜子 夏目 長門 早川 統子 井上知佐子 伊藤真里奈 井村 秀人 新美 照幸 古川 博雄 高坂 利美	歯科衛生士国家試験における先天異常に関する出題傾向 第2報 第24回(2015年)～第28回(2019年) 歯科衛生士国家試験における先天異常に関する出題傾向	ポスター 論文	第17回口腔ケア学会 総会・学術大会 日本口腔ケア学会 14(2)	2.9.2 2.11.8
今井 藍子	阿尾 敦子 川畠 智子	歯科衛生学科学生のルーブリック評価を活用した相互実習レポートの教育効果に関する検討	論文	大垣女子短期大学紀要 第61号	2.5.31
川畠 智子	阿尾 敦子 藤澤さち子 今井 藍子 久本たき子	歯科衛生学科学生による歯科保健指導を受けた看護学科学生の意識変化に関する調査報告	論文	大垣女子短期大学紀要 第61号	2.5.31
鍼原 直美		小児看護学実習における学生の対象理解～実習終了時の面接記録からの分析～ 学童期にある慢性疾患児の病気認知と自己評価	Web 発表 論文	第51回 日本看護学会 看護教育 小児保健研究 第79卷第6号	2.11.1～ 2.11.30 2.11.30
戸村 佳美	緒方京 我部山キヨ子 緒方京 我部山キヨ子 緒方京 我部山キヨ子	母親が捉える男児の性への興味・関心の程度 母親が男児に伝えたいと考える性教育—小学校高学年の男児を持つ母親の調査から— 小学校高学年の男児の性に関する母親の不安	ポスター発表 ポスター発表 ポスター発表	第39回 日本思春期 学会 第61回 日本母性衛生学会 第61回 日本母性衛生学会	2.9.17～ 2.9.23 (Web開催) 2.10.9～ 2.10.10 (Web開催) 2.10.9～ 2.10.10 (Web開催)
茂木 七香		UPI(University Personality Inventory)を用いた、学生相談室利用促進のための取組	論文	大垣女子短期大学紀要 第61号	2.5.31

氏名	共同研究者	題目	形式	発表の場	発表年月日
茂木 七香		女子短期大学における「女性学」授業のあり方 —本学の取り組みを振り返って—	論文	大垣女子短期大学紀要 第 61 号	2.5.31
	矢田貝真一	初年次教育における全学科混成少人数グループ演習（基礎ゼミ）の役割と成果	論文	大垣女子短期大学紀要 第 61 号	2.5.31
	矢田貝真一	他学科学生との交流が初年次生の学修意欲に及ぼす効果 —全学科混成少人数グループ演習（基礎ゼミ）ワークシートの分析から—	学会発表 (不収集)	初年次教育学会第 13 回大会発表要旨集 50-51	2.9.4

B. 社会的・啓発的活動

氏名	主催・共催	題目	形式	発表の場	発表年月日
松村 齋	岐阜県教育委員会	岐阜県発達障がい児童生徒支援事業	専門支援員	岐阜県	2.4.1
	岐阜県障害福祉課	岐阜県地域療育システム推進会議	学識経験者	岐阜県	2.4.1
	大垣市学校教育課	大垣市教育支援会議	学識経験者	大垣市	2.4.1
	長浜市	長浜市専門家チーム及び巡回相談員	学識経験者	長浜市	2.4.1
	滋賀県教育委員会	滋賀県初任者研修（幼稚園）	講師	滋賀県	2.7.21
	滋賀県教育委員会	滋賀県 10年経験者研修	講師	滋賀県	2.8.24
光井 恵子	文部科学省	教員免許状更新講習「幼児期における音楽表現活動の必要性」	講師	大垣女子短期大学	2.8.5
	文部科学省	教員免許状更新講習「幼児期の運動と音楽表現」	講師	大垣女子短期大学	2.8.7
	大垣市こども未来部子育て支援課	大垣市子育て支援会議	会長	大垣市	2.10.21
	大垣市子育て総合支援センター	子育て講座	講師	大垣市南部子育支援センター	2.9.24 3.1.25
今村 民子	笠松町	子育て応援教室たんぽぽ	講師	笠松町保健センター	2.6.15 2.7.20 2.8.31 2.9.15 2.10.27 2.11.24 2.12.22 3.1.26 3.2.16 3.3.23
	文部科学省	免許状更新講習「保護者支援～よりよい関係づくりを目指して～」	講師	大垣女子短期大学	2.8.23 2.8.24
	笠松町振興公社	笠松町ことばの教室学習会	講師	笠松町ことばの教室	3.2.8
	大垣市子育て支援課	大垣市墨俣児童館運営委員会	委員長	大垣市墨俣地域事務所	3.2.16
	大垣市子育て支援課	大垣市「保育士等職場復帰セミナー」	講義	大垣市南部子育て支援センター	2.10.5
垣添 忠厚	垂井町	垂井町子ども子育て会議	会長	垂井町	2.4.1
	文部科学省	教員免許状更新講習「幼児の運動」	講師	大垣女子短期大学	2.8.6

氏名	主催・共催	題目	形式	発表の場	発表年月日
立嶋 博則	文部科学省	教員免許状更新講習「子どもの造形表現とこころ」	講義・演習	大垣女子短期大学	2.8.19 2.8.20
	山県市保育研究会	子どもと楽しむ造形表現	講義・演習	山県市高富保育園、伊自良保育園、みやま保育園、大桜保育園、富岡保育園、富波保育園、梅原保育園（遠隔で実施）	3.1.31
名和 孝浩	文部科学省	教員免許状更新講習「幼児の遊びの充実と保育の質」	講師	大垣女子短期大学	2.8.6
	キートスガーデン幼稚園	保育でみられる遊びのしかけ	講師	キートスガーデン幼稚園	3.3.13
田中 久志	岐阜新聞社	第48回岐阜県広告協会賞 審査会	委員長		2.5.28
	岐阜県図書館企画課企画振興係	おすすめの1冊コンクール イラストポップ部門 作品審査会	委員		2.10.24
田中 久志 黒田 皇 伊豫 治好 長久保光弘 宮川 友子	大垣女子短期大学	ASIAGRAPH 2020 in Gifu CG Art Gallery 作品展示部門	運営	岐阜県美術館	2.11.25～ 2.11.29
宮川 友子	公益財団法人みらい芸術・文化基金	公益財団法人みらい芸術・文化基金 評議員	評議員		継続
	International Reggae Poster Contest	Pre-selection Judging	審査員	https://www.reggaepostercontest.com/	2.5.10
	Bienal del Cartel Bolivia BICeBé	International Poster Design Council BICeBé	評議員		2.6.1
	大垣市都市計画課	都市計画景観審議会	委員		2.8.6～
	ポーランド日本情報工科大学	For Against Poster Competition	審査員	Dydo Poster Gallery in Kraków (展覧会)	2.10.3
	日本国際ポスター美術館	第19回全国高校生ポスターコンクール	審査員		3.2.20
	日本国際ポスター美術館	所蔵ポスター展トーク	講演		2.10.23
	神戸町	神戸町公用車ラッピングデザイン	研究事業	神戸町	3.2.16～
服部 篤典	大森石油株式会社	オーモリウンドアンサンブルファミリーコンサート	指揮	愛知文理大学文化フォーラム（稲沢市民会館）	2.12.5
	愛知淑徳学園	愛知淑徳中学・高等学校吹奏楽部第34回定期演奏会	指揮	日本特殊陶業市民会館	3.3.24

氏名	主催・共催	題目	形式	発表の場	発表年月日
菅田 文子	日本音楽療法学会四国支部	音楽療法で使う即興と伴奏	講演	オンライン	2.9.13
鈴木 孝育	愛知県吹奏楽連盟	愛知県高等学校吹奏楽連盟	顧問	愛知県	2.4.1～
	東海吹奏楽連盟	東海吹奏楽連盟	事務局次長	東海	2.4.1～
	大垣市	大垣市行政不服審査会	委員	大垣市	2.10.1～
	大垣市	大垣市情報公開審査会	委員	大垣市	2.10.1～
	大垣市	大垣市個人情報保護審査会	委員	大垣市	2.10.1～
愛知県吹奏楽連盟	2020年度中部日本個人・重奏コンテスト県大会		審査員	西尾市文化会館	3.2.27
愛知県吹奏楽連盟	愛知県高等学校吹奏楽連盟理事会		顧問	朝日新聞名古屋本社	3.3.16
岐阜県	岐阜県後期高齢者医療広域連合情報公開・個人情報保護審査会		委員	岐阜県	3.3.23～
「管楽器ソロコンテスト in 東海」実行委員会	第7回管楽器ソロコンテスト in 東海		審査員	名古屋芸術大学	3.3.29
岐阜県立長良高等学校・岐山高等学校	岐阜県立岐山高校・長良高校合同発表会		講師	岐阜県立岐山高等学校	2.12.6
松永 幸宏		管楽器調整会	修理	松栄堂楽器本店	2.7.4
横井 香織	公益財団法人 大垣国際交流協会	公益財団法人 大垣国際交流協会 令和2年度 定時評議員会	評議員	大垣市スイトピアセンター	2.6.17
	大垣市	大垣市市民環境賞選考委員会	委員	大垣市	2.9.30～ 3.3.31
	大垣市	大垣市環境審議会	委員	大垣市役所	2.10.9 2.10.29
大垣市教育委員会	大垣市日本昭和音楽村運営協議会		委員	大垣市日本昭和音楽村	～2.10.31 2.11.1～
カワイ音楽コンクール委員会	第54回カワイ音楽コンクール カワイこどもピアノコンクール 岐阜地区オーディション		審査員	岐阜市文化センター小劇場	2.12.26 3.1.17
カワイ音楽コンクール委員会	第54回カワイ音楽コンクール カワイこどもピアノコンクール 名古屋地区オーディション		審査員	中電ホール	3.1.10

氏名	主催・共催	題目	形式	発表の場	発表年月日
石川 隆義	全国大学歯科衛生士教育協議会	令和2年度第1回全国大学歯科衛生士教育協議会役員会	意見交換	ZOOM会議	2.7.2
	全国大学歯科衛生士教育協議会	令和2年度第2回全国大学歯科衛生士教育協議会役員会	意見交換	ZOOM会議	2.7.21
	日本歯科心身医学会	令和2年度日本歯科心身医学会理事・評議員会	意見交換	ZOOM会議	2.7.29
	大垣市	令和2年度第1回大垣市行政改革推進審議会	審議委員	大垣市役所	2.7.30
	文部科学省	教員免許状更新講習「保育者が知つておきたい子どもの歯と口の病気」	講演	大垣女子短期大学	2.8.8
	全国大学歯科衛生士教育協議会	令和2年度第3回全国大学歯科衛生士教育協議会役員会	意見交換	ZOOM会議	2.8.20
石川 隆義 久本たき子 水嶋 広美	岐阜県歯科医師会・大垣女子短期大学	岐阜県歯科医師会への第1回臨床実習説明会	会議	岐阜県歯科医師会館	2.8.27
石川 隆義 久本たき子 水嶋 広美 飯岡 美幸	岐阜県歯科医師会・大垣女子短期大学	岐阜県歯科医師会への第2回臨床実習説明会	会議	岐阜県歯科医師会館	2.9.3
石川 隆義 久本たき子 水嶋 広美	岐阜県歯科医師会・大垣女子短期大学	大垣歯科医師会への第2回臨床実習説明会	会議	大垣歯科医師会館	2.9.3
石川 隆義	全国大学歯科衛生士教育協議会	令和2年度全国大学歯科衛生士教育協議会臨時総会・教育研究委員会	意見交換	ZOOM会議	2.9.5
	大垣市	令和2年度第2回大垣市行政改革推進審議会	審議委員	大垣市役所	2.10.1
	大垣市	令和2年度大垣市個人情報保護審議会	議長(会長)	大垣市役所	2.10.5
	大垣市	令和2年度第3回大垣市行政改革推進審議会	審議委員	大垣市役所	2.10.14
	大垣市	令和2年度第4回大垣市行政改革推進審議会	審議委員	大垣市役所	2.11.2
	大垣市	令和2年度第5回大垣市行政改革推進審議会	審議委員	大垣市役所	3.2.3
石川 隆義 久本たき子 海原 康孝 水嶋 広美	大垣女子短期大学・大垣歯科医師会	大垣女子短期大学と大垣歯科医師会との懇談会	意見交換	大垣女子短期大学	3.3.11

氏名	主催・共催	題目	形式	発表の場	発表年月日
石川 隆義	広島大学歯学部	チーム歯科医療学	講義	広島大学歯学部	2.7.2
	文部科学省	教員免許状更新講習「保育者が知つておきたい子どもの歯と口の病気」	講演	大垣女子短期大学	2.8.21
小原 勝	大垣市	令和2年度 大垣市公営企画等審議委員会	委員	大垣市役所	2.8.12
海原 康孝	文部科学省	教員免許状更新講習会「保育者が知つておきたい子どもの歯と口の病気」	講演	大垣女子短期大学	2.8.8
	文部科学省	教員免許状更新講習会「保育者が知つておきたい子どもの歯と口の病気」	講演	大垣女子短期大学	2.8.21
	ネットワーク大学コンソーシアム岐阜	講演会 令和2年度公開講座「岐阜に生きる 岐阜と生きる」 第8回 地域で育む輝く子どもの未来ー児童虐待防止に向けて私たちができることー	学術講演会	岐阜大学サテライトキャンパス	2.10.1
	羽島市歯科医師会	指導者研修会 「歯科からの気になる子どもたちへの支援ー児童虐待防止への取り組みと発達障害児（者）に対する対応ー」	学術講演会	笠松中央公民館	2.10.15
		岐阜県歯科衛生士会西濃支部	役員		31.4.1～ 3.3.31
水嶋 広美	日本口腔ケア学会	日本口腔ケア学会	評議員		2.4～
野網 淳子	岐阜県立大垣商業高等学校	新型コロナウィルス感染症等の感染症対策に対する理解を深める	講義・演習	岐阜県立大垣商業高等学校	2.1.15
戸村 佳美	A病院産科病棟	産後2週間健診に関する研究	共同研究	A病院	1.8～継続
	北方町立北方小学校	命を大切にするために	講演	北方町立北方小学校	2.12.22
	岐阜協立大学	母子を見守り支援する社会を目指して	講演	岐阜県立大垣商業高等学校	3.1.8
矢田貝真一	大垣市	大垣市廃棄物減量等推進審議会	審議会委員（会長）	大垣市	継続
	岐阜県後期高齢者医療広域連合	情報公開・個人情報保護審査会	審査会委員（会長）	岐阜県後期高齢者医療広域連合	継続
	大垣市	情報公開・個人情報保護審査会	審査会委員	大垣市	継続
茂木 七香	大垣市地域創生戦略課	大垣市地域創生総合戦略推進委員会	委員	大垣市役所	
	大垣市男女共同参画推進室	大垣市男女共同参画推進審議会	委員	大垣市役所	
	大垣市役所企画部人事課	大垣市メンタルヘルス事業	講義・個別相談員	大垣市役所	2.4.1～ 3.3.31

氏名	主催・共催	題目	形式	発表の場	発表年月日
茂木 七香	文部科学省	教員免許状更新講習「子どもの造形表現とこころ」	講義	大垣女子短期大学	2.8.19 2.8.20
	大垣市立主任保育者会	大垣市立主任保育者会 第2回研修会	講演	南部子育て支援センター	2.8.21
	ネットワーク大学コンソーシアム岐阜	子育て期の疑問や不安の解消に役立つ 心理学の知識	講義	岐阜大学サテライト キャンパス	2.9.16
	大垣市・大垣女子短期大学	子育てママ大学「子育て中の『なぜ?』」 を解き明かす～知っていると役に立つ 発達心理学～」	講演	大垣女子短期大学	2.10.1

C. 出前講義

氏名	主催・共催	題目	形式	発表の場	発表年月日
大橋 淳子	株さんぼう	高校内ガイダンス	講義・実技	岐阜県立大垣養老高等学校	2.11.11
	株ライセンスアカデミー	進路ガイダンス	講義・実技	岐阜県立揖斐高等学校	2.11.26
	株さんぼう	高校内ガイダンス	講義・実技	岐阜県立大垣養老高等学校	2.12.9
垣添 忠厚	株昭和広報	進路ガイダンス（職業理解）「幼児教育の職業」	講義・実技	富田高等学校	2.10.22
	株ライセンスアカデミー	進路ガイダンス（分野別模擬授業）「幼稚園教諭・保育士」	模擬授業	岐阜県立飛騨神岡高等学校	2.10.27
	株さんぼう	高校内ガイダンス（分野別説明会）「保育・幼児教育」	講義	岐阜県立海津明誠高等学校	2.11.11
	株昭和広報	進路ガイダンス（体験授業）「保育・幼児教育」	講義・実技	岐阜県立揖斐高等学校	3.2.4
立崎 博則	株さんぼう	高校内ガイダンス	講義・演習	岐阜県立岐阜総合学園高等学校	2.10.22
	株さんぼう	進路フェスタ「素材の色や形に注目して、あなた限定フラペチーノを作ろう」	講義・演習	岐阜市文化センター	2.12.1
	株昭栄広報	進路ガイダンス「森のお弁当を作ろう」	講義・演習	岐阜県立羽島高等学校	2.12.9
名和 孝浩	株日本ドリコム	高校ガイダンス	分野別説明会	岐阜県立岐阜総合学園高等学校	2.10.26
	株日本ドリコム	体験授業「保育者になるってことは」	模擬授業	岐阜県立不破高等学校	2.10.27
	株日本ドリコム	高校ガイダンス	分野別説明会	岐阜県立池田高等学校	2.11.11
	株昭栄広報	進路ガイダンス	分野別説明会	岐阜県立農林高等学校	2.11.27
	大垣市立東中学校	職業講話「保育者のお仕事について学んでみよう」	講師	大垣市立東中学校	2.11.30
	株昭栄広報	体験授業「保育者になるってことは」	模擬授業	岐阜県立山県高等学校	3.1.18
	株さんぼう	高校ガイダンス	分野別説明会	岐阜県立華陽フロンティア高等学校	3.1.28
田中 久志	岐阜県立岐阜工業高等学校	系統・分野別分科会	講義	岐阜県立岐阜工業高等学校	2.12.2
	岐阜県立華陽フロンティア高等学校（通信制）	職業別体験授業（デザイン・アニメ・マンガ）	講義・演習	岐阜県立華陽フロンティア高等学校	2.12.6
伊豫 治好	岐阜県立岐阜商業高等学校	職業別体験授業（イラスト・マンガ）	講義・演習	岐阜県立岐阜商業高等学校	2.10.15

氏名	主催・共催	題目	形式	発表の場	発表年月日
伊豫 治好	富田学園富田高等学校	職業別体験授業（イラスト・アニメ・マンガ）	講義・演習	富田学園富田高等学校	2.10.22
	岐阜県立大垣桜高等学校	魅力的なポーズと構図	講義・演習	岐阜県立大垣桜高等学校	2.11.19
	岐阜県立岐阜商業高等学校	職業別体験授業（イラスト・デザイン）	講義・演習	岐阜県立岐阜商業高等学校	2.12.10
黒田 皇	富田高等学校	デザイン系の職業について	進路ガイダンス	富田高等学校	2.10.22
	岐阜県立揖斐高等学校	美術について	進路ガイダンス	岐阜県立揖斐高等学校	2.11.26
	岐阜県立岐阜農林高等学校	デザイン分野について	進路ガイダンス	岐阜県立岐阜農林高等学校	2.11.27
	岐阜県立岐阜商業高等学校	美術・デザイン・アニメ・マンガ	進路ガイダンス	岐阜県立岐阜商業高等学校	2.12.10
	岐阜県立恵那農業高等学校	芸術の分野における「美術」と「デザイン」	進路ガイダンス	岐阜県立恵那農業高等学校	3.1.28
	滋賀県立伊香高等学校	「文字を効果的にデザインする」体験授業	進路ガイダンス	滋賀県立伊香高等学校	3.2.4
	滋賀県立古知野高等学校	デザイン教育について	進路ガイダンス	滋賀県立古知野高等学校	3.3.17
長久保光弘	株さんぼう	アニメの分野における、「イラスト」と「アニメ」と「マンガ」の違いについて	オンラインガイダンス (Zoom)	岐阜県立恵那農業高等学校	3.1.28
松永 幸宏	大垣女子短期大学	進学相談会		鹿児島県鹿児島市	2.5.30
	大垣女子短期大学	進学相談会		福岡県博多市	2.5.31
石川 隆義	大垣市保育者等研究推進委員会	子どもの口の健康	講演	中川ふれあいセンター	2.9.7
海原 康孝	株昭栄広報	進路ガイダンス（1年生）	高校ガイダンス	岐阜県立東濃高等学校	2.10.19
阿尾 敦子	株ライセンスアカデミー	お口のクリーニング	職業別体験授業	岐阜県立池田高等学校	2.10.7
	株昭栄広報	進路ガイダンス	分野別ガイダンス	岐阜県立岐阜農林高等学校	2.11.27
水嶋 広美	株さんぼう	富田高等学校	小集団指導	進路説明会（2年生対象）	2.10.8
	株さんぼう	誠信高等学校	小集団指導	分野別模擬授業（2年生対象）	2.11.10

氏名	主催・共催	題目	形式	発表の場	発表年月日
飯岡 美幸	株さんぼう	お口の健康を守るには	職業別体験授業	岐阜県立不破高等学校	2.10.20
	株さんぼう	歯科衛生士のお仕事紹介	職業別体験授業	近江高等学校	2.12.11
藤澤さち子	株ライセンスアカデミー	進路ガイダンス	体験授業	岐阜県立池田高等学校	2.10.7

D. 公開講座

学科	テーマ	講師	会場	開催日
音楽総合学科	初めてのオカリナ	株式会社 STUDIO fiato 柿内 美緒	C号館3階多目的ホール	2.6.20

※当該年度は上記公開講座を予定しておりましたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため
実施を見送りました。

大垣女子短期大学 紀 要

第 62 号 (非売品)

印刷日 令和 3 年 5 月 31 日

発行日 令和 3 年 5 月 31 日

編 集 図書・生涯学習委員会

発 行 大垣女子短期大学

大垣市西之川町 1-109

TEL 〈0584〉 81-6811

印 刷 ニホン美術印刷株式会社

大垣市西外側町 2-15

TEL 〈0584〉 78-2171